

東北北半における縄文晩期前葉の注口土器

小林 圭一

1 はじめに

注口土器は細い管状の注ぎ口を持つ、急須に似た形態の土器で、多様な器種で構成される縄文時代晩期亀ヶ岡式土器の中にあっても、その精巧な造作と複雑な装飾文様から、亀ヶ岡式の象徴的な存在とも言える器種である。晩期のほぼ全般（大洞B式～同A式）を通して製作されたが、特にその前半の時期に発達が著しく、変化の過程を鋭敏に示す器種として、型式区分の指標としての役割を担っていることは、多くの研究者の認めるところであろう。

一般に亀ヶ岡式土器は、深鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口・香炉形土器で構成され、碗形や台付等が加わるが、その母体は後期後葉の瘤付土器にある。それぞれが形態を変化させながら亀ヶ岡式に継承されるが、注口土器は後期の壺形に系統的な脈絡を有しており、晩期になって独立した器種として確立したものである。後・晩期の弁別については、研究者間の合意を見るに至っていないが、晩期を亀ヶ岡式の成立をもって定義づけるならば、「注口土器の確立＝亀ヶ岡式土器の成立」と見ても、大過はないように思われる。

本稿では、亀ヶ岡文化の中心地域である東北北半（青森県・岩手県・秋田県）の注口土器について、後期末葉（瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階）から晩期前葉（大洞BC2式）までの検討を通して、後期注口土器から晩期注口土器への系統的变化の過程を考察する。注口土器についての型式細分案を提示することで、筆者の考える該期の型式編年的一端を明確にし、今後進展するであろう編年研究の指針にしたいと考える。

なお注口土器は注口形、注口付土器とも称されるが、本稿では一般的な注口土器の名称を用いる。また注口土器は液体状の物質を注ぐ目的に使用され、精巧な造作から非日常的な土器と考えられるが、本稿では編年を主眼としたため、用途については言及しない。

2 研究史

注口土器全般の研究史については、鈴木克彦氏の論攷（鈴木克彦 1997）に詳しいので、ここでは亀ヶ岡式成立期の注口土器に関わる研究を主に取り上げる。

亀ヶ岡式の注口土器が考古学的な検討課題として扱われたのは、昭和初期の中谷治宇二郎氏の研究（中谷 1926・27a・27b・36）を嚆矢とする。中谷氏はそれまで土瓶形と急須形に区分されていた注ぎ口を持つ土器に対して、一括して注口土器の名称を与えた先駆者で、取り分け 1927 年に刊行された『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』は、当時収集し得た殆どの資料を駆使した大著で、今日的に見ても注口土器の類型をほぼ網羅しており、注口土器の形態分類と地理的分布といった考古学の基礎作業をなしたという点で、評価されるものである¹⁾。

中谷氏は、注口土器を器形と文様によって四つの型式に分類し、その地域的分布と出現頻度等から文化の領域（文化圏）を設定し、更にはそれ等の文化の伝播経路にも言及した。陸奥式（亀ヶ岡式）に属する注口土器は、C型（急須型）とD型（粗製の型式・退化型式）に区分され、C・D型の東北地方を中心とした分布の偏在性と、A型（把手付）→B型（土瓶型）→C型と「支配的な型の領域」が北方に漸次移行する文化伝播の在り方が指摘された。

中谷氏の見解は、1930 年前後に論議された所謂「南漸・北漸論争」に直接与するものではなかったが、後者に立脚していたことは明白であり、当時整備されつつあった編年の視点を全く欠いていた。注口土器の変遷序列や研究方法上の不備に対しては山内清男氏の痛烈な批判（山内 1929）があり、特に文様を持たないD型注口土器をC型からの派生と捉えた系統観は完全に否定され、今日の編年研究において顧みられることは殆どない。

統計的手法や先史地理学的手法を導入した画期的な研究ではあったが、山内氏の精緻な型式研究を眼前にして

は、脆くも崩れ去るしかなかったと言えよう。

1930年山内清男氏により亀ヶ岡式土器の6細別案が提示され、亀ヶ岡式の変遷序列が確定した(山内1930)。今日の晩期編年研究の根幹をなすものであるが、亀ヶ岡式の鉢形についての記載が主であったため、注口土器を直接論究することではなく、関東地方出土の注口土器についての解説にとどまっていた²⁾。

山内氏が注口土器の型式変化に言及したのは、1964年刊行の『日本原始美術 1 縄文式土器』の「文様帯系統論」(山内1964)の注においてである。山内氏は注口土器の型式毎の変化について、その形制³⁾の変化と文様帯の重畳の観点から解説したが、注口土器の型式毎の特性が的確に規定されたことで、鉢形と共に型式判別の指標としての役割が付与され、今日においても編年研究の典拠となっている。筆者の研究も山内氏の方針に準じており、山内氏についての詳細は後述する。また同氏はこの中で亀ヶ岡式9細別案を初めて明記し、注口土器の形制から大洞B式の細分(大洞B1・B2式)を論じた。しかし他の細分型式(大洞BC1・A2式)の内容について具体的説明はなく、基本資料の提示のないまま、型式名のみが独り歩きする弊害をもたらしたことは否めず、大勢の支持を得るには至らなかった。

山内氏の亀ヶ岡式再細分に先立ち、芹沢長介氏によって「雨滝式」の問題が提起された(芹沢1960)。1958年岩手県雨滝遺跡を再度調査した芹沢氏は、大洞B式と同BC式が相伴したという層位的状況から、この2型式を「雨滝式」として統合し、1930年に設定された山内氏の編年に疑念を表明した⁴⁾。これに対し山内氏は亀ヶ岡式の再細分という形で応戦したことは、前記した通りである。芹沢氏は層位的所見を踏まえて、三叉文と羊歯状文は文様系統の差異として、同時期に並行して使用されたと主張したが、今日的知見では、入組三叉文と羊歯状文がある時期併存の関係にあったことは疑いなく、その点では芹沢説にも一理ある。しかし近年の研究の動向が示すように、大洞B・BC式の区分は、同氏が意図した統合化の歩みとは裏腹に、細分化を指向しており、少なくとも両式が系統的に異なるという考えは否定され(高橋龍三郎1999)、過渡的型式としての大洞BC1式が存在意義が検討されて来ている(金子1992a・b)。

その後、亀ヶ岡式の注口土器を対象とした研究として、

藤村東男氏の研究(藤村1972)がある。藤村氏は山内氏が示した型式変化を更に吟味すると共に、注口土器を「急須形で口縁が内傾するもの(A型)」、「急須形で口縁が外反するもの(B型)」、「ツボ形に近い形態となるもの(C型)」の3形態に区分し、今日通用となっている分類の基礎を築いた。また藤村氏は後期後半の注口土器との比較から、晩期初頭(大洞B・BC式)の様相が大きく異なり、晩期になって独自の展開を示すことを指摘した。しかし同氏が対象とした後期後半の注口土器は、瘤付土器前半期に帰属するものであり、大洞B式の細分に消極的態度をとっていた以上(藤村1980)、懸隔が存するのは当然の帰結であったと言えよう⁵⁾。

安孫子昭二氏は、藤村氏の分類を踏襲して注口土器を3形式に分類し、山内氏の亀ヶ岡式9細別案に準拠した注口土器の配列を模式図を用いて解説した(安孫子1982)。模式図では、大洞B2式に出揃った各型式の消長が具体的に図示されており、特に大洞BC1式段階が規定されたことで、変遷の細かな階梯が跡づけられた。A・B形式の組列については、形を変えて各種の概説書にも引用されており(佐原1979、小林達雄1994)、注口土器の型式変化の理解に大きく貢献している。しかし各段階の同時性や型式認定の根拠は不明瞭であり、特に大洞B2式と同BC1式の型式内容には問題を残している。

鈴木克彦氏は、亀ヶ岡式の成立を論じる中で、後期末～大洞B式の注口土器を考察した(鈴木克彦1981)。鈴木氏は注口土器の底部や体部の形状に判断の基準を見出し、「大洞B式の中でも古手」の段階を抽出した。取り分け後期末と晩期注口土器の差異について、前者が平底又は上げ底の小形底部であるのに対し、後者は丸底を呈するといった明快な基準を示して、後期末～晩期初頭の3段階の変遷を解説した(図1)。同氏は十腰内第Ⅵ群土器を大洞B1式とする従前の編年(今井・磯崎1968)には慎重な態度をとったが、新たに大洞B式の細分案を提示したことで、亀ヶ岡式注口土器の成立過程を明確なものとした。しかし後年型式区分に改変が加えられたことは、遺憾と言わざるを得ない(鈴木克彦1997)。

当該期の注口土器に対し最も精緻な編年案を提示しているのは、金子昭彦氏である(金子1991)。金子氏は東北全域の晩期前葉の注口土器を集成して、山内清男氏に準拠した注口土器の細かな階梯案を提示した。同氏は

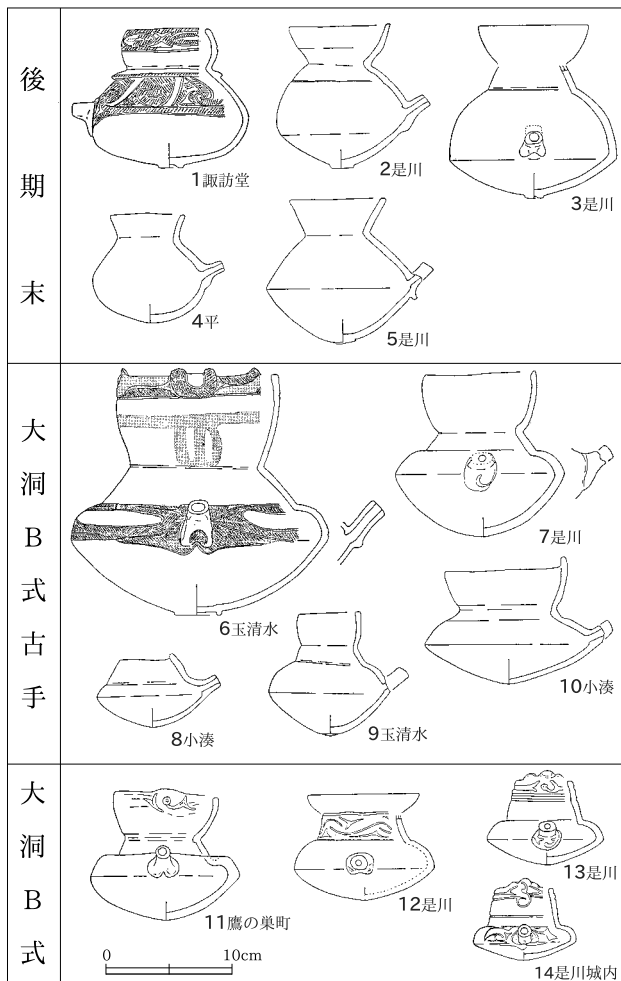


図1 鈴木克彦氏編年案（鈴木克彦1981）

注口土器の種々の属性の消長と、肩の形態変化や文様の在り方等から、注口土器の系統関係を明示した。過渡的型式として大洞 BC1 式を積極的に評価しており、大洞 B2 式を 3 細分、同 BC2 式を 2 細分し、結果的に大洞 B2 ～ BC2 式を 6 階梯とした⁶⁾。型式学的検討を通して導出された編年であり、出土状況に基づく検証は今後に委ねられるが、各系列の詳細にわたる変遷の過程を示したことで、注口土器に対する系統的理解を飛躍的に進展させており、学ぶべき点は少なくない。

林謙作氏は、岩手県一戸町山井遺跡出土の注口土器に対し、文様帯構成からその変遷を解説した（林ほか 1995）。林氏は口端正面の文様をⅠ文様帯、注口周辺をⅡ文様帯として、それ等が拡大・分裂する過程に注口土器の型式変化を指摘した。特にⅠ文様帯の展開・Ⅱ文様帯の成立を大洞 B1 式と同 B2 式の区分の指標、Ⅱ文様帯の分裂・Ⅱ c 文様帯（頸部文様帯）の成立を大洞 B2 式と同 BC 式の区分の指標、Ⅰ文様帯の分裂と口端部文様帯の分離を大洞 BC 式細分の指標と見なした。注口土

器の文様帯構成に明確な変遷序列を指摘しており、筆者も大筋では準拠している。

以上、先学によって示された研究成果を概観した。晩期注口土器は藤村氏が指摘した 3 類型の区分が通用となっており、各類型は大洞 B1 式の段階に出揃い、以降の消長は一様でなく、漸次収斂化の過程を辿る。注口土器の編年は 1964 年の山内氏の指針が基本となるが、型式毎の特性を指摘したにとどまっており、型式変化の細かな階梯を埋め合わせる作業が求められている。

以下では、前出の鈴木・金子・林氏の研究を参考にして、後期末葉～晩期前葉に至る注口土器の変化の過程について、型式学的検討を試みてみたい。

3 注口土器の分類と編年

A 注口土器の分類

亀ヶ岡式の注口土器は、形態的特徴から三つに大別される（藤村 1972）。筆者も先学の分類に従い、以下のように類型化した。但し分類表記については藤村氏等の表記法は踏襲せず、A・B を逆に表記している⁷⁾。

A 類（図 2-1）：「3 段作りの注口土器」（林 1976）で、外折する口縁部、内傾する頸部、扁平な体部の三つの部位で構成されるのが通例である。口縁部が内彎して立ち上がり、皿状を呈し、頸部が分立する。藤村氏の B 型、安孫子氏の B 形式、金子氏の β 類、須藤隆氏の F 1 類（須藤ほか 1995）に相当する。

B 類（図 2-2）：「2 段作りの注口土器」（林 前掲）で、内傾する口頸部と扁平な体部を持つ。口頸部は直線的に内傾し、口縁部と頸部の境界の屈折点は存在しない。藤村氏の A 型、安孫子氏の A 形式、金子氏の α 類、須藤氏の F 2 類（須藤ほか 前掲）に相当する。

C 類：胴の張った壺形を呈し、注口が付される。口頸部は短く、直立乃至外反する。藤村氏の C 型、安孫子氏の C 形式、金子氏の γ 類に相当する。口縁・頸部が分化したものや、大洞 B1 式に特有の短頸で丸味を帯びた体部の所謂「広口・球胴注口土器」（須藤 1992）も含まれており、更なる細分が必要となる。

これ等の 3 類型の内、晩期前葉に卓越するのは A・B 類である。C 類は後期末～大洞 B1 式期に広く認められるものの、大洞 B2 ～ BC1 式期の様相は判然とせず、同 BC2 式になって再び顕在化し、大洞 A 式では C 類にほ

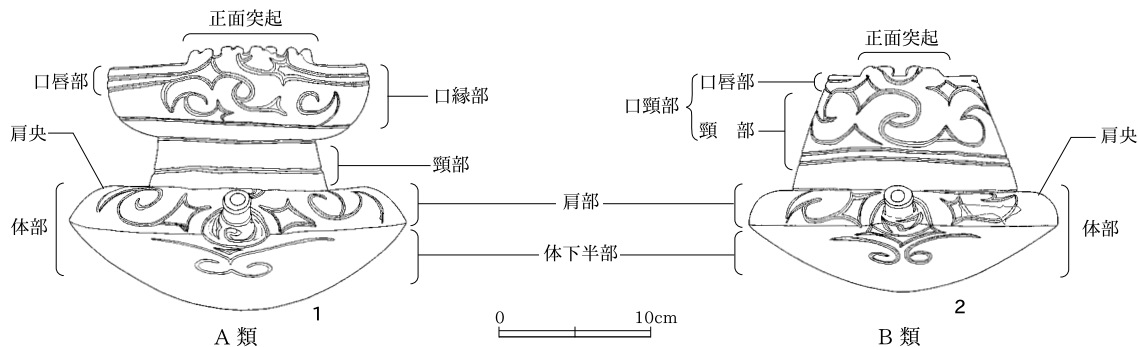


図2 注口土器の種類と部位 (是川中居遺跡出土の大洞B2古式)

ば収斂される。しかしC類の晩期前葉の系統的脈絡が判然としないため、今回の対象からは除外した。

注口土器の部位の名称については、図2に示した。基本的には金子昭彦氏(金子 1991)に準じているが、若干の補正を加えている。学史的には中谷治宇二郎氏の呼称(中谷 1927a)が存しており、一部参考に供した。

図2は、青森県八戸市是川中居遺跡出土の大洞B2古式の組み合わせである(宇部ほか 2002)。A類は、**口縁部・頸部・体部**の3段構成で、体部の最大径の稜線より下位を**体下半部**(金子氏の胴下半部)、体上半を**肩部**とし、口縁部の口端付近を**口唇部**とする。口唇部は本来「口縁の先端の縁の部分」(青森県教委 1990)を意味するが、口縁部を細分する必要から弾力的に解釈した。B類は、**口頸部・体部**の2段構成で、体部についてはA類と同様であるが、口頸部(金子氏の頸部)はA類に倣って口端付近を**口唇部**(金子氏の口縁部)とし、その下位を**頸部**とする。また両類とも注口部を土器の正面に据えており、注口部直上にある前立て状の口縁部突起は**正面突起**と呼称する⁸⁾。

B 年代的変遷の前提

注口土器の細かな検討に入る前に、年代的変遷の前提となる型式変化の大枠を提示する必要がある。

一般に急須形と称される亀ヶ岡式注口土器は、後期の壺形注口土器の系譜を引くものである。東北地方の縄文後期は全期を通じて注口土器が盛行したが、後期前葉では「鉢形系統」が主流を占めたのに対し、後期中葉を境にして「壺形系統」が台頭して主客が逆転し、後期後葉以降は「壺形系統」にほぼ収斂され、晩期亀ヶ岡式へと至る(鈴木克彦 1997)。亀ヶ岡式注口土器の成立を考察する上で、後期中葉が転換期となる。

後期中葉(宝ヶ峯式期)には、「宝ヶ峯型」(鈴木克彦

前掲)と称される特徴的な注口土器が登場する。口縁部・頸部・体部の3段構成のものと、口頸部・体部の2段構成の二態が存するが、体部が丸く球状を呈する特徴を持ち、半肉彫的手法で曲線文様が描出され、器面全体は研磨され光沢を有する。前者は晩期A類、後者は晩期B・C類に系統的に連なると考えられ、この宝ヶ峯型注口土器を母体として亀ヶ岡式注口土器が成立する。

山内清男氏は、後期後半の壺形と注口土器の特徴として「Ⅱb文様帯」を指摘した(山内 1964)。Ⅱb文様帯は後期中葉に出現する「頸部と体部の境界に凸彎する彎曲を持った発達が認められる」副文様帯で、特に後期中葉に発達が著しく、凸面は無文もあるが、文様を有し文様帯をなすものも多く、宝ヶ峯型注口土器を特徴づける。以降凸彎の度は少なく或いは痕跡的となって、晩期中葉大洞C1式まで壺形の頸部の装飾の一部として残存が認められる。文様帯としては晩期壺形にのみ継承され、注口土器では後期末の段階でほぼ途絶えることになるが、注口土器のⅡb文様帯の消失が、壺形から独立した器種の確立を意味するとも受け取れるであろう。但し凸彎はなくなるが、晩期A類の頸部はⅡb文様帯の系譜を引くものである(今村 1983)。

後期後葉以降注口土器は3段構成が主体を占め、2段構成は客体として存するのみで、前者は系統的にスムーズに発展して晩期A類の成立に至るのに対し、後者は傍系の位置にあり、晩期B類との系統性は明確とはいえない。後期後葉(瘤付第Ⅱ・Ⅲ段階)の注口土器A類は装飾性が強く、口縁・頸部が長く細身で、器幅に対する器高が相対的に高く、壺形土器との判別は困難である。更に後期末(瘤付第Ⅳ段階)では無文が一般化して、体部は膨らみを増し、やや押し潰れた感を呈し、頸部の凸彎は僅かとなる。底部は丸底も存するが、小さく作出され

る例が多く、亀ヶ岡式成立前夜の様相を整える。

晩期注口土器の編年については、前記したように山内清男氏によって指針が示されている（山内 1964）。即ち壺形の体部に注口を加えた後期の注口土器の形制は、大洞 B1 式まで継承されるが、大洞 B2 式では体部が低平となり、肩が付き、注口付近を中心に沈線文様が生じ、独立した器種としての歩みを始める。大洞 BC 式では肩の部分が縮小し、頸の下方が広くなり、複雑な文様帯の重畳を示し、大洞 C1 式では口唇や肩が縮小し、隆帯状となり、厚い突起列又は近似のものが加えられ、頸部には磨消縄文の文様帯を持つ。以降大洞 C2 式では平底、大洞 A 式では壺形の復古といった変遷を辿る⁹⁾。

上記の山内氏の定義を図解したのが、金子昭彦氏が作成した模式図（図 3）である（金子 1991）。山内氏は形態の分別は特に行わなかったが、その形制の変化、取り分け肩部と文様帯構成（文様帯重畳）の在り方を重視した。A 類の部位毎の形態変化を見ると、口縁部は退縮、頸部は拡大、体部は扁平化の過程を辿り、肩部は縮小し、大洞 C1 式では突起列となる。文様帯では当初沈線のみであった頸部文様が、大洞 BC 式に文様帯と化し、同 C1 式では体下半部にも磨消縄文が展開する。文様は無文から注口付近、更には全周へと発展が見られ、大洞 C1 式には沈線文様から磨消縄文に転換する。

山内氏は従前の大洞 BC 式を同 BC2 式に改称して、大洞 B 式と同 BC 式の間を繋ぐ型式として、大洞 BC1 式を新たに設定した（山内ほか 1971）。従って大洞 BC 式として解説された雨滝例（図 3-4）は、大洞 BC2 式に相当すると言えるであろう。

図 3 を見る限りでは、大洞 B2 式と同 BC2 式の間にはかなりの開きが存する。口縁部を見ると、大洞 B2 式（図 3-3）は正面突起直下の文様が口端に露出するのに対し、同 BC2 式（図 3-4）では区画沈線が貫通し、明確に分離されており、口端に截痕が加えられる。また口縁部下位の文様が後者では器面を全周展開する。頸部は概して傾きが強くなり、下端の幅が広く、同一文様が規則的に配列され、頸部文様帯を構成する。また肩部は縮小し短く張り出す。両型式間には上記した差異が存するが、系統的発展を考察する上で、その間隙を埋め合わせる作業が求められる。その過渡的資料が大洞 BC1 式に相当する内容であろうと筆者は考える。

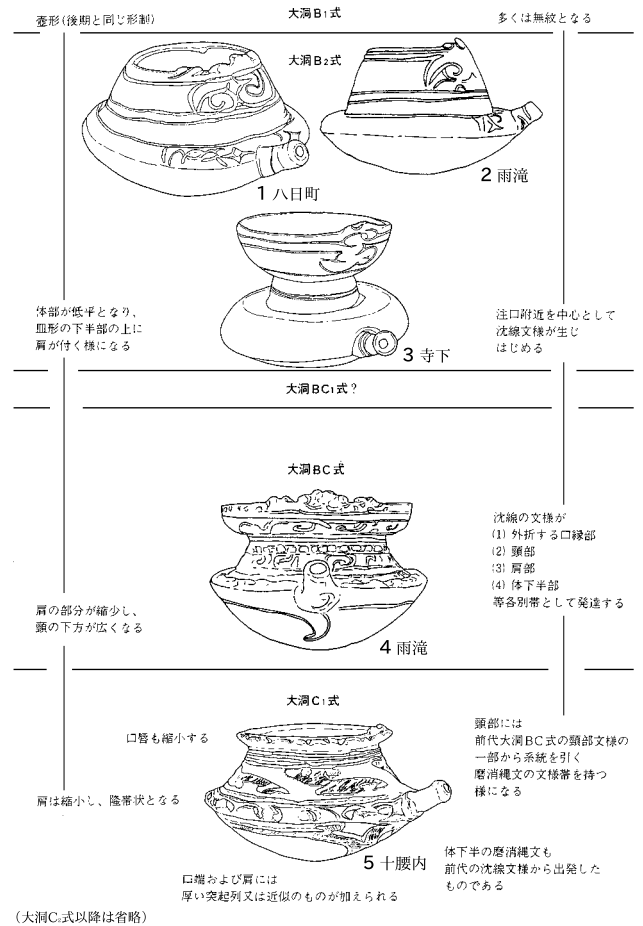


図3 山内氏の注口土器の編年（模式図）

そこで、山内氏の解説から省かれた大洞 BC1 式に対する筆者の理解について、岩手県安代町曲田 I 遺跡 E III-011 住居跡出土の注口土器 3 例を基に説明したい（図 4）。同住居跡は、入組三叉文と羊歯状文の土器が共存した事例として著名であり、その位置づけは研究者間で差異が存する。筆者は下記するように、図 4-1 → 2 → 3 の順で新しくなるという前提に立っており、時期幅は限定されるものの、一括性は認めていない¹⁰⁾。

図 4-1 は大洞 B2 新式に位置づけられる。口縁部の正面突起直下には巴状文様が展開するが、正面のみで口端に露出し、これを挟んで口唇部には 2 条の沈線が圍繞される。頸部には沈線間に断続した点列が加えられるが、明確な文様帯は構成せず、肩部の文様は注口付近のみで、頸・肩の接着部が肩央より下位に位置する。山内氏の図 3-3 に比すと、形制の扁平化が進み、口縁部文様が横位に拡大しており、新しい様相が看取される。

図 4-2 は大洞 BC1 式に位置づけられる。口縁部は 1 に類似するが、口唇部上端の沈線が貫通し、巴状文様の上下端が区画される。頸部には C 字文¹¹⁾が圍繞され

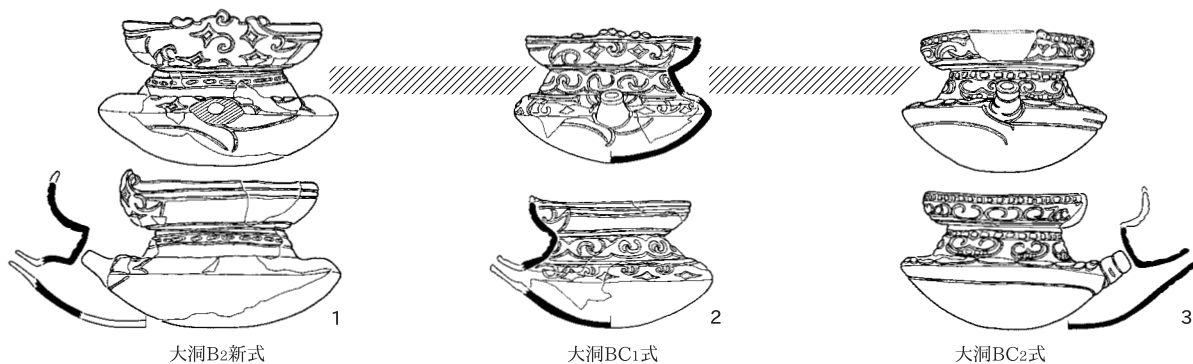


図4 曲田Ⅰ遺跡EIII-011住居跡出土注口土器〔縮尺1/6〕

頸部文様帯を構成しており、肩部にも菱形とJ字の交互文様が全周される。口縁部が縮小し、頸部文様帯が生成する等、1よりも新しい様相が看取される。

図4-3は大洞BC2式に位置づけられる。口縁部文様は全周するが、正面に形骸化した巴状文様を残し、口唇部に截痕列が圍繞される。頸部には上向きでC字状に区画した8単位の文様が配列され、口唇部・頸部上端・肩部文様内に截痕が加えられる。肩部が縮小し短く張り出しており、図3-4の大洞BC2式に近似した様相を示す。

上記した3例の比較から、頸部文様帯の生成が大洞BC1式の特徴として指摘されるであろう。A類の頸部は後期のⅡb文様帯の系譜を引くことは前記したが、その文様化はⅡb文様帯の再生を意味するものである。但し凸彎は認められず、壺形と注口土器の頸部の文様帯は相同の関係にあると見なすことができるであろう。

また大洞BC1式は肩部文様が器面を全周展開する段階でもある。注口付近に生じた文様が横位に拡大し、背面・側面に配置された文様が全周展開する変遷の経過を辿るが、A類の肩部の全周化は頸部文様帯の生成と軌を一にしており、口縁部文様とは必ずしも同調しない。

C 一括資料の検討

前項では、注口土器の型式変化について、山内氏の判別基準から型式学的に導出した変化の大枠を提示した。ここでは時間的に限定される一括性の高い資料から、前記した編年観の補強を試みたい。例示する資料は、墓壇に埋納されたり、住居跡に廃棄又は放置されたと考えられる同時期の資料である。

(1) 岩手県宮古市近内中村遺跡第1154号墓壇跡

近内中村遺跡(図5-1~10)は、三陸海岸中央部の宮古湾を4km遡った山間低地に位置する。第1154号

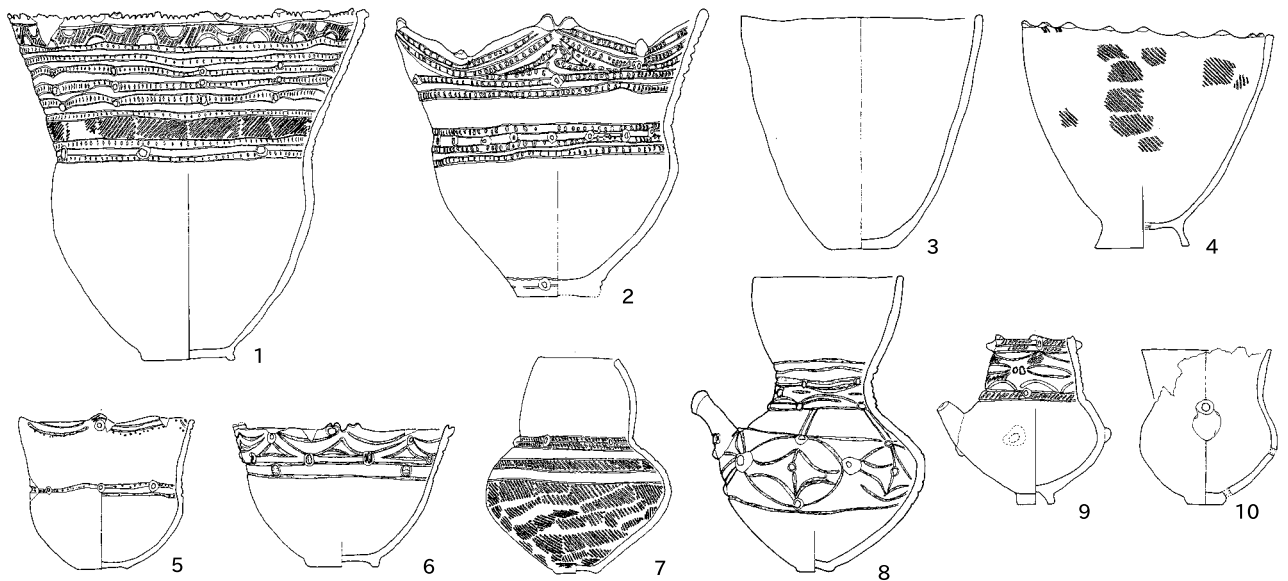
墓壇跡は1.7×1.3mの隅丸方形の墓壇で、深鉢4、注口土器3、鉢形2、壺1の計10点の完形土器が副葬されていた(鎌田2001)。深鉢(図5-1・2)の刻目手法の特徴から、後期後葉瘤付土器第Ⅲ段階に相当し、該期の基準資料に位置づけられる(小林圭一1999)。注口土器は3段構成(8)と2段構成(9・10)からなり、前者は口縁部が長く、頸部と体部に文様を有し、後者は口頸部の内傾と外反の二態が存する。特に8は均整のとれた形態から、注口土器編年を考察する際の該期の基準資料に位置づけておきたい。

(2) 岩手県盛岡市堂ヶ沢遺跡K-11住居跡1号

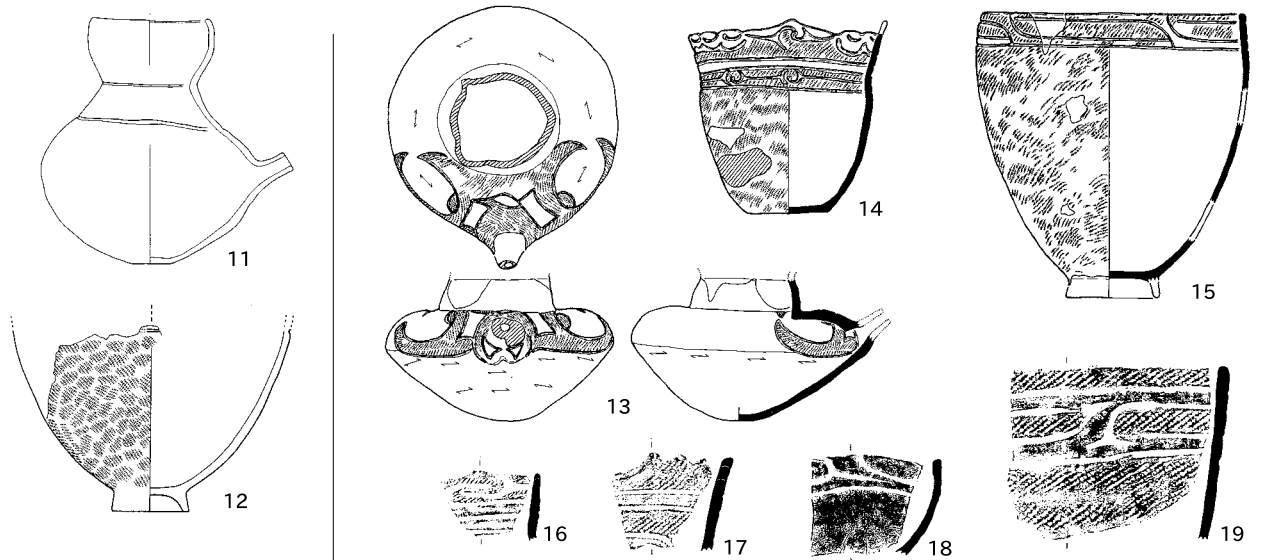
堂ヶ沢遺跡(図5-11・12)は、北上川支流雫石川左岸の段丘上に立地する。K-11住居跡1号は4.5×3.7mの略円形の竪穴住居跡で、床面から注口土器(11)と台付鉢形(12)が出土した(高橋正之ほか1980)。11は無文のA類で、器高が高く、体部が丸味を帯び、底部がやや平坦に作出される。12の上半は欠損し文様が判然とせず、明確な型式判別は困難であるが、注口土器の形態的特徴から筆者は大洞B1古式に位置づけたいと考える。なお図示はしていないが、住居内の石囲炉に粗製深鉢が埋設されていた。

(3) 岩手県九戸村道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居址

道地Ⅲ遺跡(図5-20~27)は、新井田川(瀬月内川)^{せつきない}上流域左岸の丘陵緩斜面に位置する。FⅡ-9住居址は6.2×5.6mの略円形の住居跡で、床面から台付浅鉢1、浅鉢1、台付鉢1、壺形1、注口土器2の計6点の完形土器が出土した(種市1983)。図5-20は口端に3単位の入組三叉文と装飾突起、口縁部に魚眼状三叉文¹²⁾が深く彫り込まれ、入念な磨きを加えられている。22は緩い小波状口縁で、頸部に6単位の入組帯状文が配されるが、文様帯の下端は頸胴界の屈折部よりも降下して

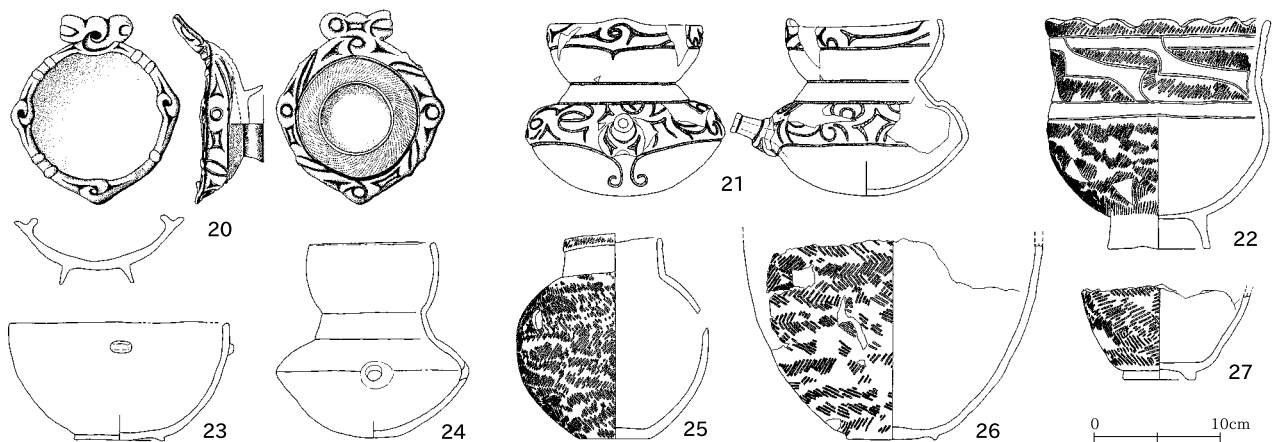


岩手県宮古市近内中村遺跡第1154号墓墳跡出土土器



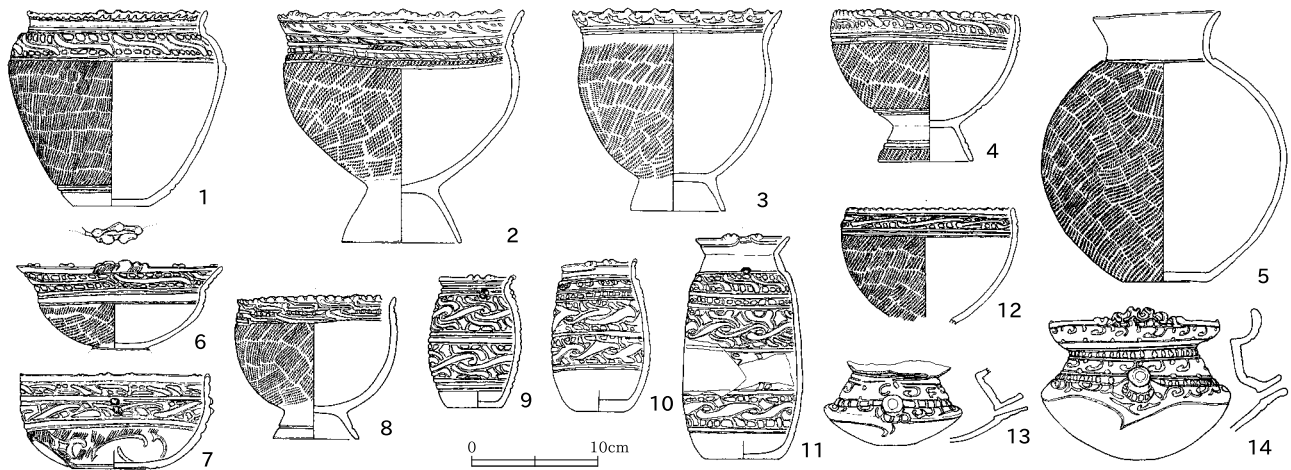
岩手県盛岡市堂ヶ沢遺跡
K-11住居跡1号出土土器

岩手県安代町曲田Ⅰ遺跡GIV-014住居跡出土土器



岩手県九戸村道地Ⅲ遺跡FⅡ-9住居址出土土器

図5 遺構内出土の一括資料(1)



青森県平賀町木戸口遺跡第6号竪穴遺構出土土器

図6 遺構内出土の一括資料(2)

おり、筆者は東北北半の大洞 B1 新式に特有の台付鉢と位置づけている(高柳 1993)。注口土器 2 例(21・24)は、有文・無文の差異はあるが形態的に類似しており、口縁部は長く内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広で短く、体部はやや扁平で明瞭な稜を持ち、丸底を呈する。特に 21 は口縁部と肩部に全周して文様が配置される点で特異で、系統的脈絡は不明と言わざるを得ないが、形制は扁平化の過程を示しており、筆者は大洞 B1 新式の基準資料に位置づけたいと考える¹³⁾。

同じ新井田川(雪谷川)水系の岩手県軽米町長倉 I 遺跡 B21 住居跡 3 号(星ほか 2000)でも、床面直上から 24 に類似した注口土器(図 7 - 15)が出土しており、同様に大洞 B1 新式に位置づけられる。

(4) 岩手県安代町曲田 I 遺跡 G IV - 014 住居跡

曲田 I 遺跡は、馬淵川支流安比川水系の山間の緩斜面に位置する。晩期前葉の住居跡が 55 棟検出されており、特に前出の E III - 011 住居跡が著名である。G IV - 014 住居跡は 6 × 5.9 m の楕円形の住居跡で、東壁際の床面から図 5 - 13 ~ 19 が一括出土した(鈴木隆英 1985)。完形土器は鉢・深鉢・注口土器の 3 点で、前二者(14・15)は口唇の区画線が消失し、口頸部文様が口端に露出する一方で、縄文地文が残存する。14 は正面突起直下に入組三叉文が施される他は、二重の弧線文が巡らされるのみで、入組三叉文の単位文様¹⁴⁾は生じていない。以上のことから、筆者は大洞 B1 新式~ B2 古式の過渡的資料と位置づける。13 は A 類であるが、口縁部を欠き、頸部は無文でやや凸彎気味に直立し、肩・頸の接合点が肩央よりも若干下がり、注口の左右には対

称の翼状(ガイゼル髭状)の磨消縄文が施される。肩部の文様は矩形の磨消文様の一端が注口直上で入り組み、翼状の文様は先端が上下で対向する鉗脚(蟹の鉗)状を呈しており、大洞 B2 式に盛行する巴状文様の前駆の様相を示す。また注口下部の二袋状突起には三叉状の沈刻が施され、道地Ⅲ例(図 5 - 21)に共通する。

(5) 青森県平賀町木戸口遺跡第 6 号竪穴遺構

木戸口遺跡(図 6)は、津軽平野南端の丘陵上に位置する。第 6 号竪穴遺構は住居跡と考えられるが、調査は遺構の 1/3 程度しか実施されず、現存プランから径 10 m の大型住居跡であった可能性が推定される。遺物は遺構の中央部から集中して出土しており、一括資料としての資料価値が高いと指摘されている(葛西ほか 1983)。報告書の図示資料は 51 点で、深鉢・台付鉢・鉢・浅鉢・皿・壺・注口土器で構成され、文様は羊歯状文を施したものが殆どで、入組三叉文は一切認められない。注口土器 2 例(図 6 - 13・14)は、いずれも A 類に属し、頸部文様帯を有し、肩部は縮小し短く張り出している。山内氏の雨滝例(図 3 - 4)に近似しており、大洞 BC2 式に位置づけられる。

(6) 小 結

以上、注口土器を出土した一括性の高い事例を紹介した。この他にも、岩手県軽米町駒板遺跡Ⅲ C87-5 ピット(酒井ほか 1986)、青森県浪岡町源常平遺跡第 70 号住居跡(三浦ほか 1978)、青森県青森市長森遺跡第 3 号住居跡(塩谷・山岸 1985)、秋田県大館市家ノ後遺跡 SK109(谷地ほか 1992)等が挙げられる。特に家ノ後例は大洞 B1 新式の基準資料となるが、注口土器 2 例は

いずれもC類に属するため、今回の対象からは除外した。

近内中村例を瘤付第Ⅲ段階、堂ヶ沢例を大洞 B1 古式、道地Ⅲ例を大洞 B1 新式、曲田 I 例を大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階、木戸口例を大洞 BC2 式に位置づけたが、後期末葉～晩期初頭の注口土器 A 類は、形態的に図 5－8→11→21・24→13 の変遷が想定される。即ち形制は扁平化の道程にあり、器高に対する器幅が増し、大洞 B1 新式には体部中央に明瞭な稜線を持つようになる。また同 B1 新式までの多くが、体部中央を境に底部からの立ち上がりと肩の傾きがほぼ同じであるのに対し、曲田 I 例（13）ではその均整が崩れており、肩部上端がやや陥没する。既に道地Ⅲ例（21）にその前兆が看取され、肩部の変化を一括資料から跡づけることが可能となろう。

また木戸口例（図 6）は、大洞 BC2 式の型式内容を明示した資料として重要である。入組三叉文は図 6－14 の注口下部に存するものの、他の器種には全く認められず、芹沢氏の雨滝式の反証になり得る事例と考える。

これまでの検討から策定された後期末葉～晩期前葉の型式区分は、以下の 8 階梯である。

「瘤付第Ⅳ段階（後期末）→大洞 B1 古式→同 B1 新式→過渡的段階→同 B2 古式→同 B2 新式→同 BC1 式→同 BC2 式」

この他にも、後述するように大洞 BC2 式終末の段階の抽出が可能と考える。大洞 B2 古式と同 B2 新式については、寺下例（図 3－3）を前者、曲田 I 例（図 4－1）を後者の基準として細分した。大洞 BC2 式については雨滝例（図 3－4）が基準であり、その過渡的段階として曲田 I 例（図 4－2）を基準に大洞 BC1 式を設定した。

4 新井田川・馬淵川流域の注口土器の変遷

上記の検討を踏まえて、亀ヶ岡文化の中心地域である新井田川・馬淵川流域出土の注口土器の変遷過程を考察したい。該域を対象とするのは、両水系が通常同一の地域圏として扱われており、他地域に比し報告されている資料が多く、系統的变化が辿り易い点にある。しかし川中居・八幡遺跡のように下流域に位置する遺跡と、曲田 I 遺跡のように上流域に位置する遺跡とでは、地域的差異も想定されるが、ここでは考慮に入れず、同一圏内の資料として扱っている¹⁵⁾。なお山内氏が解説した図

3－1～4 は、馬淵川中流域から出土した資料である。

A 注口土器 A 類の変遷

図 7 は、該域出土の注口土器を上記の型式区分に沿って配列したものである。左端の縦の網点が一類、右端が B 類の変遷系列であるが、まずは A 類から検討したい。

後期中葉の宝ヶ峯型注口土器を母体とする A 類は、後期末～晩期初頭にかけて無文化が進行しており、後期末と晩期初頭の判別は困難を来す。近内中村例（図 5－8）の瘤付第Ⅲ段階を基準にすると、この形態に近似した資料が、図 7－2・3 である。長い口縁部、やや凸彎する頸部、球状を呈する体部、小さな底部、外反気味に屹立する注口等に特徴があり、瘤付第Ⅲ段階に属する資料と考えられる。1・4・5 は長く内彎した口縁部を有し、小さな底部が作出されるが、2・3 よりも体部が扁平化し、器高に対する器幅が増しており、後期末（瘤付第Ⅳ段階）に位置づけられよう。後期末の一括資料としては、新井田川水系の岩手県駒板遺跡Ⅲ C87-5 ピット（酒井ほか 1986）が存するが、A 類の完形資料は認められていない。

大洞 B1 古式も無文が主であるが、体部の扁平化が更に進行し、丸底も多くなる。口縁部は内彎するものが多く、頸部が伸張し、頸部の凸彎も認められる（9）。体部に弱い稜を持つものも存し（6・8～10）、注口下部には後期末と同様に二袋状突起が多用される（6・9）。A 類は体部よりも頸部の方がより垂直に近い傾きが通例であるが、両者の傾きがほぼ同じ例も多く、9・10 は体部の重心が下方にある下膨れ状を呈する。該期のまとまりとしては、馬淵川水系の山井遺跡下層出土土器（林ほか 1995）が相当するが、大洞 B1 新式も含まれており、後期末と同様に良好な一括資料を欠いている。

大洞 B1 新式では前記したように、新井田川水系の道地Ⅲ遺跡（図 5－21・24）や長倉 I 遺跡（図 7－15）で一括資料が得られている。口縁部は内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広で、体部中央には明瞭な稜線が形成される（12～15）。頸部は無文であるが、12 のように正面突起直下や注口下部に文様を有する例が現れる。既に道地Ⅲ遺跡（図 5－21）で見たように、全周化した文様構成も存するが、A 類に主体的に継承されるものではないであろう。なお注口基部に半球状の膨らみを有する例も認められる（図 5－21、図 7－12・15）。

大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階の設定を馬淵川上流域の曲田 I 遺跡 GⅣ-014 住居跡(図5-13)を基に試みた。注口付近の磨消縄文に特徴づけられ、文様は注口の左右にほぼ対称の翼状(ガイゼル髭状)モチーフと矩形の磨消文で構成され、大洞 B2 式以降の前駆的様相を示す。体下半部の注口直下にはノ字状の磨消縄文が認められる(図7-17・18)。肩部はやや彎曲を強め、体下半の傾きとの均衡が崩れ(17～19)、曲田 I 例(図5-13)では肩部上端が肩央よりも陥没する。図7-19は磨消縄文を伴わないが、肩部の形態から該期に位置づけた。口唇部が区画され、正面で入り組む三叉文が圍繞されており、12からの発展が想定される。この段階は本来大洞 B2 古式に帰属されるものであるが、過渡的様相の強い段階として位置づけておきたい。

大洞 B2 古式は、山内氏が同 B2 式で解説した馬淵川水系の寺下例(20)が基準となる。体部の扁平化が進行し、肩部上端が肩央よりも陥没し、肩の下端は底に向かって垂直に近い角度で落ちる例も見られ(22～24)、口縁部は器高を減じ皿状を呈し、正面突起が配される。体部の磨消縄文はなくなり、注口付近を中心として巴状の沈線文様が一筆書きで施され、矩形文様の一端を開放した例が多く見られる(23・24)。口縁部の正面突起直下には巴状モチーフを組み合わせた文様が施され、口唇部には巴状文様を基点に2条の沈線が圍繞される(20～22・24)。頸部にも1～2条の沈線が圍繞される例が多い。

大洞 B2 新式は曲田 I 例(図4-1)に基づいている。肩部上端の陥没が著しく、肩央が上方に迫り出し、体部の扁平化のピークに当たる。頸部は下端が広がり傾きが強く、文様は平行沈線や断続した点列で構成されるが、文様帯の構成はまだ認められない。口縁部・肩部の文様は更に発展し、横位に拡大する。肩部の文様は、注口を中心として対称に菱形文が配され、巴状のモチーフが描出されるものの、一筆書きではなく、菱形文は完結する(図7-26～31)。26のように背面・側面に文様が施される例も存するが、全周する傾向はまだ認められない。正面突起の装飾が発達し、刻みや下縁の縁取りが加えられ、菱形文の頂点が口端に突出する。口縁部文様は菱形と棘状文様の末端を入り組ませることで、巴状のモチーフを浮き出させているが、先行型式に比しポジ文様が細く描出されており、形骸化の過程を辿る。また体下半部

の注口直下のノ字文は、先行型式では注口付近の稜線から垂下される例が多いのに対し、該期では体下半部に沈線が圍繞され、注口直下でノ字状に反転する。

大洞 BC1 式は曲田 I 例(図4-2)に基づいている。形制は前段階を踏襲するが、肩部は縮小傾向にあり、呼应して肩自体も張り出す。肩部文様が注口付近にとどまらず、器面を全周展開する段階で、頸部にも文様が施されるようになるが、口縁部文様は必ずしも全周展開はしない(図7-33～35)。肩部の注口付近には巴状文様を残す例(33～35・38)もあるが、C字文(36・37)等の単位文様で構成される例も現れる。口縁部の正面突起直下には巴状文様が施されるが、繁縷となり文様の形骸化が進行する。頸部にはC字文等の同一文様を規則的に配する例(33・37)や、後続型式に盛行する鉢巻き状と杵状の浮文(4単位)を交互に展開する例(38)も散見され、口唇部や肩部上端、頸部上端には截痕列が巡らされる(33・36～38)。33の肩部上端には5単位の瘤状突起が付され、後続型式に継承される。

大洞 BC2 式は山内氏の雨滝例(図3-4)に基づいている。肩部は縮小して、体部形態が菱形に近似するが、肩部が張り出す例(図7-42～44)から、段と化し(41・46)、突起列(45)への変遷の過程が想定される。口縁部は短く立ち上がり、正面突起はB突起列が発展して珊瑚状突起(42～44・46・47)と化し、口縁部文様帯は口唇部が区画され口部装飾帯として分離される。口縁部下位にはC字文等が全周されるが、正面突起直下のX字状のモチーフは大洞 B2 式以来の巴状文様の名残をとどめる。頸部は下端が広がり傾きが強く、C字文(42)や38から発展した鉢巻き状の交互文様(41・44・46・47)等で構成され、上下端にも截痕列を巡らし、3段構成をなす例が多い。肩部上端には突起が付され、体下半部にも截痕列等の文様が進出する(41・46・47)。

45は肩部に突起列を有し、頸部に4単位からなる鉢巻き状の磨消縄文、体下半部の注口直下にも磨消縄文が施され、無文部は一段低く削り取られる。口縁部は退縮し、口端にB突起を巡らし、注口基部は菱形の隆起装飾となり、大洞 C1 式(図3-5)の様相に近似する。しかし体下半部の文様は注口直下のみで、口唇部に刻目隆帯を巡らし、肩部の突起列が上下から入り組む深い陰刻で作出される等、古的様相も残している。体下半部の文

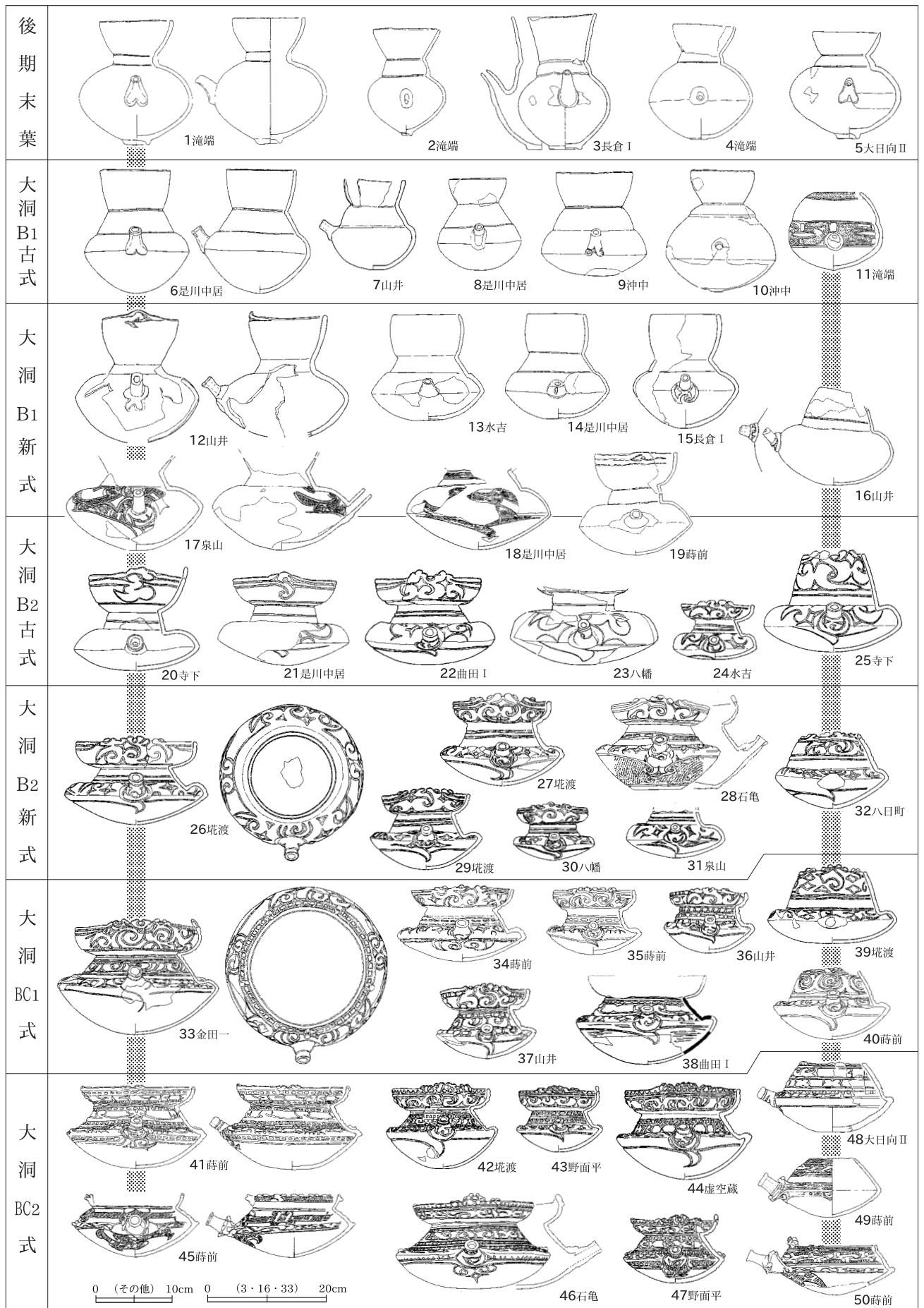


図7 新井田川・馬淵川流域出土注口土器変遷図

様や肩の突起列の様相はB類の50に近似しており、筆者は大洞BC2式終末の段階として位置づけておきたい。

従って大洞BC2式のA類については、42→44→41・46・47→45の変遷を想定している。

B 注口土器B類の変遷

B類については、図7の右端に変遷序列を示した。B類は後期中葉宝ヶ峯型の系譜を引くが、後期末葉の様相が判然としない。瘤付第Ⅲ段階の基準である近内中村遺跡で、口頸部が内傾する注口土器(図5-9)や広口壺(図5-7)が検出されており、また当該域でも長倉I遺跡(図8-2)に散見され、連綿とした存在が想定される。しかし傍系としての位置にあり、変遷過程はA類ほど明確になっていない。B類が当該域に顕在化するのは大洞B2式以降である。

後期末～晩期初頭においては、A類と同様に無文が主体であったと想定されるが、該当する資料は確認できない。最古期に位置づけられる資料は、図7-11であろう。口頸部と肩部の傾きに大きな差はなく、境界で僅かに屈折して傾いたまま口縁が立ち上がる。体部の重心が下位にあり、小さな底部(ボタン状の突出)が作出される。口唇部に縄文帯、肩部に磨消縄文が配されるが、肩部文様は長楕円と短楕円の交互の文様が全周され、後者を三叉文が囲い、前者の上下に平行沈線が垂下され、区画内が磨り消される。形態的特徴から大洞B1古式に位置づけられるものであろう。

16は11の系譜を引くと思われる。口頸部・体部の境界の屈折が明確となり、体部の膨らみが強く、大洞B1新式に位置づけたが、同B2古式との過渡的段階に相当する可能性も否定できない。口頸部は下位に1条の沈線が圍繞され、注口下部に入組三叉文が沈刻される以外、口頸部正面や注口付近の文様は認められない。

大洞B2古式になると、A類との共通性が明確となる。25の形制はA類に同調しており、肩部上端が肩央よりも陥没し、扁平化が進行する。口頸部と肩部注口付近にはA類と同様の巴状文様が施され、前者の下端は2条の沈線で区画される。体下半部のノ字文は注口直下のみで、沈線は圍繞されない。

大洞B2新式は山内氏が同B2式で解説した馬淵川水系の八日町例(32)が基準となる。口唇部に区画沈線が巡らされ、口頸部は口端の装飾帯と頸部の文様帯に区

分され、後続型式の前駆の様相を示す。口端正面にはB突起が発達し、頸部と肩部にはやや形骸化した巴状文様が施され、体下半部には沈線が圍繞され、注口直下でノ字状に反転する。

大洞BC1式はA類の肩部形態との類似性と、口頸部・肩部文様の全周化を基準に設定されるであろう。39は口頸部の背面は判然としないが、肩部は全周化しており、両部位の正面には巴状文様が配される。巴状文様には菱形文が二重に付加されており、モチーフ自体は形骸化している。40は口唇部が区画され、頸部に渦巻き状のC字文が全周される。当該域の大洞BC1式のB類に特有のもので、先行型式まではA類に共通した文様で構成されていたが、当該期にはB類の独自性が現出する。

大洞BC2式では、A類で見たのと同様の肩部の変化が看取される。即ち48→49→50の変遷で、肩部の張り出すものから、隆帯化への過程を辿る。口頸部は口唇部が分離され、口唇部・頸部・頸部下端と3段構成となり、頸部にはK字文(羊歯状文)を器面に全周する例が多く、体下半部にも文様が進出する(49)。

50はA類で指摘した大洞BC2式終末の段階に相当する。肩部に陰刻による突起列を有し、頸部にはK字文(羊歯状文)を巡らし、口端正面にはA突起風の大型突起とその周囲にB突起が付される。注口基部は菱形の隆起装飾となり、注口は土器本体に比し大きく作出され、体下半部には磨消縄文が施され、規格性を強める。しかしB類は大洞C1式に継承されることなく、この段階をもってほぼ姿を消す。

5 東南北半出土の注口土器の様相

前項では、同一地域内における注口土器の変遷過程を概観したが、更に対象を広げ東南北半の各地で出土した注口土器の特性を型式毎に検討して、型式変化に対する理解を深めて行きたい。

A 後期末～晩期初頭の注口土器(図8-1～23)

後期末(瘤付第Ⅲ・Ⅳ段階)～晩期初頭(大洞B1古式)にかけては、A・B両類とも器面の無文化が進行し、良好な一括資料の類例にも乏しく、型式の判別は主に形制の変化に頼らざるを得ない。

後期末葉(図8-1～9)においては、A類と共にC類も認められるが、管見に入ったB類に相当する資料は

殆どない。瘤付第Ⅲ段階では、近内中村例（図5－9）以外に図8－1・2を指摘するにとどまる。広口壺との分化は不明瞭で、口頸部は比較的長く、直立気味に内傾しており、C類との区分も明確ではない。A類の形制については既に記したが、長い口縁部、やや凸彎する頸部、球状を呈する体部、小さく作出された底部に特徴があり、底部は弱い上げ底又は高台が付される。注口は細長く外反気味に屹立し、多くは注口基部直下に袋状の膨らみを持ち、先端がすぼまる傾向にある。

後期最終末の瘤付第Ⅳ段階では、B類の様相は依然判然としなない。A類は体部が球状を呈するが、やや押し潰された形制で、扁平化の兆しを示しており、底部は小さく作出され、弱い上げ底又は高台が付される。口縁部は直線的に外傾する例（6～8）と、内彎気味に立ち上がる例（3・5・9）とがあり、口端に肥厚した山形突起を配し、三角形や三叉状等の彫去を施した立体的な装飾口縁（3～5）も認められる。4はC類に含むべき資料で、装飾口縁はC類に顕著であるが、前段階の1に萌芽の様相が看取され、大洞B1古式まで残存する¹⁶⁾。また注口直下には二袋状突起を持つ例（図7－1・5）が多く、底部は前段階よりも小さく作出される傾向にあり、特に中央が窪んだボタン状の突出（図8－4）は、二袋状突起と共に大洞B1古式にかけて盛行する。

図8－6は体部がほぼ球状を呈し、注口・瘤状突起の間に七宝繫状の文様が構成され、三叉状の沈刻が施される。口縁部には下閉じ弧線が配され、内側の地文が磨り消される。七宝繫状の磨消文様に三叉文を配した注口土器は、後期末の東北南半～東関東にかけて広く分布しており、同様の文様構成を持つ広口壺と共に、広域編年の指標に位置づけられている（小林圭一1999）。高石野遺跡は八郎潟沿岸に位置しており、恐らく搬入品と思われるが、類似の文様構成の広口壺は、北上川上・中流域の岩手県大緩遺跡（斉藤ほか1979）や手代森遺跡（佐々木ほか1986）でも出土している。大洞B1式に特有の「広口・球胴注口土器」（須藤1992）の広域的な広がり、の基盤が用意されていたと見ることができよう。

大洞B1古式では、A・C類に主体があるが、B類も僅かに散見される。いずれの類型の形制とも、体部がやや扁平化した球状や、下膨れ状を呈しており、丸底の底部が一般的となる。A類では口縁部が内彎する例が多

く、直線的に外傾する例は口縁部が短く立ち上がる（11・12）。頸部の凸彎（10～12）も見られるが、頸部下端の幅が広がり、頸部と体部の傾きにあまり差のない類型が顕著である。この傾向は後期末（6・8・9）にも認められるが、特に北海道の御殿山式の注口土器に特徴的であり、時期的な関連が想定される¹⁷⁾。13～15は肩部が短く、頸部が伸張し、直線的乃至外彎気味に立ち上がる。特に15は十腰内第Ⅵ群土器（今井・磯崎1968）であり、当該期に特有の形制と言えるかもしれない。

B類もA類と同様に口頸部と肩部の傾きに大きな差はなく、境界で僅かに屈折するのみで、丁度A類の口縁部を省略した形態に相当する（22・23）。図7－11も同様の形制から大洞B1古式に位置づけている¹⁸⁾。

当該期の注口土器は無文が主流であるが、C類に属する所謂「広口・球胴注口土器」には文様が認められる。図8－18は注口基部を大きく巻き込んだ入組帯状文が横位に展開しており、磨消部に対向した三叉文が施される。19は6の文様の系譜を引くもので、体上半に下閉じ弧線風の文様が配され、内側の地文が磨り消される。18・19とも文様は注口基部を中心に展開しており、体部上端に縄文帯や断続した点列が圍繞される。20・21は口縁部が比較的長く、A・Cいずれの類型に含めるのか逡巡する資料であるが、体部上端に文様帯が巡らされており、C類に近似する。18～21の頸・体部境界付近の文様帯は、恐らくⅡb文様帯の名残として捉えられるものであろう。A・B両類は無文が主流であるため、後期の文様帯構成は後期終末の無文化と共に一端消滅したと見ることもできる（林ほか1995）。しかし主としてC類にⅡb文様帯と体部の全周化した磨消文様が継承されており、後続型式のA類の文様への関与が想定される。その意味では、後期末～晩期初頭にかけてはC類が主導的位置を占めていたとも解釈できよう¹⁹⁾。

鈴木克彦氏は、後・晩期の区分として体部と底部の形状に着目した（鈴木克彦1981）。即ち球型を呈する体部と小形底部を後期的な要素として弁別したが、鈴木氏が後期末と位置づけた資料（図1－1～5）は、筆者の大洞B1古式にほぼ相当する内容である。同氏は十腰内第Ⅵ群土器を大洞B1式には含めず後期末に位置づけており、その多くを晩期初頭と考える筆者と大別の区分を異にするのは、当然の帰結であろう。しかし筆者の考え

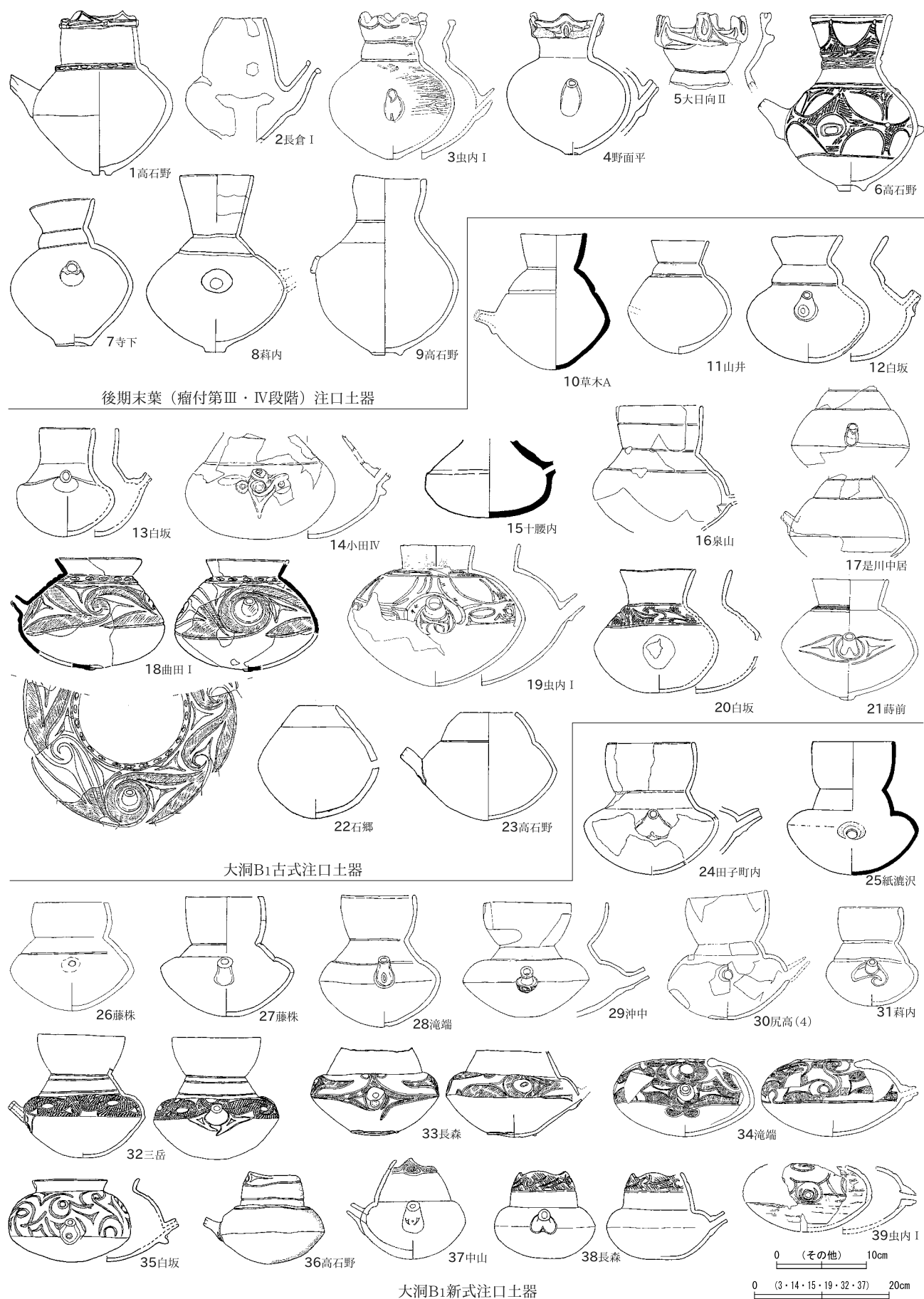


図8 東北北半の後期末葉～晩期初頭の注口土器

る後期末と大洞 B1 古式とでは継承される属性も多く、判別が困難であることは認めざるを得ない。

東北北半では、後期末～晩期初頭の B 類は僅かに散見されるのみである。古式的様相を帯びた B 類は、寧ろ宮城県北半（沼津貝塚・摺萩遺跡等）に多く認められており、該域には後期末葉においても広口壺が安定して存している。B 類の成立に関しては、少なくとも北緯 40 度以北でその系統性を明確にすることはできず、宮城県北半を中心とした地域に母体があった可能性も考えられる。

B 大洞 B1 新式の注口土器（図 8－24～39）

大洞 B1 新式については、前記したように岩手県道地Ⅲ遺跡や長倉Ⅰ遺跡で一括資料が得られている。A 類については無文が卓越しており、丁寧に磨かれ光沢を持つ。形制は口縁部が内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広く、体部中央には明確な稜線が形成される等、定型化が著しい（24～31）。その分布は新井田川・馬淵川流域のみならず、岩木山麓（25）、米代川水系（26・27）、津軽半島（30）、北上川水系（31）と、東北北半に広く及んでおり、一時期を画する公算は大であろう²⁰⁾。

図 7－12 の口縁部には正面突起が付され、その直下に入組三叉文が施される。山井遺跡下層出土の土器であることから、大洞 B2 式以前であることはほぼ疑いない（林ほか 1995）。正面突起は一山状を呈し、その直下に入組三叉文を単独に配するのみであるが、この三叉文の尻が伸長することで、後続型式に見るような全周した三叉文の成立に至ると解釈され、大洞 B2 式に盛行する巴状文様の母体になったと考えられる。

当該期の A 類の口縁部に文様を有する例は稀有であるが、注口直下の形状は、二袋状突起（24）、入組三叉文（29）、巴状の膨らみ（31）等のバリエーションを有し、新旧の様相が錯綜する。また底部は殆どが丸底を呈するが、小形底部も一部に残存する（図 7－13・14）。

当該期の基準資料である道地Ⅲ例（図 5－21）は、口縁部と肩部に全周した文様が配置される点で特異な例と言える。本例の口縁部には 4 単位の入組・魚眼状三叉文を配置し、下端は沈線で区画され、正面で棘状の沈刻が下方に突出する。肩部は注口基部を中心にして、複雑な曲線文様が全周され、下端は体部中央に圍繞された沈線で区画される。肩部の文様は欠損部分もあり詳細に復元できないが、X 字状の浮文を意識してか、上下で入り

組む単沈線と矩形のモチーフが交互に配される。

口縁部に 4 単位の魚眼状三叉文を配置した類例は、青森県青森市玉清水遺跡（図 1－6）に見ることができる。玉清水例は磨消縄文の文様が口唇部と肩部に巡らされ、口縁部下位には赤彩による弧状の文様が描出される。形制が図 7－13・14 に近似しており、当該期に位置づけられよう。また道地Ⅲ例の肩部文様に類似した文様を渉獵すると、秋田県森吉町白坂遺跡（図 8－35）を挙げることができる。本例は C 類に属し、口頸部が短く下膨れ状の形制で、体上半部は入組文と反転して角立てた沈線文様で構成される。白坂例を更に単純化させた文様構成が 34 であろうか。円文と矩形の入組文で構成され、区画内の地文が磨り消される。道地Ⅲ例（図 5－21）や白坂例（図 8－35）のような体上半部に展開する全周した文様は、本来は磨消縄文に由来しており、地文を消失したものと筆者は考える。

当該期に相当する A 類の磨消縄文の資料を渉獵すると、いずれも全周化した三叉文や入組带状文に関連した文様で構成される（32・33）。34 のような複雑化した入組文様の磨消縄文を経て、道地Ⅲ例や白坂例のような地文を欠いた複雑な沈線文様に至ると考えられるが、体部の全周化した磨消縄文の在り方は、前記したように C 類の所謂「広口・球胴注口土器」に顕著に認められるものであり、その影響関係が想定される。しかし後続型式の注口土器に主体的に継承されることはなく、体部の全周化した磨消縄文は、「広口・球胴注口土器」の廃絶と共に当該期でほぼ姿を消し、後続型式では口唇部と注口付近のみに磨消縄文が施される。

B 類はまだ僅かに見られるのみであるが、体部が張り出して、体部中央を境に底部からの立ち上がりと肩の傾きがほぼ等しく、口頸部の傾きが起き上がる傾向にある（36～38）。文様は口唇部に区画沈線が圍繞され、魚眼状又は入組三叉文が施され、縄文地文が認められる。図 7－16 の山井例は、体部の形状から当該期に位置づけたが、口頸部下端に沈線が圍繞され、大洞 B2 古式の前駆の様相を示しており、大洞 B2 古式との過渡的段階に位置する可能性もあろう。

鈴木克彦氏は、円文を中心に置く魚眼状文や体部・底部の形状から、「大洞 B 式の中でもより古手のもの」（図 1－6～10）を抽出した（鈴木克彦 1981）。同氏は体

部の稜線の低下と丸底の底部を判別の基準においたが、筆者の大洞 B1 新式にほぼ相当する内容である。同氏の編年案が提示された 1980 年前後の研究の趨勢は、大洞 B1 式の設定には消極的な状況にあったが、十腰内第 VI 群土器と大洞 B2 式の間に新たな階梯を挿入した同氏の編年案は、今日的観点では高く評価されるものであった(小林圭一 1999)。しかし後年、「大洞 B 式の中でも古手」の注口土器(図 1-6)を大洞 B1 式に位置づける一方で、嘗ての後期末の一部(図 1-2)も同型式に変更し、また筆者が大洞 B1 新式の基準資料と考える道地Ⅲ例(図 5-21)を大洞 B2 式に位置づけている(鈴木克彦 1997)。図の提示のみで、変更の真意ははかりかねるが、改訂された編年には賛同できない。

C 大洞 B2 式の注口土器

大洞 B2 式については、新井田川・馬淵川流域における事例から、大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階、大洞 B2 古式、同 B2 新式の 3 段階に区分した。

(1) 大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階(図 9-1～14)

大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階は曲田 I 遺跡 G IV-014 住居跡(図 5-13)を基に設定したが、注口付近の磨消縄文の文様の特徴づけられる。文様は注口の左右に対称に配置され、矩形の磨消文様と先端が細く尖った翼状(ガイゼル髭状)モチーフで構成され、体下半部にもノ字文が施される(図 7-17・18)。

注口付近に磨消縄文を配した A 類で、口縁部まで残存する例は少なく、図 9-1 を指摘するにとどまる。1 は口唇部が区画され、魚眼状三叉文が圍繞され、縄文地文を有する。肩部はやや彎曲を強め体下半部との傾きの均衡は崩れるが、口縁部の器高は相対的に高い。2 は注口付近に文様は持たないが、口縁部には三叉文の一端と円形刺突から垂下した沈線でノ字状のモチーフが描出される。実測図では縄文の図示はないが、報告書の写真図版では 1 と同様の縄文地文が認められる。

上記の 2 例から、口唇部に縄文地文を有し全周された入組・魚眼状三叉文とノ字状の文様が、当該期の口縁部文様の特徴として指摘できるであろう。

図 9-5 は、図 7-18 の口縁部と思われる。図 9-5 は一山状の正面突起直下に入組三叉文を配し、区画沈線がその直下で反転し、巴状文様の前駆的様相をなす²¹⁾。3・8 には縄文地文は存しないが、正面突起直下で入り

組む三叉文で構成されており、9・10 も類似の資料である。体部中央に明瞭な稜線を持ち、肩部と体下半部の傾きがほぼ等しいか又は肩部がやや彎曲しており、当該期に相当すると判断した。4 は C 類に属するが、口縁部文様や体部の形制が A 類に準じる稀有な例である。

頸部は無文が通例であるが、縄文帯(図 7-18)や沈線を巡らした例(図 9-3・11・13)も存する。図 7-18 の頸部上端の縄文帯は、Ⅱ b 文様帯に連なる古の様相と言えるが、沈線の圍繞は後続型式に多用される。

図 9-12 は口縁部に小型鉢を乗せた特異な例で、体部は低平で、注口付近に磨消縄文の文様が施される。口縁部は小波状を呈し、波底部から J 字状の短沈線が垂下され、短沈線の間に突出した下閉じの連続弧線文、更に点列帯が巡らされる。正面のノ字状の文様は、2・7 のノ字状文との関連を窺わせる。12 の口縁部文様は、当該期の基準資料である図 5-14 の口縁部文様に近似しており、編年の位置の傍証になり得るかもしれない。

当該期の B 類の様相はまだ判然としない。特に注口付近の磨消縄文の文様を有する例は確認できず、形制と口縁部の文様から 14 を当該期に相当させた。しかし口端の三山状の突起中央の下縁に縁取りが加えられており、後続型式に位置づけられる可能性もあろう²²⁾。

山内清男氏は大洞 B2 式の注口付近に沈線文様が生成することを指摘した(山内 1964)。しかしその古の様相を帯びた類例はいずれも磨消縄文の文様であり、縄文地文が消失することで、大洞 B2 式に盛行する巴状文様が成立したと想定される。従って正確には沈線文様ははじめに生じた訳ではなく、磨消縄文からの発展形態として理解されよう。但し図 17-1、図 18-1・2 のように沈線文様も存してはいるが、後続型式の巴状文様には続いて行かない。注口周辺の磨消縄文は、先行型式の全周化した磨消縄文の系譜を引く可能性も考えられるが、また積極的に結び付ける根拠を欠いており、系統的脈絡は不明と言わざるを得ない。

以上をまとめると、当該期は大洞 B2 式の前駆的様相が整ってくる段階として位置づけられる。A 類が主体であり、B 類は依然傍系で、C 類はほぼ姿を消す。形制は扁平化の過程にあり、肩部と体下半部の傾きがほぼ等しく又は肩部がやや彎曲しており、口縁部の器高は相対的に高い。口縁部には正面で入り組む三叉文が圍繞され、

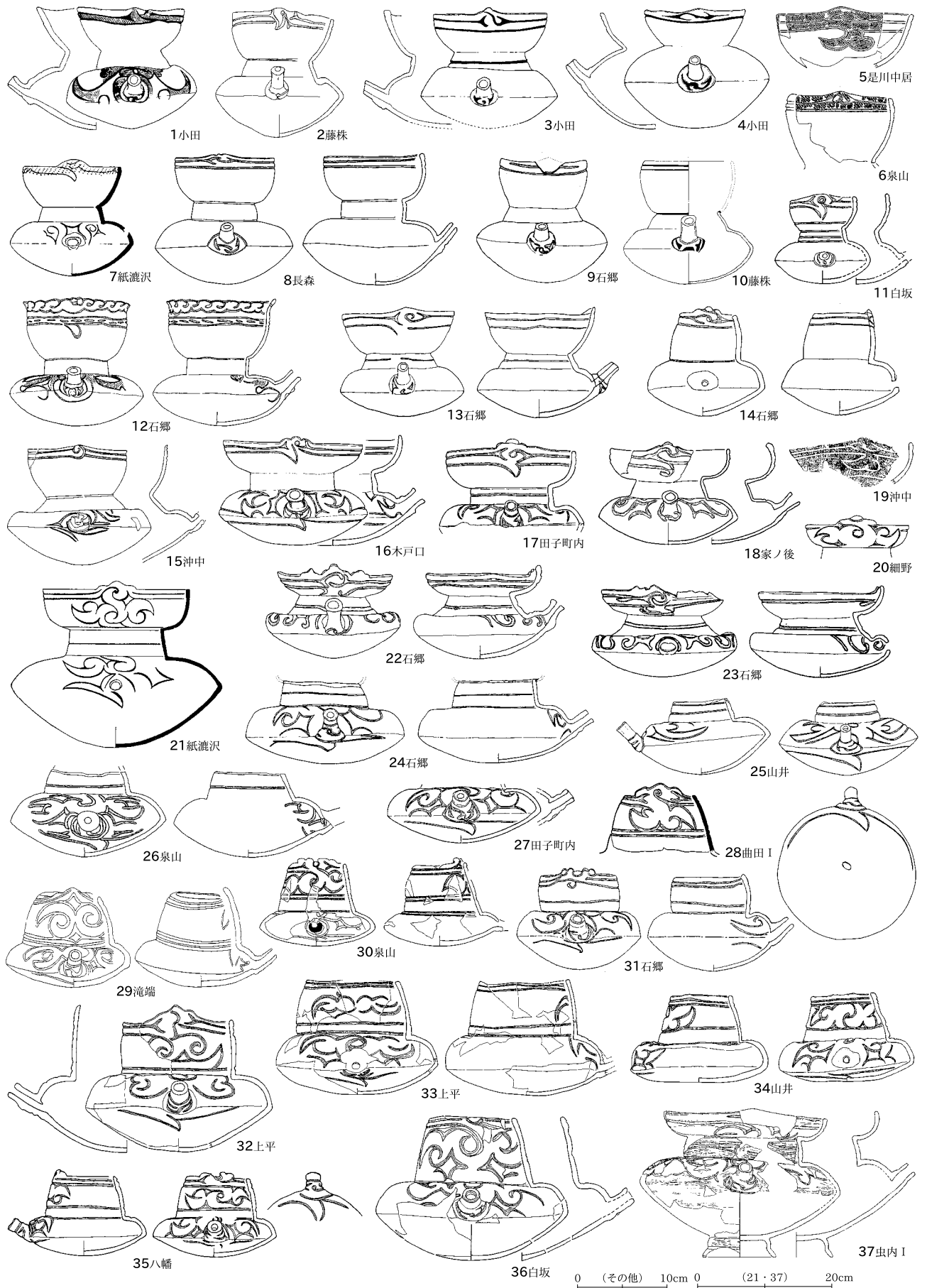


図9 東北北半の大洞B2古式注口土器

注口付近は磨消縄文の文様で構成される例が多く、体下半部にはノ字文の原型が現れる。口縁部にもノ字状の文様が生じており、縄文地文を残す例も多い。正面突起は一山状を呈する例が多く、注口基部の半球状の膨らみが明瞭となり、注口直下には入組三叉文の沈刻が通例となる。しかし二袋状突起の痕跡をとどめ、対向する三叉状の沈刻を施す例(図9-10・12)も散見される。

金子昭彦氏は「大洞B2式の古い部分」の特徴として、「磨消縄文が見られるものがほとんどである」との見解を示している(金子1991)。筆者の当該期が相当することになるが、金子氏が図示した型式内容には、筆者の大洞B1新式も含まれており、やや見解を異にしている。

鈴木克彦氏は大洞B2式の注口土器として、図1-11~14を提示した(鈴木克彦1981)。この内、11・12が当該期に相当すると考えられる。11は一山状の正面突起直下に入組三叉文を配するのみで、肩部上端が陥没し、注口直下に二袋状突起が認められる。図7-12の系譜を引くものであり、大洞B2式の中でも初現となる資料であろう。図1-12は頸部に横位S字状の入組文様を巡らし、その咬合部に対向した三叉文が配され、頸部文様帯を持つ特異な例である。注口直下の二袋状突起には三叉状の沈刻が施されており、体部の形制からも当該期に相当すると思われる。

(2) 大洞B2古式(図9-15~37)

大洞B2古式は山内氏の寺下例(図7-20)が基準であるが、当該期からB類が顕著になり、A・B両類の組み合わせは、是川中居遺跡(図2)が基準となる。

寺下例(図7-20)は、口端正面に三山状突起²³⁾を配し、口唇部には正面で入り組む三叉文と区画沈線が圍繞され、口縁部正面には区画沈線から垂下した巴状の原初的文様が施され、注口付近には文様を持たない。肩部上端の陥没も弱く、先行型式で指摘した特徴に近似しており、大洞B2古式でもより古相に位置づけられよう。

是川中居例(図2)は、体部の形制や口縁・口頸部と肩部の文様が共通しており、同時期の組み合わせと見なし得るであろう。いずれも肩部上端が陥没して、肩の下端は垂直に近い角度となり、口縁・口頸部文様は巴状文様、注口付近は一筆書きの巴状文様で構成される。注口下部には入組三叉文の沈刻、注口直下の体下半部には稜線から垂下した双頭渦文又はそれに類する沈線文様が施

される。先の寺下例よりは新しい様相を有しており、大洞B2古式は先行型式に近似する古相と、口縁部文様が発達する新相とに二分される可能性が考えられる。

図9-15~19は、大洞B2古式の中でも古相に位置づけられる。15は口縁部の器高が高く、前段階に近似するが、肩部上端が陥没し、注口付近には巴状文様の原初的な文様が施される。16~18は口端正面に三山状突起が配され、口唇部には正面で入り組む三叉文が圍繞され、その直下の区画沈線は正面でノ字状に反転する。注口付近の文様は左右対称の鉗脚(蟹の鋏)状のモチーフで構成されたり(16)、矩形文様の一端が開放されており(17・18)、肩部上端の陥没は僅かである。口縁部のノ字状文は2・7の系譜を引くもので、19や寺下例(図7-20)を経て、図2に見るような巴状文様が成立したと想定され、口唇部に三叉文のモチーフを残す例は古の様相と考えられる。なお口縁部と肩部文様の型式学的な検討については後述する。

当該型式からB類の存在が顕著になる。口頸部文様はA類の口縁部文様に共通するが、28・29のように対向した一組の巴状文様で構成されるものが古相である。後述するように、肩部文様の鉗脚状のモチーフは古い特徴であり、29の肩部文様がその傍証になるもので、先のA類の寺下例の段階に相当するものであろう。

正面突起としてはA類と同様に三山状突起も存する(28・29・32)が、B突起が並立され突起の間に半円を加えた例も多く見られる(図7-25、図9-30・31・35)。但し口唇部の三叉文と口縁部の巴状文様を同居させた例(30・32・35)や、口唇部を区画した例(31・33~35)が存しており、A類との差異も認められる。31のJ字状の短沈線はノ字状文との関連を有するものであろう。鈴木克彦氏が大洞B式として提示した図1-13・14も、当該期に相当すると思われる。いずれも三山状突起が付され、13の口唇部には正面で入り組む三叉文とその直下に平行沈線が圍繞されており、14の正面にはA類に見られるような巴状文様の原初的な形態が認められる。

B類の肩部文様もA類に共通しており、注口を中心として巴状の沈線文様が一筆書きで施され、矩形文様の一端を開放した例が多く見られる(図9-29・31・33・36)。またB類には、体部の低平化が著しく、平底に近

い形制のもの（30・33・34）も存しており、形制についても独自の系統が想定される。

B類が顕在化するのとは対照的に、C類が忽然と姿を消す。C類が果たして来た役割をB類が代用するようになったのか、その相関性は判然としない。しかしB類の文様の生成には、A類が深く関与していたことは疑いなく、A・B両類のセット関係が確立したという点では、当該期が亀ヶ岡式注口土器の成立を考える上での画期になるものであろう。

37は高台付の底部を有するA類の特異な例である。口縁部と注口付近に変形化した巴状文様が施され、頸部にも沈線文様を有する。高台上部が凸彎し下端が開くが、凸彎の度合いは弱い。台付浅鉢・鉢の脚部の凸彎は、同時期の壺形の頸部の凸彎との相関性を有しており、大洞B2新式～同BC1式にかけて特に発達が著しい。37は凸彎の度合いが弱く、体部の形制からも当該期の位置づけが妥当であると判断される。

A・B両類の注口部の特徴としては、注口基部に半球状の膨らみを持つようになり、注口直下に入組三叉文の沈刻が施される。また注口先端には環状の沈線が施される例が多く見られ、後続型式に継承される。

金子昭彦氏は、「大洞B2式の中位の部分」として、「磨消縄文はなくなり、注口付近を中心とした沈線文様が施される段階」と規定し、その文様は一筆書きのように続く傾向を指摘した（金子1991）。筆者の大洞B2古式も同様の理解に基づいているが、同氏が図示した資料には、筆者の大洞B1新式～B2古式の過渡的段階に相当する例が多く認められ、筆者が古相と考える木戸口例（図9-16）や寺下例（図7-20）が「大洞B2式の新しい部分」に位置づけられる等、同氏の型式内容とは必ずしも合致しない。

（3）大洞B2新式（図10-1～11・13・16）

大洞B2新式については、A類は曲田I遺跡（図4-1）、B類は山内氏の八日町例（図7-32）を基に設定した。その他にA類では^{ごみわたり}堀渡例（図7-26）と上平例（図10-1）、B類では泉山例（図10-5）と上平例（図10-9）が基準的な資料と考える。

A・B両類とも形制は肩部上端の陥没が著しく、肩央が上方に迫り出し、扁平化のピークに当たる。肩部の下端は底に向かって垂直に近い角度で落ちて、断面形態は

著しい非対称を呈しており、取り分けA類に顕著である。

A類は頸部下端が広がり傾きが強く、頸部には平行沈線や点列帯が圍繞されるのみで、文様帯の構成は認められない。口縁部・肩部の文様は、先行型式よりも横位に拡大する傾向にある。肩部の文様は注口付近のみならず背面・側面にも施されるようになるが、巴状のモチーフが基本であり、同一文様による全周化には至っていない。但し文様の上・下端が沈線で連結された例が現れる（図7-26、図10-1・4）。注口の左右には菱形文が施されるが、先行型式で見た矩形の一端が開放されたり、沈線が伸びる例は少なく、菱形のみで完結する例が多く、菱形の頂点に対向して三叉状・棘状の沈刻が施される（図7-26、図10-1・4）。文様が横位に拡大するのは、巴状文様の形骸化に伴って、菱形や半円等の付加的要素が加えられたり、入り組む沈線が単線から複線構成に変化したことによるものと考えられる。

口縁部には、三山状突起の左右にB突起が配されるようになる。口唇部上端の沈線は、B突起中央の窪み又は突起間から垂下し、口端に並行して圍繞され、正面突起の反対側で同様に口端に露出する例が多く見られ（図7-26～29、図10-1・2・4）、三山状突起の頂部が分割され菱形文の頂点が露出したり（図7-27）、半円が施されたり（図7-26、図10-2）と、三山状突起が主流であった先行型式からの発展が看取される。

B類は山内氏の八日町例（図7-32）が基準となる。八日町例は口頸部・肩部の文様はA類に同調しているが、口唇部に区画沈線が圍繞され、口部の装飾帯が分離される。口唇部に沈線を圍繞する例は先行型式に認められており（図9-31・33～35）、A類とは異なった系統の存在が想定される。

上平例（図10-9）の肩部文様は、正面・背面が上平例（図10-1）、側面が堀渡例（図7-26）に近似しており、体部の形制もこれ等に共通する。口唇部は沈線で区画され、正面突起はA類と同様の三山状突起の頂部が分割された突起が配され、また背面・側面にもB突起が付される。頸部文様は菱形や半円文様が付加され、巴状文様は形骸化しており、背面にも同様の文様が施され、頸部下端には点列帯が圍繞される。当該期のA類も頸部に点列帯を圍繞する例が多く、B類頸部下端の平行沈線・点列帯は、A類頸部文様との相関性を有すること



図10 東北北半の大洞B2新式注口土器（大洞B2古式含む）

を窺わせる事例である。

B類はA類に比べると、肩部上端の陥没を持たない例が多く認められる（図10－5～8・10、図17－5）。A類にも存する（図7－31）が、B類ほど顕著ではない。またB類の口頸部・肩部の文様は、A類に同調する例が多いが、全周展開する例も現れる。

図10－13・16は、口頸部文様が全周した例である。

13は肩部文様も側面に施されており、全周化の道程にある。いずれも菱形入組文で構成され、入り組む沈線が複線で構成される点で共通する。B類においては、A類に先駆けて口頸部文様の全周化が成立するのであろう。しかし巴状文様から生成したのではなく、菱形入組文であることは、B類独自の系統が存していたように思われる。

図10－12は、口頸部と肩部が全周化している。口

頸部には対向した弧線文と菱形文、肩部には一端が渦巻く菱形文と菱形・三叉状の文様が交互に配されており、両文様帯とも巴状文様とは無関係の同一文様が規則的に繰り返される。12の注口直下には二袋状突起の痕跡が認められ、体下半部のノ字文も正面のみで全周しないことから、当該期よりも古く位置づけられる可能性が考えられる。

その他にも古的様相を持った類例を渉猟すると、図10-14・15が挙げられる。15の肩部文様は上下で入り組む矩形文様と弧線文が交互に配され全周展開する。口頸部には大洞B2古式A類で指摘した巴状文様の原初的形態が存しており、正面突起も三山状を呈する。14は肩部が無文であるが、口頸部に上下で入り組む矩形文様と楕円文が交互に配され全周化しており、体部の形制も古相を呈する。

筆者は、図10-12・14・15を大洞B2古式に位置づけたいと考えている。巴状文様とは関わりを持たない全周化した系統、即ち矩形・菱形入組文を施した系統が大洞B2古式以来存続していたと想定され、入り組む沈線が、単線から13・16のような複線構成へと変化したと考えられる²⁴⁾。

A・B両類とも体下半部の文様には、ノ字文が多用される。先行型式のノ字文は稜線から注口直下に向かって沈線が垂下され、反転して稜線に戻る構成であるのに対して、当該期では体下半部に沈線が圍繞され、注口直下でノ字状に垂下して反転する構成が多くなる。沈線が圍繞されるということは、体下半部が文様帯として強く意識され始めたことを窺わせる。特にB類では、図10-7・13、図17-5のように、注口直下に対向した巴状文様が施されており、大洞BC2式終末の段階に盛行する磨消縄文の萌芽が現出する。

金子昭彦氏は、「大洞B2式の新しい部分」として、「単位文様（あるいは文様要素）が出現しはじめる段階」であり、「特に肩部に注口を中心として対称に菱形文を配すること」が多く、「その後の段階のように単位文様を規則的に配列して肩部を一周するという傾向は見られない」ことを指摘している（金子1991）。しかし発表直後に「肩部が縮小して張り、（口）頸部あるいは頸部の文様（沈線は含まない）が注口上付近のみに留まらずに広がっている場合と、肩部の文様が全周展開していな

くとも注口と反対の位置に施文されている場合は、大洞BC1式に含めた方が良さそうだと思うようになった」として、編年案を改訂している（金子1992a）。

筆者の大洞B2新式は、金子氏の当初の編年とほぼ同様の理解に基づいている。しかし同氏の「大洞B2式の新しい部分」には、前記したように筆者の大洞B2古式の資料が多数含まれており、必ずしも合致した内容とはなっていない。また改訂後の編年で見ると、筆者の大洞B2新式の多くが、金子氏の大洞BC1式に相当することになるであろう。

筆者の大洞B2新式が、果たして独立した型式として設定が可能であるのか、問題になるところである。筆者は図7-26→33の変遷を想定しており、截痕を加えた段階が大洞BC1式と認識している。従ってその直前の段階として、当該型式の設定を試みた次第である。

D 大洞BC1式の注口土器（図11）

大洞BC1式は、山内清男氏によって示された大洞B2式（図3-1～3）と同BC2式（図3-4）の間を埋める過渡的様相の段階として、曲田I遺跡EⅢ-011住居跡出土の注口土器の比較から、設定したものである（図4-2）。その特徴は、A類における頸部文様帯の生成と、肩部文様帯の全周化にあり、文様においては截痕が加えられる。

A類では金田一例（図7-33）が最も良好な例となる。器高に対する口縁部の比率が先行型式よりも減じており、肩部は張り出すが迫り上がりは弱く、肩部の縮小化の道程を示す。口縁部には巴状文様が施されるが、渦巻菱形文の頂点は口端や区画沈線にそれぞれ接して開き、文様の繁縷化が顕著となる。しかし文様は正面のみで全周展開せず、正面突起には突起中央の窪みと突起間に刻みや文様が加味される。頸部には上下端の平行沈線とその間に単位文様としてC字文が圍繞される。肩部の上端には截痕列が巡らされ、注口付近と背面には巴状文様、側面にもそれに類するC字状の文様が施されるが、文様帯の上下幅が縮小しており、文様は繁縷化する。

筆者は図7-26と33を型式差と見なし、26の発展形態を33と位置づけている。33は肩部文様の全周化という点では、好適な例とは言い難いが、截痕列が圍繞されており、大洞BC式の範疇に含め得るものである。筆者の変遷の前提が成り立たず、26と33を同一型式

に含めるとなると、前記した筆者の大洞 B2 新式の多くは当該型式に包括すべきものとなろう。文様帯構成の差異を除くと、それだけ先行型式との分別が困難であることは認めざるを得ない。

当該期 A 類の口縁部文様は、前記したように巴状文様は残るものの繁縷化が著しく、巴状文様は形骸化の過程を辿る。口縁部文様が全周化された例(図 7-36、図 11-1・3・6)は、いずれも C 字文で構成されており、口唇部に沈線が圍繞され、口部装飾帯が区分される例も現出する(図 4-2、図 11-3・6)。図 7-36 は正面突起直下に巴状文様を残し、図 11-1 は口唇部の区画沈線が正面で J 字状の文様に参入し途切れており、いずれも口端に截痕列が巡らされる。図 7-37 は正面突起直下に巴状文様を施し、背面・側面にも文様を持つが、特に側面に四葉状文様が施され、口唇部の 2 条の沈線間には截痕が加えられる。なお図 7-34・35 の口縁部文様は、正面のみで全周展開しない。

当該期は頸部文様帯の出現が大きな特徴となるが、頸部が点列帯(図 7-34・35、図 11-3・5・6)や截痕列(図 11-9)のみで、文様帯を構成しない例も多く存しており、また両者が共存した例(図 7-36、図 11-1)も見られる。頸部文様帯としては C 字文を圍繞した例が多く(図 4-2、図 7-33・37)、後続型式で盛行する鉢巻き状と杵状の浮文を交互に配置した例も現れ(図 7-38、図 11-2)、上下端には截痕列・点列帯が巡らされる(図 7-37・38、図 11-2)。

肩部文様の全周化も当該期の特徴であるが、C 字文で構成される例が多く(図 7-36・37、図 11-2・8・9)、後続型式の肩部に多用される陰刻と羊歯状文を交互に配置した文様の初現形態も現出する(図 11-1・3・10)。巴状文様も残存する(図 7-33～35・38、図 11-4～6)が、全周化した例も認められる(図 7-34・38、図 11-4・6)。特に図 7-38 は図 7-33 と同様の巴状文様で構成されるが、正面・背面・側面のそれぞれの文様の間に対向した棘状の沈刻を加えることで、全周化に至っている。

A 類の図 11-4・7 は、その形制から当該期に位置づけたが、系統的脈絡は判然としない。4 は口縁部に 4 単位の魚眼状三叉文を配し、頸部は平行沈線文のみで構成される。肩部は巴状及びそれに類する文様で全周され、

繁縷化しており、平底を呈する。7 は全ての文様帯が羊歯状文で構成され、体部の断面形態は古相を呈する。

B 類は先行型式でも指摘したように、A 類に比べ肩部上端の陥没は顕著でなく、肩部が横に張り出した形制が多く、A 類と同様に横位に突出して、肩部文様が正面から確認しにくい例も多くなる(図 7-40、図 11-11・12・25)。口頸部に巴状文様を残す例は少なく(図 7-39、図 11-11・16・17・18)、肩部も C 字文等の単位文様で構成される例(図 11-12・16)が殆どで、巴状文様もやはり少なくなる(図 11-13・17)。

口頸部は口唇部が区画され、頸部の巴状文様は先行型式のような菱形の一端の渦巻き又は入り組みを主とした構成から、C 字文と同様に弧線と棘状沈刻の交互文様によって描出されており、菱形文は付加されるのみで、形骸化が進行する。

その他の口頸部文様としては、羊歯状文(図 11-12)、鉢巻き状文様(13・15)、菱形入組文(14・19)等が認められる。特に渦巻き状の C 字文で構成される例(図 7-40、図 11-21～23)は、漆塗りの精巧な造作であり、新井田川・馬淵川流域に特徴的な分布を示している。その点で秋田県の横手盆地に位置する平鹿例(25)は、該域からもたらされた可能性も想定される。

B 類の口頸部下端には、点列帯が圍繞される例が多い(図 11-11・12・17・18・20・22・25)。先行型式にも見られ(図 10-9)、この部位の文様が A 類の頸部文様と相関性を有することは前記したが、当該期の B 類に特に顕著であり、判別基準になり得るかもしれない。頸部下端に点列帯を持つことで、口頸部の文様帯は口唇部・頸部・頸部下端の 3 段構成をとる例が多くなる。

図 11-28 は、先行型式(図 10-13・16)の系譜を引くと考えられる。口頸部・肩部とも文様が全周展開しており、口頸部の渦巻菱形文の一端は複線化し、肩部 C 字文の一部は菱形文と J 字状の文様が結合して、その末端が下方に開く構成となる。このように末端が開いた渦巻菱形文は大洞 BC1 式の鉢・壺形の文様に特徴的であり、全周化した文様構成と共に当該期の根拠に数えられる。注口直下には対向した巴状文様も施されており、大洞 BC2 式終末の段階の磨消縄文へと連なっていく。

図 11-26・27 は、口頸部・肩部文様とも全周展開しないが、繁縷化した文様から当該期に位置づけた。

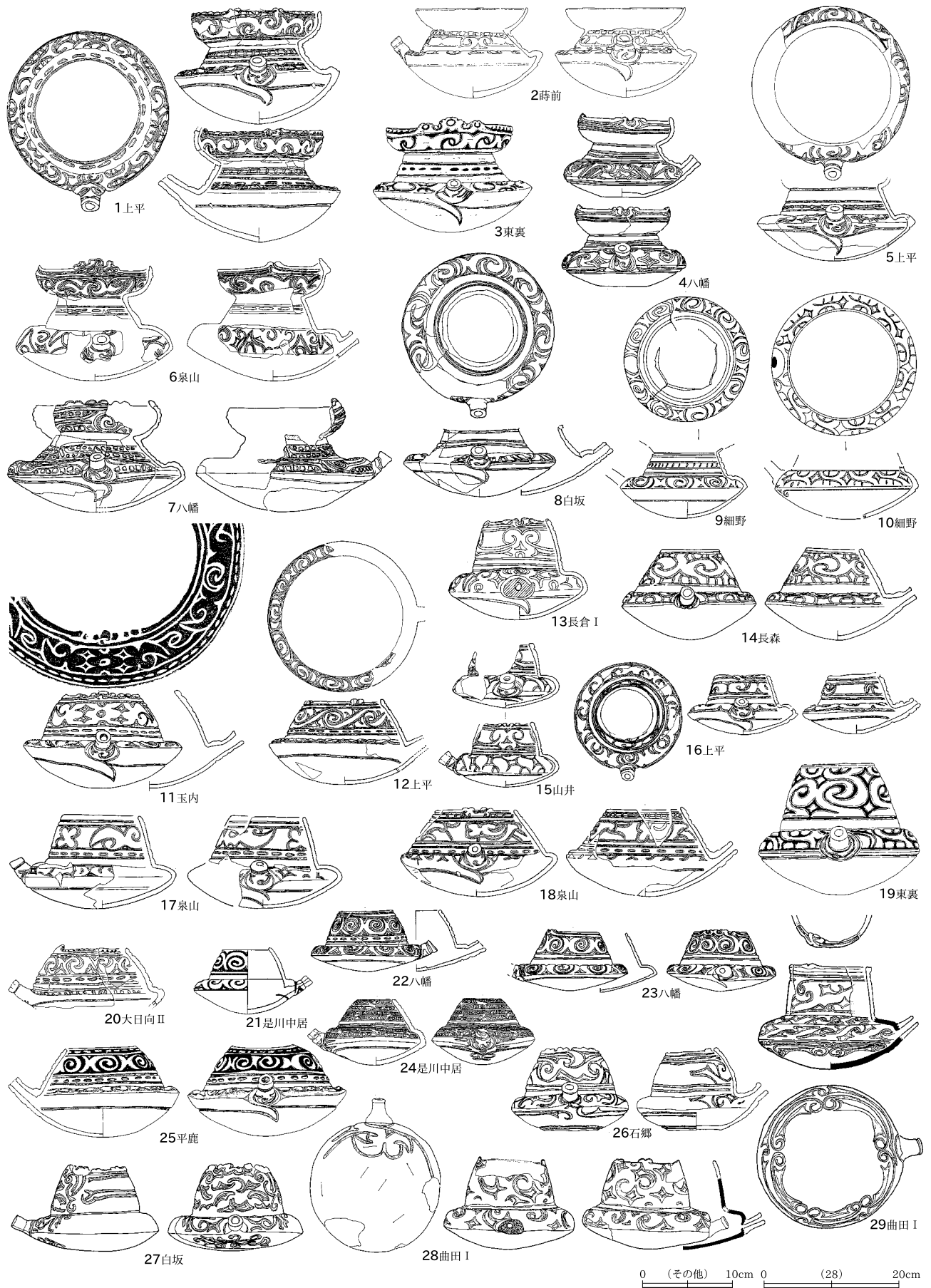


図11 東北北半の大洞BC1式注口土器

26 は平底で口唇部と体下半部、27 は低平な丸底で口頸部背面に伸長した三叉状の文様が施される。29 は肩部文様帯が稜線で分帯されており、複雑な文様帯の重畳を持つ特異な例である。分帯した肩部には入組三叉文・矩形入組文が施され、体下半部には4単位の双頭渦文とその上端に入組三叉文、下端に魚眼状三叉文が施され、体下半部の文様帯を構成する。

26～29の体下半部の文様を考慮に入れると、A類よりもB類において、体下半部が文様帯として強く意識されていたことを窺わせており、大洞BC2式終末の段階のB類に主体的に継承されて行ったと想定される。

金子昭彦氏は「大洞BC1式」として、「肩部の文様が注口付近にとどまらず、器面を全周展開する段階」と規定している(金子1991)。筆者も同様の理解に基づいており、大筋では同氏の編年に賛同する。しかし前記したように同氏の「大洞BC1式」には、筆者の大洞B2古・新式が含まれている点で、異同が存する。

E 大洞BC2式の注口土器

大洞BC2式については、新井田川・馬淵川流域における検討から、山内氏が規定した大洞BC2式と、大洞BC2式から同C1式への型式変化の過渡的様相を示す段階とに大別したが、更に前者は新古に二分される可能性が想定される。

(1) 大洞BC2式(図12)

大洞BC2式は山内氏の雨滝例(図3-4)が基準となる。肩部は縮小し、頸部は伸張しその下端が広がり、複雑な文様帯の重畳を示す点に特徴がある。青森県木戸口遺跡(図6)で一括資料が得られており、入組三叉文を伴わない羊歯状文主体の段階が確認されている。

A類の口縁部は退縮の方向にあり、文様帯の上下幅が狭まるが、最も特徴となるのは、口唇部の沈線が正面突起直下で貫通して、口部装飾帯が分離される点である。既に先行型式(図11-3・6)に存しており、B類では大洞B2古式(図9-31・33～35)に認められるが、A類では当該期に顕著となる。その点で図12-2は正面の文様が口端に露出した稀有な例である。

口縁部の文様は、C字文乃至それに類する文様が施され全周展開する例(図7-42～44・47、図12-1・5～11)が多く、巴状文様も残存する(図12-2・4)。しかし巴状文様は細身で、X字又はC字文と呼称した方

が適切かもしれない。C字文においても正面のみ文様が異なる例(図7-42、図12-11)や、正面のX字状の文様が強調された例(図7-44、図12-5・10)は、先行型式の巴状文様の名残をとどめたものであろう。

正面突起は先行型式よりも装飾が加味され、珊瑚状突起(林ほか1995)と呼称されるように大きく作出され、口端には殆どに截痕列が圍繞される。

頸部は傾きが強く、上下幅が伸張し、同一文様が規則的に配置される。C字文やそれに類した文様(図7-42・44、図12-1・3・5・7・8・10・11)、また鉢巻き状に四葉状・杵状の文様を配した例(図7-46、図12-2・6・12・13)が卓越しており、羊歯状文(図12-14)やK字文(図12-16～21)、口縁部文様に近似した構成のもの(図12-5・10)も存する。上下端には截痕列が圍繞され、文様帯が3段構成となる例が多い。

肩部は上下幅が縮小し、横位に短く張り出す形制で、C字文や羊歯状文等が施されるが、正面から文様が確認できない例が多い。図12-16～20は頸部と肩部の境界で弱く括れ、肩部がやや丸味を持って落ちる形制を呈するが、いずれも頸部がK字文、肩部が羊歯状文で構成されており、文様と形制の相関性を窺わせる。またK字文が多用されることから、年代的差異即ち新相として捉えられる可能性も考えられる。

肩海上端には突起を持つ例が散見される(図7-41・46・47、図12-6・12)。既に先行型式に見られる(図7-33)が、壺形の頸部(Ⅱb)文様帯においても大洞BC2式に突起を付す例が多くなっており、壺形の突起との相関性が想定される。壺形と注口土器の頸部の文様帯は相同の関係にあったことは前記したが、肩海上端の突起に関しては再び同調したと見なすことができるであろう。

体下半部には、肩部の縮小化に呼応するかのよう截痕列が進出する(図7-41・46・47、図12-7・10～13・15)。大洞B2新式以降体下半部には沈線が1条圍繞されるのみで、平行沈線は稀であった(図7-34、図11-4)。当該期では截痕列のみの例(図12-7・10・11・15)と、截痕列直下にも沈線を圍繞する例(図7-41・46・47、図12-12・13)が見られ、また注口直下のみならず側面・背面と4単位の文様を施す例

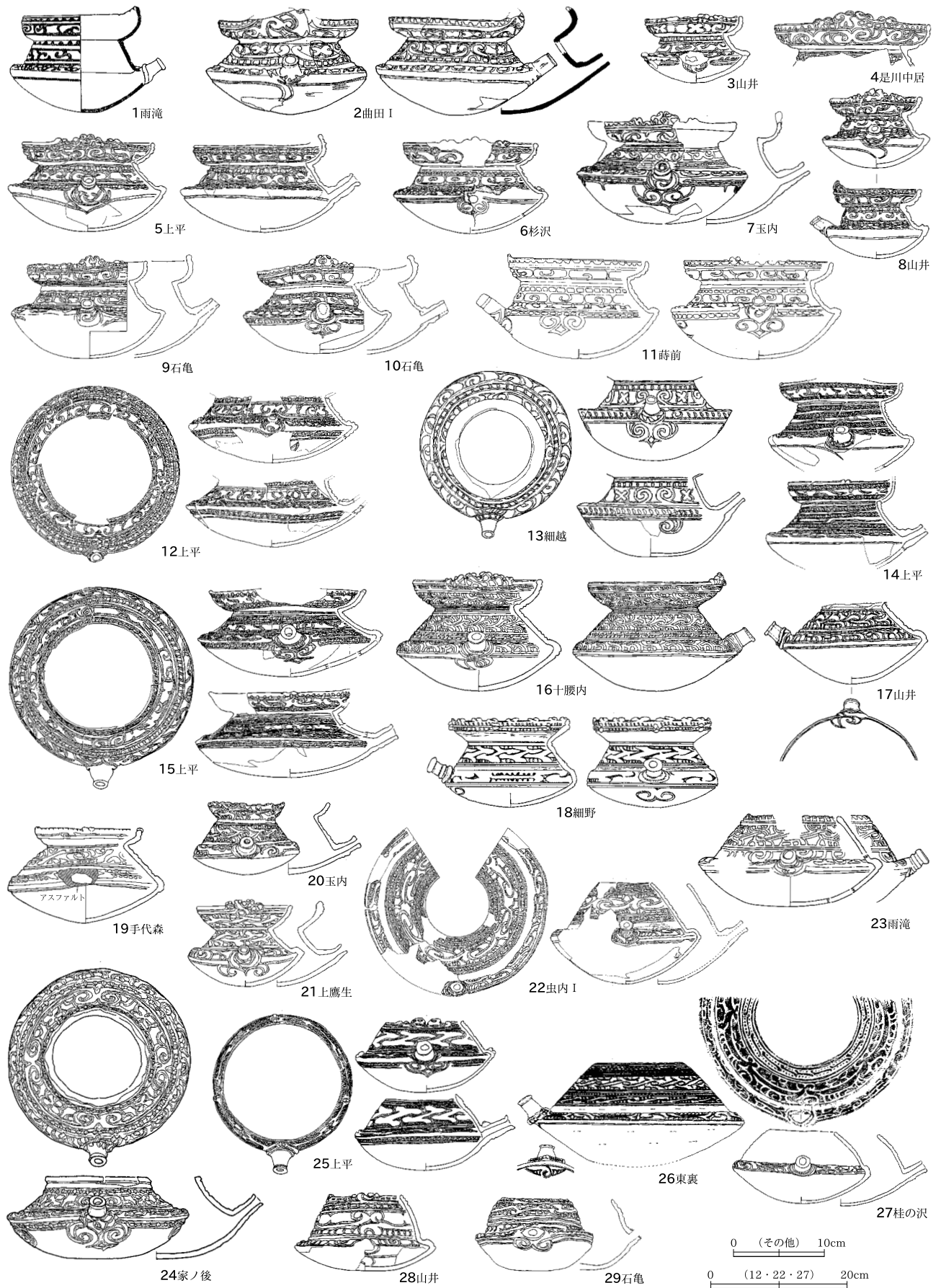


図12 東北北半の大洞BC₂式注口土器 (1)

も現出する(図12-7・11・13)。体下半部の文様は、先行する型式では主にB類に看取されるものであったが、当該期ではA類にも顕在化しており、共に後続型式の磨消縄文に連なっていくと想定される。

B類の形制はA類に同調しており、肩部が縮小しその文様帯の上下幅も狭まる。口頸部は口唇部が沈線で区画され頸部と分離され、頸部の文様帯は複雑な重畳を示す。

B類の頸部文様は、K字文(羊歯状文)が主体となる。図12-22はその原初的形態を呈するもので、23・25・26が典型となる。K字文は矩形入組文の系譜を引く文様で、上下で半単位ずらした矩形入組文の内側沈線(咬合部寄り)をS字に反転させ、区画内に截痕を充填した文様を繰り返して配したものである。既に先行型式の鉢形の頸部文様の入り組みを持ったC字文に、その初現を見ることができるが、大洞BC2式期に盛行し、特に終末段階のB類に顕著となる。

その他の文様としては、羊歯状文(29)、鉢巻き状文様(24・27・28)が存するが、文様帯の重畳が著しく、異なる文様を重畳した例(23・26・27)や、下端が無文帯となる例(図7-49、図12-22・26)も見られる。

口端の正面突起はA類のような珊瑚状突起は見られず、平縁を呈する例が多い(22～24・26・27・29)。また口頸部は直線乃至内彎気味に立ち上がるものが通例であるが、24は外彎気味に立ち上がっている。後続型式には直線又は外彎気味に立ち上がる例が多いことから、その関連性が想定される。

肩部の文様帯は上下幅が狭まっており、羊歯状文と陰刻が交互に施される例が多く、26・27が典型となる。またA類と同様に体下半部に截痕列を圍繞した例も認められる(24・25)。

筆者は新井田川・馬淵川流域の事例から、大洞BC2式が新古に細分される可能性を指摘した。即ち肩部の形制と体下半部の截痕列の進出を根拠に挙げたが、頸部と肩部の境界が強く屈折し肩部が短く張り出す形制から、屈折が弱く段と化するものへの変化として捉えた。しかしその変化が体下半部の截痕列の進出と呼応するとは必ずしも認め難く、厳密な区分にはなり得ないかもしれない。但し後者の注口直下にはノ字文は認められず、殆どが双頭渦文で構成されており、ノ字文の有無が新古の判別の目安になる可能性は考えられる。またA類の口端に全周

した突起を配する例が現れる(図12-18・20、図13-1)。左記の注口基部には環状の隆帯が圍繞される例も多く、これ等も新相の特徴と言えるであろう。

当該期から文様を施した注口土器C類が顕在化する。C類は後期末～大洞B1新式までは多く認められたが、大洞B2～BC1式には不明瞭となり、体部に縄文を施した壺形の類型が僅かに知られるのみであった。当該期には複雑な文様帯構成を持つ壺形の注口土器が明確となり、大洞C1式更には同A式へと継承されるが、晩期初頭のC類に直接系統が辿れるものであるのかどうかは、判然としない。

金子昭彦氏は大洞BC2式を新古に二分している(金子1991)。「大洞BC2式の古い部分」については、「肩部が縮小した、その全体的な形態に最も特徴が見られる。頸部あるいは(口)頸部が三帯に別れ、上下の帯は無文あるいは截痕列が配される文様構成を持つものが一般的である」と規定している。また「大洞BC2式の新しい部分」については、「肩が縮小して体部全体が菱形に近くなった、その形態に最大の特徴を持つ」と規定している。図示された資料では、金子氏の「大洞BC2式の古い部分」には筆者の大洞BC1式と同BC2式が含まれており、「大洞BC2式の新しい部分」は筆者の大洞BC2式にほぼ合致した内容となっている。

林謙作氏は口端の区画が大洞BC式細分の指標となることを指摘している(林ほか1995)。区画自体は先行型式にも見られ、前記した例外も存しているが、大筋では従うべき指針と言えるであろう。

(2) 大洞BC2式終末の段階(図13)

A類については、蒔前例(図7-45)を基に設定した。口端にはB突起、口唇部には刻目隆帯が圍繞されるが、突起の全周化と口縁部下半の文様の消失といった変化が看取される。頸部には磨消縄文、肩部に突起列、体下半部に磨消縄文、注口基部に菱形の隆起装飾が認められ、新たな様相が現出しており、蒔前例に類する土器は、先に記したように大洞C1式に位置づけられるのが通例であろう²⁵⁾。しかしB類の蒔前例(図7-50)に比べると、頸部の文様を除き極めて類似した特徴を有しており、筆者は50に併行するA類として大洞BC2式終末の段階に位置づけている。

この系統を求めてみると、図12-18・19に原初的

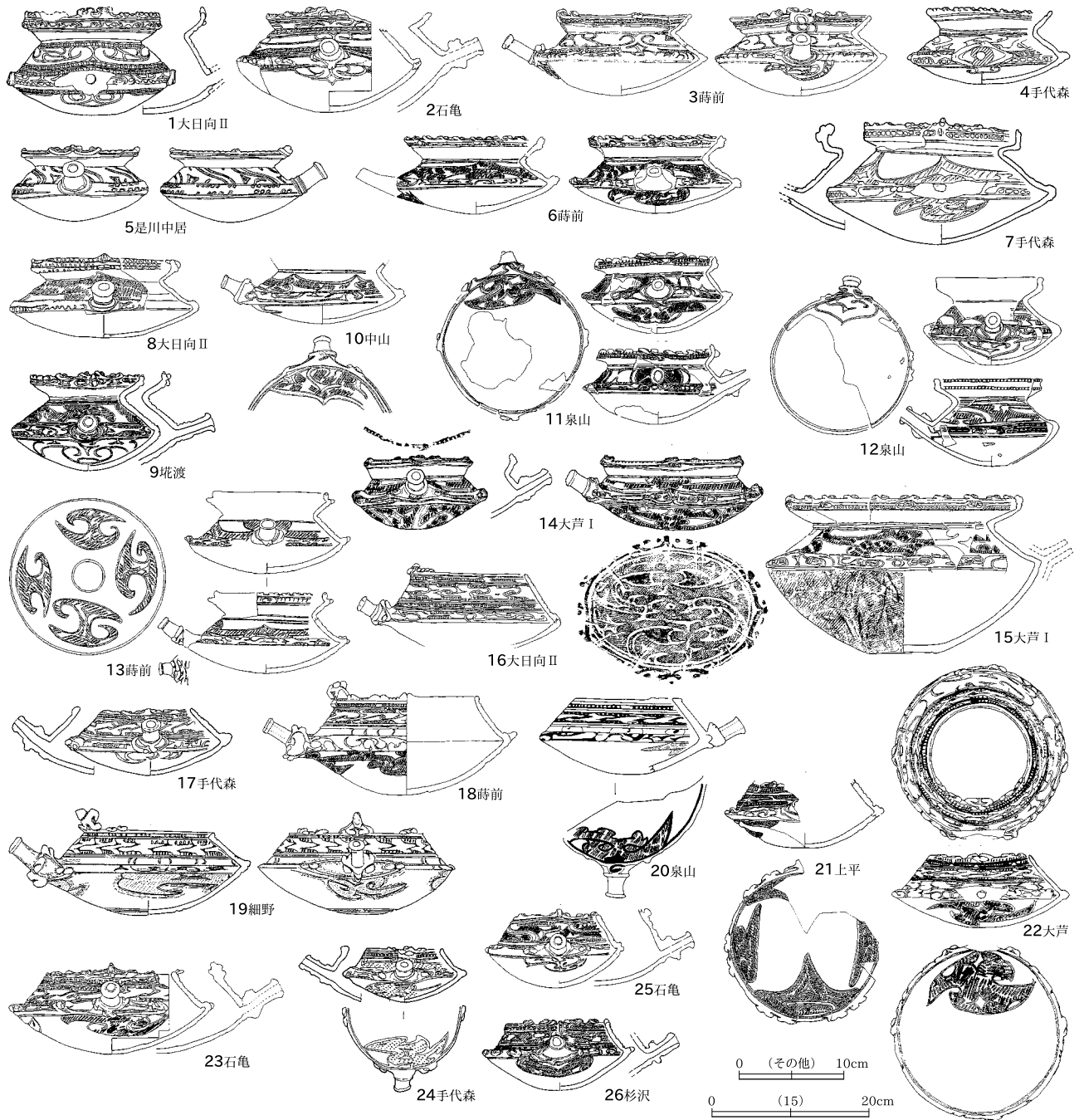


図13 東北北半の大洞BC2式注口土器（2）（大洞C1式を含む）

形態を指摘することができる。口縁部は退縮の方向にあり、図12－18の口縁部の形状は図7－45に近似する。図12－19も口端に刻みが加えられ、口唇部に伸長化した入組三叉文のみが施される。両例とも頸部の上下幅が広く、肩部も丸味を有し、羊歯状文・K字文で構成されることから、筆者は大洞BC2式の新相に位置づけている。

図13－1～3はこれ等とほぼ同時期に位置づけられる資料であろう。正面突起を残し、口縁部下半には辛うじて文様帯が構成される。頸部には鉢巻き状文様が施されるが、縄文地文はなく、肩部は隆帯化の過程を示す。

1・2の体下半部には截痕列が巡らされ、注口直下に双頭渦文、3の注口直下には截痕を加えた巴状文様が施されており、2・3の注口基部には環状隆帯が圍繞される。しかし菱形の隆起装飾はまだ認められない。上記した例（図12－18・19、図13－1～3）の系統から、蒔前例（図7－45）が成立したと考えられる。

図7－45に併行する例が、図13－4～13であろう。形制は扁平化しており、体部の断面形態は菱形を呈し、肩部は隆帯化する。口縁部は刻目帯や截痕列で構成され、口縁部下半の文様帯は消失しており、正面に装飾性に富

む突起を付したり(5・7～9・11)、B突起が圍繞される(6・7・11)。従前のA類の口縁部は、外折して内彎気味に立ち上がる例が殆どであったが、当該期では外折した口縁部が途中で屈折して直立気味に立ち上がる有段口縁に変化しており、更に大洞C1式では退縮が進み突起列へと変化する。

頸部の文様は縄文地文を持つものと、地文を持たない二態が存しており、K字文(4)、鉢巻き状文様(13)、弧線文(6～8・10)、クランク状文様(5・12)等、文様モチーフはバラエティーに富む。体下半部にも文様を持つ例と持たない例(4・5・8)が存するが、前者の磨消縄文については後述する。注口基部には環状隆帯が圍繞されるが、菱形の隆起装飾の有無が認められる。恐らく持つ例が新しい様相であろう。

14・15は、上記の系譜を引く岩手県久慈市大芦I遺跡出土の注口土器であるが、いずれも大洞C1式に位置づけられよう。14は楕円形の平面形態を呈し、体下半部に主要素²⁶⁾の末端が釣鐘状に膨らんで対向する磨消縄文、頸部には鉢巻き状文様に類する磨消縄文が施される。肩部の突起列や口端の細かい縦の刻目に新しい様相が看取され、口縁部の刻目帯は消失している。15は平底の大型の注口土器で、口縁・頸部は6に類似するが、肩部は深い陰刻によってB突起列が作出される。

B類は先に指摘したように規格性が極めて強く、東北北半一円に分布が認められる。即ち正面口端のA突起風の大型突起とその周囲のB突起、頸部のK字文、肩部の突起列、体下半部の磨消縄文、注口基部の菱形の隆起装飾に特徴づけられる(図13-16～23、図19-2・3)。既に先行型式(大洞BC2式)において頸部のK字文は盛行するが、当該期の口頸部は直線的又は外彎気味に立ち上がっており、先行型式で見たような内彎する例は認められない。また口端の突起の発達が著しく、平縁が主体であった先行型式とは対照的である。肩部には側面・背面と注口基部の菱形の隆起装飾の両端に横長のB突起が付され、また体下半部に磨消縄文を持たない古相には、羊歯状文の系譜を引く截痕が認められる(16・17)。

頸部の文様帯の上端には截痕列が巡らされるが、截痕は連続的ではなく、幅広の截痕を介してまとまりを持って配置される(16～20・22・23)。K字文の下端に截痕列を圍繞する例は少なく(16)、無文帯(17)や弧状

の沈線文様等を施した例(18～20・22)も見られる。

24～26は頸部に磨消縄文を施す稀有な例である。24は頸部上端に截痕列を巡らし、その直下に鉢巻き状文様、体下半部の注口直下に反転した巴状の磨消縄文が施される。25は頸部にクランク状の主要素を配し、狭長な副要素は細かな截痕で充填される。肩部には大きな截痕が加えられ要所にB突起を有し、体下半部の注口直下には地文を持たない反転した巴状文様が施される。26は頸部上下端に截痕列を巡らし、その間に五角形乃至鼓状の副要素が上下交互に配される。肩部は深い陰刻により突起列が作出され、体下半部の注口直下には磨消縄文の文様が施される。3例とも頸部文様の在り方が大洞C1式に近似するが、体下半部の文様は注口直下のみで、特に前二者には反転した巴状文様が配される。この文様は後述するように体下半部磨消縄文の古的様相であり、少なくとも24・25は当該期に位置づけられると考える。

筆者の抽出したA・B両類が、同時期の関係にあるのかどうかは、問題になるところであろう。確かに両類の形制は近似している。体部の断面形態は菱形を呈し、共に低平化が著しく、口径(A類は頸部上端の径)が大きく、注口基部は隆帯で装飾され、注口部は土器本体に比べ大きく作出される。また隆帯化した肩部、体下半部の注口直下の磨消縄文も共通しており、頸部文様の差異を除くと、A類の口縁部を省略した形態がほぼB類に相当する内容となっている。

しかしB類の頸部文様はK字文主体であり、縄文地文を持たないのに対し、A類は文様のバリエーションが豊富で、磨消縄文で構成される例が多い。また口縁部突起では、A類が正面に装飾性に富む突起を配したり、B突起が全周化されるのに対し、B類は正面にA突起風の大型突起とその周囲にB突起を配するのみで、全周展開しない。A類は頸部文様が磨消縄文で構成されることから、前記したように大洞C1式に位置づけられる場合が認められるが、筆者は当該期のB類に伴うA類の抽出を試みた次第である。従って大洞C1式に盛行する頸部の磨消縄文は、体下半部の磨消縄文の出現と軌を一にしており、大洞BC2式終末の段階に初現が求められる。

B類は当該期をもってほぼ姿を消し、大洞C1式にはA類とC類のみが継承される²⁷⁾。B類は規格性が強く、東北北半に広い分布が認められていただけに、その消失

は劇的な印象を受けざるを得ない。

では、何故これだけ盛行を極めた類型が廃絶されてしまったのであろうか。一つには、K字文の衰退に関連するものと考えられる。B類の頸部文様はK字文でほぼ統一されており、器形と文様の相関性が極めて強い。K字文が大洞 C1 式に継承されることはなく、B類はK字文と共に終焉を迎えたと言えるのかもしれない。二つ目には、A・B両類の形制が極めて近似していたことによるものと思われる。文様の差異を除くと、口縁部の有無だけが判別の基準となる。A類では口縁部の退縮が著しく、刻目帯・截痕列が圍繞されるのみとなる。またB類でも口端が僅かに外折する例（図 13 - 19）も現れる。両類の形制は接近した状況にあり、B類が消滅したと見なすよりも、A類との融合化が進んだとの解釈も成り立つであろう。

筆者が大洞 BC2 式終末の段階として抽出した資料に対しては、研究者間で編年的位置づけに差異が存するのが実情である。即ち大洞 BC 式に含める立場と、同 C1 式に含める立場に大別される。前者に立つ研究者としては、高橋龍三郎・安孫子昭二・金子昭彦・鈴木克彦の各氏、後者に立つ研究者としては芹沢長介・藤沼邦彦・鈴木加津子の各氏が存する²⁸⁾。

研究者間の見解の相違は、大洞 BC 式の範囲をどのように規定するのに関わっている。筆者は大洞 BC2 式から同 C1 式への型式変遷における過渡的な土器群としての抽出を試みた次第である。山内清男氏は型式設定に当たり、所謂羊歯状文が大洞 BC 式に固有であることを指摘していた（山内 1930）。山内氏の設定基準を重視するならば、当段階のB類はK字文（羊歯状文）に特徴づけられており、大洞 BC 式の範疇に含めるべきものとなるであろう²⁹⁾。但しA類については、前記したように共通性が認められるものの、同時性については問題を残している。

高橋龍三郎氏は青森県細野・杵沢遺跡等の検討を通して、台付鉢の頸部文様が大洞 BC 式の羊歯状文から同 C1 式の「二溝間の截痕」に至る変化の過程において、斜行直線化した羊歯状文の過渡的な一群を「大洞 BC 式終末の型式」として抽出し、これ等に伴う精製土器の磨消縄文（主要素のみで構成される入組文）を明らかにした（高橋龍三郎 1991・99）。

筆者が抽出した大洞 BC2 式終末の段階の注口土器と、高橋氏が指摘した土器群との整合性は現時点では明確になっていない。強いて傍証を挙げるならば、筆者の抽出した遺跡から高橋氏の指摘する平行化の過程にある截痕列や磨消縄文の土器群を出土している点、また注口土器B類に主体的に施されるK字文のネガ文様と、主要素のみで構成される磨消縄文のネガ文様との類似性といった状況証拠にとどまっている。しかし筆者は高橋氏が指摘した土器群にこれ等の注口土器が伴うであろうと私考しており、出土状況に基づく検証は今後の課題である。

6 部位毎に見た系統の変遷

これまでの検討を踏まえて、複数型式にまたがる注口土器の特徴的な属性の変遷を整理してみたい。

A 注口土器の形制の変遷

注口土器の形制は、山内清男氏の定義から大筋の変遷は明らかである。形制は扁平化の過程にあり、口縁部は退縮、頸部は拡大、肩部は縮小の変遷を辿っており、後期末～晩期初頭にかけての形制の変化は、前記したように一括資料からも跡づけられている。

図 14 は、各型式の代表的な断面形態を配列したものである。後期末葉（瘤付第Ⅲ・Ⅳ段階）～大洞 BC2 式終末の段階まで 10 階梯に区分しており、形制は山内氏の指摘のように、扁平化の過程を明示している。

A 類で見ると、後期末葉～大洞 B1 古式（1～10）にかけては、徐々に体部が張り出し、上部ら圧迫された様相を窺わせており、口縁部も縮小傾向にある。しかし壺形の形制から脱却したとは、まだ認め難いと言えよう。

大洞 B1 新式（13～17）では、口縁部が内彎気味にほぼ直立し、頸部は幅広く、体部中央には明確な稜線が形成され、大洞 B2 式に盛行するA類の原初的形態が確立する。壺形とは異なった独立した器種としての注口土器が成立したと見ることができるであろう。

更に大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階（19～23）では、口縁部の器高がまだ相対的に高いが、体部が張り出し稜線がやや尖鋭化し、肩部と体下半部の傾きがほぼ等しく又は肩部がやや彎曲する。

大洞 B2 古式（25～27）では、扁平化が進行して、頸部と肩部の接着の位置が低下し、肩部上端が弱く陥没する。また頸部は先行型式から継続して立ち上がる傾向

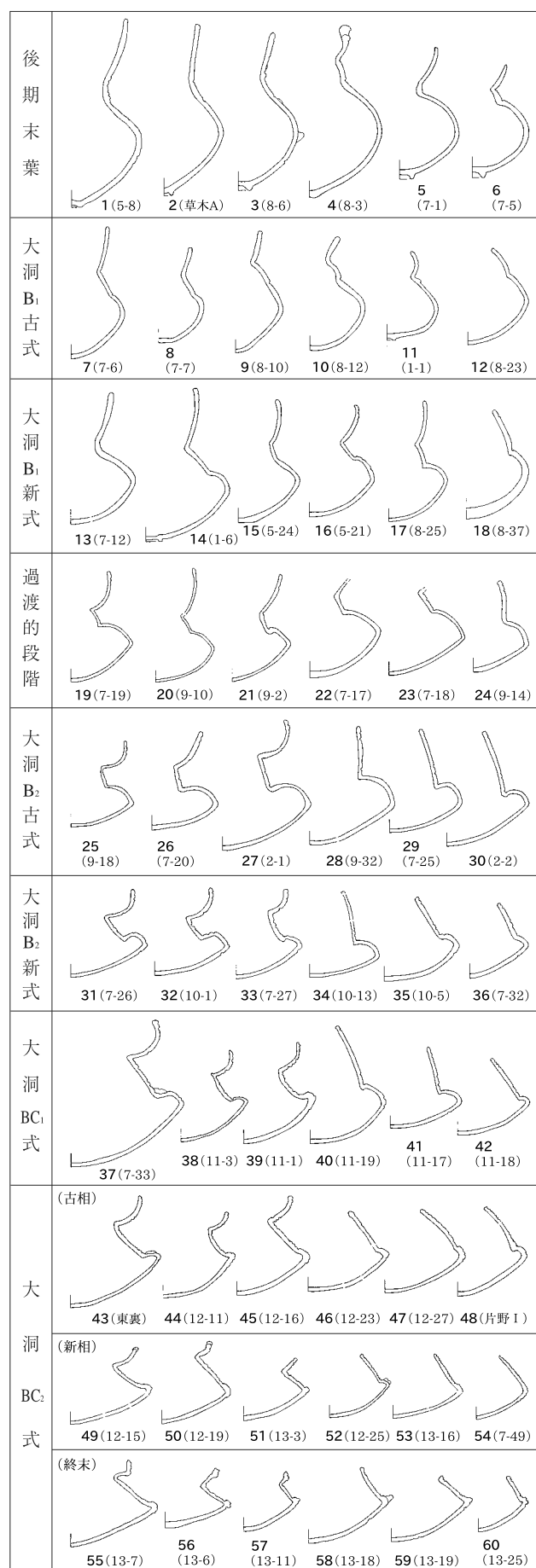


図14 注口土器の形制の変遷〔縮尺1/8〕

が看取され、口縁部の器高は相対的に減少する。

大洞 B2 新式 (31 ~ 33) では、肩部上端の陥没が著しく、肩央は上方に迫り出し、扁平化のピークに相当する。肩部の下端は底に向かって垂直に近い角度で落ちて、断面形態は著しい非対称を呈する。また頸部は下端が広がり、傾きが強くなる。

大洞 BC1 式 (37 ~ 39) では、先行型式の形制を踏襲して肩部が張り出すが、迫り上がりは弱まり、肩部が縮小傾向にある。頸部の上下幅が伸張しており、器高に対する口縁部の比率が減ずる。

大洞 BC2 式は、従前の大洞 BC2 式と終末の段階とに大別されるが、前者は更に新古に二分される。古相の段階 (43 ~ 45) では、肩部が縮小しており、頸部と肩部の境界が強く屈折し、肩部が短く張り出す。頸部は上下幅が伸張し、口縁部は縮小する。その新相 (49 ~ 51) では、更に扁平化が進行し、頸部と肩部の境界の屈折が弱く、段と化す。頸部の傾きは強まり、頸部と体下半部の傾きがほぼ等しく、断面形態は菱形を呈し、口縁部は退縮する。

大洞 BC2 式終末の段階 (55 ~ 57) では、肩部は隆帯化し、体部の断面形態は菱形を呈する。外折した口縁部は退縮が著しく、途中で屈折して直立気味に立ち上がる。

B 類については後期末葉の状況が判然とせず、大洞 B2 古式までは僅かに認められるのみである。大洞 B1 古式 (12) では、口頸部と肩部の傾きに大きな差はなく、境界で僅かに屈折するのみである。大洞 B1 新式又は同 B2 古式との過渡的段階 (18・24) にかけては、体部中央に稜線を持つようになり、肩部と体下半部の傾きがほぼ等しく又は肩部がやや彎曲し、口頸部の傾きも立ち上がる。

B 類が顕在化するの、大洞 B2 古式以降である。大洞 B2 古式 (28 ~ 30) では、体部の形制は A 類に同調して、扁平化の過程にあり、肩部上端が陥没した例も認められる。但し体部の低平化が著しく、平底に近い形制の例も存する。

大洞 B2 新式 (34 ~ 36) も、体部の形制は A 類に同調するが、肩部上端は陥没せずに肩部が上端から横に張り出し、下端が底に向かう例が多く認められる。

大洞 BC1 式 (40 ~ 42) では、先行型式と同様に肩部上端の陥没が顕著でなく、肩部が横に張り出す例が多く

見られ、横位に突出して、肩部文様が正面から確認しにくい例も現れる。

大洞 BC2 式の古相（46～48）では、A 類の形制に同調し、肩部は縮小し、文様帯の上下幅が狭まり、頸部と肩部の境界が強く屈折して、肩部が短く張り出す。また口頸部の内彎した例が多く見られる。その新相（52～54）では、更に扁平化が進行して、頸部と肩部の境界の屈折が弱くなり、段と化すようになる。

大洞 BC2 式終末の段階（58～60）では、肩部は隆帯化して、断面形態が菱形を呈する。口頸部は直線的乃至外彎気味に立ち上がり、口径が大きくなる。B 類は当該期をもってほぼ姿を消し、大洞 C1 式に継承されることはない。

次に底部形態の変化に触れてみたい。晩期前葉の注口土器は丸底が通例であるが、後期末葉～大洞 B1 古式にかけては、底部が小さく作出される例が多く、弱い上げ底又は高台が付される（1～6）。特に瘤付第Ⅳ段階～大洞 B1 古式の A・C 類には、中央が窪んだボタン状の突出が特徴的である。これは底部にボタン状の低い粘土を貼付した後削り出したものであるが、大洞 B1 古式では丸底の比率も高まっており、大洞 B1 新式には認められなくなる。底部の作出自体は大洞 B1 新式（14）まで残存するが、後続の型式では殆どが丸底で、平底又は高台付は例外的に見られるのみとなる。

注口部の変遷を後期末葉～晩期前葉で見ると、形制の扁平化に伴って注口部の位置は低下傾向にある。実際には大洞 B2 古式に低い位置に付されるようになるが、注口の傾きも瘤付第Ⅲ段階の外反気味に屹立した在り方から、次第に直線的となり、倒伏の傾向にある。

注口部の形状では、後期末葉に先細の無文の例が多く見られるが、大洞 B2 古式に注口先端に環状の沈線が施され、「^{たが}箍状の隆帯」（林ほか 1995）となる例が多くなる。また注口基部の半球状の膨らみも、大洞 B1 古式や同新式に既に認められるが、盛行するのは大洞 B2 古式以降で、大洞 BC2 式の新相では環状の隆帯と化し、同終末の段階にはその外周に菱形の隆起装飾が施され、大洞 C1 式へと継承される。

注口直下の膨らみが二袋状を呈するのは、後期末（瘤付第Ⅳ段階）～大洞 B1 古式の特徴であるが、その残影は大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階まで認められる。

B 文様帯構成の変遷

口縁部・頸部・体部の 3 段構成からなる A 類の文様帯の変遷を見ると、後期末葉～大洞 B1 新式にかけては無文化が著しく、文様帯の構成は一部の例に認められるのみである。文様が施される部位は口縁部と肩部であり、頸部は無文が通例となる。

大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階になると、口縁部と肩部の注口付近、更には体下半部の注口直下にも文様が施されるようになり、文様帯構成の基本が確立する。大洞 B2 古式も同様の構成が踏襲されるが、口縁部と肩部文様の発達が著しく、頸部には 1 条沈線が圍繞されるようになり、更に大洞 B2 新式の頸部には平行沈線や点列帯が圍繞され、頸部文様の発展過程が認められる。

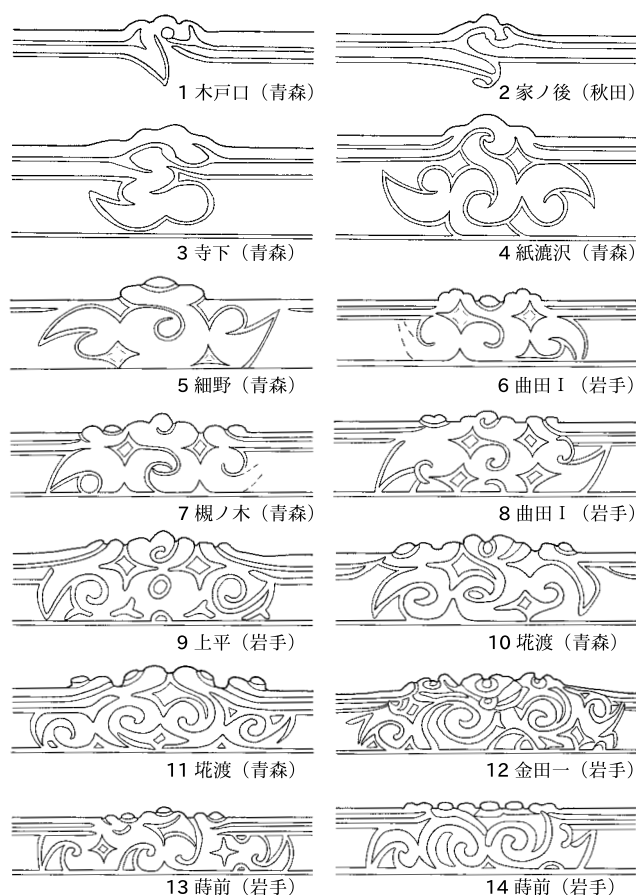
大洞 BC1 式は頸部文様帯が確立する点で画期となる。しかし先行型式の系譜を引く点列帯で構成される例も多々存しており、過渡的様相が看取される。

大洞 BC2 式では、口縁部・頸部・肩部・体下半部の文様帯が通例となる。口縁部文様は口部装飾帯と口縁部下位の文様帯とに分離され、文様帯の上下幅は縮小する。頸部文様帯は伸張しており、上下端に截痕列が巡らされ、3 段構成となるものが多く、また肩部文様帯は上下幅が縮小し、横位に短く張り出すのみとなる。その新相では、口縁部下位の文様を欠いた例も散見され、肩部は更に縮小し、体下半部上端には截痕列が進出する。

大洞 BC2 式終末の段階では、口縁部が刻目帯・截痕列で構成されその直下は無文となる。頸部と体下半部には磨消縄文が施され、肩部は隆帯化し突起が付される。体下半部の磨消縄文は注口直下のみに施される例が多いが、B 類と同様に全周展開した例も見られる。

後期後半を特徴づけたⅡ b 文様帯は、注口土器の無文化と共に後期末には消滅しており、晩期の壺形にのみに継承されることになる。その点で後・晩期を境にして、注口土器と壺形は異なった方向を辿ることになるが、注口土器においてもその痕跡は C 類や A 類の一部に認めることはできる。しかし主体的に継承されるものではなく、大洞 BC1 式になって再生する頸部文様帯は、新たに出現した文様帯として理解することができよう。

口頸部・体部の 2 段で構成される B 類では、大洞 B2 古式以前は、口唇部のみの文様や頸部下端に沈線が認められるが、類例に乏しい。



1～6：大洞B2古式、7～11：大洞B2新式、12～14：大洞BC1式

図15 注口土器A類口縁部文様模式図

B類が顕在化する大洞 B2 古式では、口頸部の文様、肩部の注口付近の文様、体下半部の注口直下の文様の構成が通例となり、大洞 BC2 式まで継承される。基本的にはA類に同調した変遷を辿るが、B類においては口唇部が分離されたり文様の全周化した例が、既然大洞 B2 古式から認められる。

大洞 BC1 式では、口頸部文様帯が口唇部・頸部・頸部下端の3段構成をとる例が多く見られる。特に頸部下端には点列帯が圍繞されており、A類の頸部文様との親和性を示唆している。先行する大洞 B2 新式に平行沈線の圍繞される例が多いのも、A類の頸部文様と相互の関連を有していた結果と思われる。

大洞 BC2 式では、口頸部の文様帯の発達が著しく、文様帯の重畳が複雑となる。口唇部・頸部・頸部下端の構成は先行型式と同様であるが、頸部が多段化して異なった文様モチーフを重畳させたり、下端に無文帯を配する例が見られる。またその新相では、A類と同様に体下半部上端に截痕列が巡らされる。

大洞 BC2 式終末の段階では、口唇部が区画され、頸

部の文様帯は上端・中位・下端の3段構成となる。上端には截痕列、中位にはK字文が巡らされるが、下端は無文帯・沈線文様・截痕列等で構成される。また肩部は隆帯化し、体下半部には磨消縄文の文様が出現する。

C 口縁部・口頸部の巴状文様の変遷

(1) A類の口縁部文様 (図15)

A類の口縁部に巴状文様が多用されるのは、大洞 B2 古式～同 B2 新式にかけてである。

A類の晩期初頭には、既に全周化した磨消縄文の口縁部文様が存している。しかし大洞 B2 古式以降に盛行する巴状文様を主とした口縁部文様に、直接繋がることはないように思われる。

巴状文様の母体となるのは、大洞 B1 新式の山井例 (図7-12) であろう。山井例は一山状突起の直下に入組三叉文が単独に配されるのみである。この三叉文の尻が伸長して連結すると共に、その直下に区画沈線が圍繞されることで、後続型式に見られる全周化した入組・魚眼状三叉文が成立すると考えられる。

従って大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階が、口縁部文様の胎動期に相当する。当該期は全周された三叉文が一般的となる。縄文地文を持つ例 (図9-1・6) と持たない例 (図7-19、図9-3・8) の二態が存し、正面突起として一山状突起が配される。その中には突起直下の三叉文の一端と円形刺突から垂下した沈線でノ字状の文様を構成した例 (図9-2) や、区画沈線が正面で反転して巴状文様の前駆的様相をなす例 (図9-5) も現れる。また大洞 B2 古式の古相にも同様の例 (図9-16～19) が認められており、筆者はこれ等の系統から巴状文様が成立したと考えている。

図15-1・2は、大洞 B2 古式でも古相に位置づけられる (図9-16・18)。共に正面突起は三山状を呈し、下端の区画沈線が正面でノ字状に垂下する。このノ字状文様の発展形態が、図15-3の寺下例 (図7-20) であろう。口唇部に入組三叉文を残し、正面で反転した区画沈線が、左側では尖鋭に、右側では丸味を持って更に反転し、括れ部で連結しており、下端の区画沈線には接着しない。同様の一筆書きの例は図9-5・19にも見られ、巴状文様の原型となるものであろう。

図15-4～6は、大洞 B2 古式の巴状文様である (図7-22、図9-20・21)。既に口唇部に入組三叉文は

姿を消しており、図 15 - 4 の三山状突起直下の入組文にその名残をとどめる。口唇部に囲繞された 2 条沈線は、先に見た全周した三叉文と区画沈線の系統であることは確かであろう。その点で三叉文を口唇部にとどめた例は古相に位置づけられる。

大洞 B2 古式の巴状文様は、菱形の頂点と三叉状の沈刻を対向させたり（6）、反転して角立てた沈線文様で描出されており（4・5）、文様の中央には菱形の一端の渦巻文や入組文が見られる。丁度 X 字状に対向した巴状のモチーフが、2 組並列した構成をとっている。

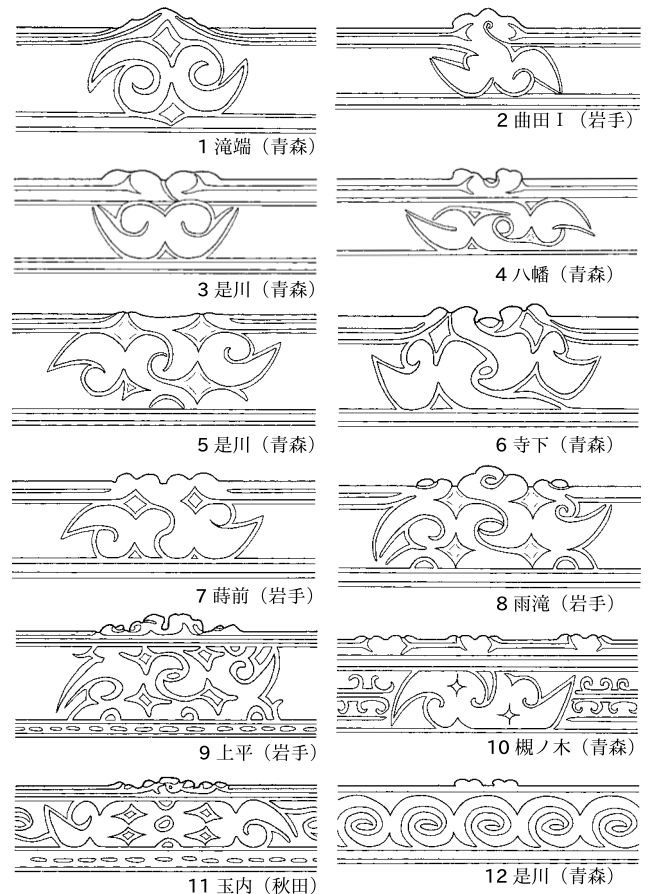
図 15 - 7 ~ 11 は、大洞 B2 新式の巴状文様である（図 4 - 1、図 7 - 26・27、図 10 - 1・4）。正面突起は三山状を呈するが、突起の左右に B 突起が配されるようになり、装飾が加味され、三山状突起の頂部も分割される（図 15 - 10・11）。口唇部上端の沈線が突起の装飾に参入しており、菱形文の頂部も突起間で露出する（図 15 - 7 ~ 11）。

大洞 B2 新式の巴状文様は、先行型式と同様に菱形の頂点と三叉状・棘状の沈刻を対向させて描出されるが、菱形が二重に配されたり（8）、円文や半円が付加され（9）、また渦巻菱形文の一端が複線化し（10・11）、文様の繁縷化が進行しており、先行型式で見た X 字状に対向した巴状のモチーフは形骸化の方向を辿る。

図 15 - 12 ~ 14 は、大洞 BC1 式の巴状文様である（図 7 - 33 ~ 35）。正面突起の装飾は華美となり（図 15 - 12）、口縁部文様は繁縷化して、横位に拡大する。菱形文の末端は、文様帯の上下幅の縮小に伴い上・下方それぞれに開く構成となっており（12 ~ 14）、ポジ文様は細身に描出され、巴状文様は形骸化する。

大洞 BC2 式では、口縁部文様帯は全周展開すると共に、口部装飾帯が分離され、上下幅が狭まる。巴状文様が残存する例（図 12 - 2・4）も例外的に存するが、C 字文と同様の構成をとっており、X 字状のモチーフにその名残をとどめるのみとなる。

A 類の正面突起の変遷を見ると、大洞 B1 新 ~ B2 古式の過渡的段階では、一山状の突起が配されるが、大洞 B2 古式ではそれが発展した三山状突起、更に大洞 B2 新式ではその周囲に B 突起が付される。次第に装飾が加味され、大洞 BC2 式には珊瑚状突起へと発展するが、その終末の段階にはやや衰退の兆しを見せ始め、B 突起



1~6: 大洞B2古式、7~9: 大洞B2新式、10~12: 大洞BC1式

図16 注口土器B類口頸部文様模式図

列が全周に配される。

(2) B類の口頸部文様 (図 16)

B類の口頸部に巴状文様が多用されるのは、A類と同様に大洞 B2 古式 ~ 同 B2 新式にかけてである。

B類は大洞 B2 古式になって顕在化する。それ以前の状況は判然とせず、A類のように文様の系統を辿ることはできない。このことからB類の口頸部文様の成立に当たっては、A類の影響の基にあったと想定される。

B類においては、A類で見た原初的な形態を残す例が僅かに認められる（図 1 - 14、図 10 - 15）。いずれも三山状突起を配し、口唇部に三叉文が囲繞され、その直下に巴状文様が施されるが、下端の区画線には接着しない。

図 16 - 1 ~ 3 が、大洞 B2 古式でも古相に位置づけられる巴状文様であろう（図 9 - 28・29）。図 16 - 1 は、正面突起直下に菱形文が二重に配され、菱形両端の沈線が入り組んだり反転して、対向した巴状文様が描出される。2 は三山状突起直下に魚眼状三叉文を配し、その直下で区画沈線が反転して、一筆書きで対向した巴状文様が描出される。3 は口端に B 突起が並列して配置さ

れ、口唇部が区画され、突起間から垂下した短沈線を囲むように対向した三叉文が圍繞される。頸部には上下で対向する棘状沈刻と沈線文様で、X字状の巴状文様が描出される。上記した3例はいずれも対向した二つの巴状文様で構成されており、A類にはない特徴である。

図16-4~6は、大洞B2古式の巴状文様である(図7-25、図9-35)。基本的にはA類に類似しており、菱形の頂点と三叉状の沈刻を対向させたり、反転して角立てた沈線文様で描出されており、文様の中央には菱形の一端の渦巻文や入組文が認められる。A類との差異としては、口唇部の区画や三叉文の残存と、正面突起としての並列したB突起の多用が挙げられよう。

図16-7~9は、大洞B2新式の巴状文様である(図3-2、図10-6・9)。基本的な構成はA類に同調する。正面突起は三山状を呈するが、突起の左右にB突起が配され、装飾が加味され、口唇部の区画も見られるが、菱形文の頂部が突起間で露出する(図16-8・9)。巴状文様は菱形の頂点と三叉状・棘状の沈刻を対向させて描出されるが、菱形が二重に配されたり(8)、半円が付加され(8・9)、文様の繁縷化が進行する。

図16-10~12は、大洞BC1式の巴状文様である(図11-11・21)。口頸部文様帯は全周展開する例が多くなり、巴状文様の例は少なくなる。巴状文様はC字文と同様の構成となり、形骸化するが、菱形文は殆ど用いられず、あっても付加される程度となる(10・11)。当該期以降口頸部文様帯から巴状文様は姿を消す。

B類の正面突起の変遷を見ると、大洞B2古式では三山状突起や並列したB突起が多用されるが、大洞B2新式では、A類と同様に三山状突起の頂部が分割されたり、周囲にB突起が付され、装飾が加味される。しかし大洞BC2式ではA類のような珊瑚状突起は見られず、寧ろその終末の段階に発達が著しく、A突起風の大型突起とその周囲にB突起が配される。

D 肩部文様について(注口付近の巴状文様)

肩部文様帯に施される巴状文様も、口縁部・口頸部の文様と同様に大洞B2古式~同B2新式に主体がある。

肩部文様帯は、文様帯として後期以来の体部文様帯の系統にあるが、それは全周展開の磨消縄文が基本であり、注口付近に限った文様が施されるのは、大洞B1新~B2古式の過渡的段階以降である。大洞B1新式まで

の全周化した文様とそれ以降の肩部文様との間に、明確な系統関係が存したかどうかは判然としないが、少なくとも巴状文様の古相の文様は磨消縄文で構成されており、無関係であったとは断言できない。しかし全周展開が原則であり、間接的な影響は存したにしろ、ここでは無文を主体とした注口土器の注口付近に、新たに生成した文様として考察を進めて行きたい。

図17は、大洞B1新~B2古式の過渡的段階から大洞B2新式の肩部の巴状文様の例である。その初現となるのは、大洞B1新~B2古式の過渡的段階に位置づけられる曲田I例(2)であろう。注口基部が弱く膨らみ、それを囲むように矩形の磨消文が配され、矩形の一端が注口直上で入り組む。またその外周には、先端が上下で対向した翼状の縄文地文の文様が左右対称に配される。翼状の文様は稜線に沿って沈線が伸びて上向いて鋭く反転し、更に楕円を描くようにカーブして、下向きに鋭く突き出し反転する構成で、対向した先端は細く作出され、カーブの中央には半円が付加され鉗脚(蟹の鋏)状となる。筆者は曲田I例のような注口を挟んで対称をなす翼状の磨消縄文の文様が母体となって、巴状文様が成立したと考えている。注口を囲う矩形の磨消文と、先細の縄文地文の翼状(ガイゼル髭状)の文様が特徴であり、類似の文様は図7-17・18、図9-1にも認められ、同時期に位置づけられる。

注口を囲う矩形文様の系統は、先行型式の全周化した文様に求めることができるであろう。晩期初頭の全周化した文様の注口土器には、注口基部を中心とした文様構成をとる例が多く、注口基部を沈線で縁取ったり(図8-18・19)、矩形や三叉状の文様で囲う例(図8-33・34・39)が認められる。注口基部の周縁を縁取った区画沈線の系統から、注口を囲う矩形文様が成立したと考えられる。

また大洞B1式の全周化した文様には、沈線による入組文や反転して角立てた文様が多用されるが、ボジ部分の文様が同じ幅になるように曲線的な沈線や矩形文・三叉文等を入れ込む傾向が見られる(図5-21、図8-32~35)。初現的文様として細く作出される翼状の文様も、この系譜を引く可能性も考えられる。特に図8-33は末端が尖鋭となる磨消縄文で構成されている。大洞B1式には末端を尖鋭にした曲線的な磨消縄文も多用

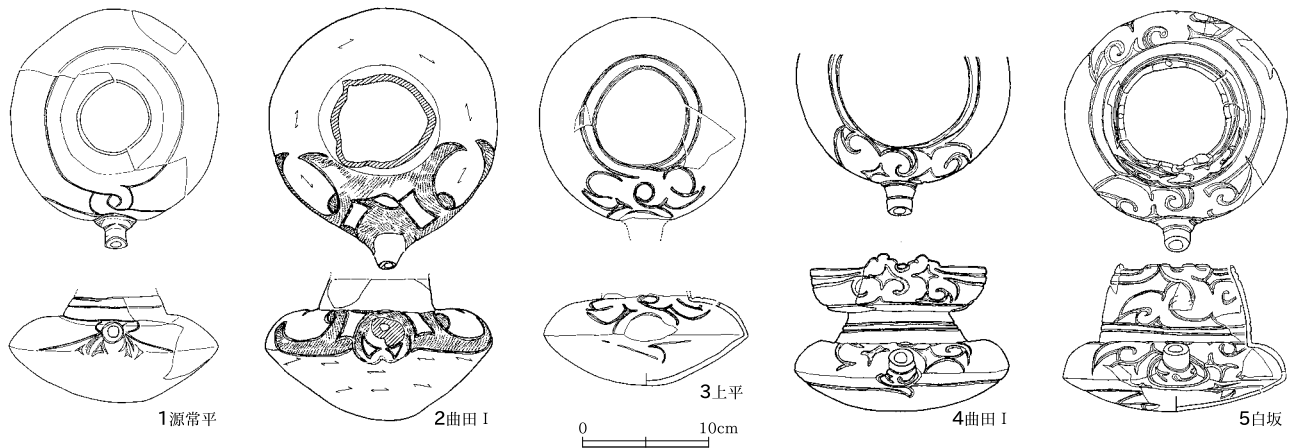


図17 肩部文様（巴状文様）の変遷

されており、その関連も想定されよう³⁰⁾。しかし現時点では、成立の系統性を明示するだけの良好な資料には恵まれていない。

源常平例（図17-1）は、大洞B1新式又は同B2古式との過渡的段階に位置づけられる。肩海上端に沈線が囲繞され、一端が注口直上で右側稜線から上方に伸びた沈線と入り組み、左側稜線からは注口基海上端に沈線が伸びており、入り組んだ円文を囲うように対向した弧線が配される。正面から注口部を見ると、八字状の沈線によって稜線を底辺に三角形区画が作出され、区画内には注口基部を縁取った沈線に沿って三叉状の沈刻、更に注口基部にも三叉状の沈刻が施される。このように注口基部の左右に三角形乃至菱形区画を配し、注口基部を囲って三叉状の沈刻を加えた例は大洞B1新式に散見され（図8-32・33）、注口付近が特別な文様施文部位として意識され始めた様相を窺わせる。図18-2の上鷹生例は注口付近を双頭渦文で菱形に囲った例で、大洞B1新式～B2古式の過渡的段階に位置づけられる。肩部には上端の渦文と入り組む左右の三叉文から伸長した角立てた沈線が施されており、巴状文様の前駆的様相が認められる。

大洞B1式の注口直上には、円文・渦巻文・入組文を配する例が多々存する（図8-33・34・39）。源常平例もその系統にあるが、注口部が文様の基点になっていることによるものと思われる。注口直上に配する文様は肩部文様帯の上下幅に規定されるが、その系統は渦巻文（逆の字状）として大洞BC1式まで継承される（図11-1・5・16）。

それでは、注口基部の矩形文様とその外周の翼状文様、

更に注口直上の円文等を手掛かりとして、後続型式への変遷を見て行きたい。

先ず大きな変化となるのは、縄文地文の消失である。肩部文様のみならず、口縁部と体下半部からも縄文地文が消失する。大洞B1新式～同B2式にかけて、主要な文様帯から縄文地文が消失するのは、注口土器に限らず亀ヶ岡式土器全般の趨勢であり、他の精製土器と軌を一にした歩みを示していると言えるであろう。

上平例（図17-3）は、縄文が消失した初期の例である。注口基部を囲う矩形文様の一端が翼状の文様と連結して、一筆書きで巴状の文様が左右対称に描出され、注口直上には円文を有する。巴状文様の円形の部分は大きく描出され、巴状文様の完成には至っていない。

曲田I例（図17-4）が、大洞B2古式に一般的な巴状文様である。左側の矩形文様は閉じているが、右側の一端は下向きと上向きの弧線に分かれ、一筆書きで巴状文様が描出される。矩形の頂点に対向して棘状沈刻が施され、また注口直上にJ字状の渦巻文を配することで、対向した巴状文様が2組並列した構成となっている。文様両端の撥ねる方向が上下逆になっており、口縁部文様の在り方と合致する。

大洞B2古式の曲田I例（4）と先行する磨消縄文（2）を比べると、前者は沈線で区画された浮文が太く短く描出されるため、文様帯の横幅は狭まっている。また文様帯の上下幅の縮小によるものか、先端が上下で向かい合う構成から、一端のみとなり、左右対称から反転した構成への変化が読み取れる。その点で上平例（3）は未熟な巴状文様と左右対称の在り方から、過渡的様相を示していると言えるであろう。図9-16・25・26・29は、

先端が上下で対向した鉗脚状で、左右対称の構成をとることから、曲田Ⅰ例(図17-2)の系譜を引くと考えられ、大洞B2古式でも古相に位置づけられる。

白坂例(図17-5)は、大洞B2新式に位置づけられる。文様自体は先行する曲田Ⅰ例(4)とあまり変わらないが、矩形文様が沈線と化し、やや繁縷化するのと、背面に同様の文様が施される点に差異が存する。

大洞B2新式には、背面だけではなく側面にも文様が施されるようになり、全周展開の前駆の様相を示している(図7-26、図10-1・4・9・13・16)。白坂例は良好な事例とは言いがたいが、上記の例で見ると、正面の巴状文様は注口の左右に菱形文が配され、菱形の頂点に対向して三叉状・棘状の沈刻が加えられ、注口直上には複線による「逆の字状」の文様が施される。先行型式で見た矩形の一端が開放されたり、沈線が伸びる例は少なく、菱形文のみで完結する。また背面には、正面と同様の文様(図10-1・9)が施され、文様両端の跳ねる方向は正面の文様を横に180度転回させた構図となる。側面には上下で対向した棘状の沈刻と下向きに渦巻く双頭渦文(図7-26、図10-9)や、「く字状・逆く字状」の弧線で囲まれた文様(図10-4・13)等が見られ、正面・背面とは異なった文様構成となる。

大洞B2新式と先行型式との大きな差異は、注口左右の菱形文にある。菱形文自体は矩形文様の形骸化した存在であり、巴状のモチーフは文様の両端のみに認められる。先行型式で見られた対向した巴状文様が2組並列した構成は失われており、口縁部・口頸部の文様と同様に形骸化が進行する。

大洞BC1式では、肩部文様帯の縮小化と文様の全周展開により、巴状文様は少なくなる。その中で、図7-33の金田一例が良好な例となるであろう。肩部文様帯の上端に截痕列が圍繞され、文様帯の上下幅が圧縮されており、巴状文様を構成する対向した三叉状・棘状の沈刻は上下で連結し、渦巻文も複線で構成され、繁縷化が著しい。注口の左右に菱形文をとどめた例も散見される(図7-34・38、図11-4・5)が、次第に類似の構図をとるC字文が取って代わり、肩部の縮小が著しい大洞BC2式では、巴状文様は認められなくなる。

E 体下半部の文様について

(1) 注口直下の「ノ字文」について

「ノ字文」は体下半部の注口直下で、左から伸びて来た沈線がカーブを描いて下に向かい、鋭く反転して注口に戻る沈線文様で、片仮名の「ノ」に類似することからこの名を付した。大洞B1新式～B2古式の過渡的段階に原初的形態が認められ、大洞B2古式～同BC2式にかけて盛行する注口土器に特有の文様で、左側から垂下して反転する例のみで、逆ノ字を呈する例は存在しない。

大洞B1新式～B2古式の過渡的段階は、注口付近に磨消縄文を施す特徴を持つが、既に注口直下には体中央部の稜線から伸びた縄文地文のノ字文が認められる(図7-17・18)。肩部の翼状文様の両端直下の稜線から、沈線が斜位に垂下しており、丁度体部文様下端の区画線としての様相を呈している。この文様から地文が消失することで、大洞B2古式以降の体下半部に盛行するノ字文が成立したと考えられる。

それでは磨消縄文のノ字文がどのように成立したのか、その来歴について幾つかの可能性を列記してみたい。

- ① 台付鉢の体部文様の「ノ字文」との関係。
- ② 注口土器A類の口縁部文様のノ字状文様との関係。
- ③ 注口基部の巴状の膨らみとの関係。

まずは、①について検討したい。東北北半の大洞B1新式の台付鉢の体部文様帯の下端には、ノ字文がしばしば散見される。体部文様下端の区画沈線が右下がりのカーブを描いて垂下し、体部文様の三叉文や円文・入組文から垂下した沈線と結合してノ字状を呈するもので、地文に縄文が施され、ノ字の外周又は内部が磨り消される場合が多い。この文様と注口直下のノ字文との親和性を想定するものであるが、台付鉢は大洞B2式では小型化してより浅い鉢形の形制となり、ノ字の区画内は地文を持たず丁寧に研磨され、直下の体下半部に縄文が施され、後続の大洞BC1式まで残存する。

②は、注口土器の口縁部文様が、そのまま注口直下に移入されたと想定するものである。大洞B1新式～B2古式の過渡的段階の注口土器A類の口縁部文様には、前記したように縄文地文を伴うノ字状文様が散見される(図9-2・7)。筆者はこの文様が大洞B2古式に盛行する巴状文様の母体になったと考えるが、ほぼ同時期に体下半部にも縄文地文のノ字文が現出する(図7-17・18)。

注口土器と台付鉢のノ字文の差異は、前者が1単位の

みであるのに対し、後者では4単位以上で構成される。しかし台付鉢のノ字文の原初的形態と注口土器の口縁部文様の描出手法は類似しており、また両者とも磨消縄文の例が多く、時期的にも限定される等、両者の文様は相関性を有していたことが想定される。従って①・②は本来一体の関係にあったと判断されよう。

③は、注口基部の巴状の膨らみの内、巴状の尖端部分が沈線で表現されたと考えるものである。大洞 B1 古・新式の注口基部には巴状の膨らみを持つ例がしばしば散見されるが、巴状の先端は右側から左へ上向きに巻き込む例が多く（図 7 - 15、図 8 - 19・31）、逆の例は少ない（図 8 - 32）。注口直下のノ字文は必ず左からカーブを描きノ字となっており、逆の例は存在しない³¹⁾。その点では台付鉢も同様であり、ノ字文の成立に当たって、③の案は妥当とはいえないであろう。

上記の3案以外で筆者が注目するのは、「逆ノ字」の例に当たるが、図 8 - 33 の長森例である。長森例は大洞 B1 新式に位置づけられ、注口基部を囲った三叉状区画の一端が開いて、細く尖った磨消縄文の文様が垂下される。正面から見ると、注口を中心に菱形の区画が形成され、その下端が逆ノ字状に突出し、上端は双頭渦文となる。実は大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階には、先に記したようにノ字文が体部文様の下端の区画線としての役割を果たしている。また後続する大洞 B2 古式にも稜線からノ字文が垂下される例が多く、体下半部に沈線が囲繞されるノ字文は、大洞 B2 新式以降に多くなる。その意味で、長森例はノ字文の原初的形態を呈しており、筆者はこのような例が発展してノ字文の成立に至ったと私考している。同様の例が図 18 - 1 の上平例で、下端の左側がノ字状、右側が渦巻き状を呈するが、時期的には後続する（大洞 B1 新式～B2 古式の過渡的段階）。

ノ字文は大洞 B2 古式～同 BC1 式にかけて、A・B 両類に多用されるが、大洞 BC2 式では古相にのみ認められる。大洞 BC2 式の古相は、頸部と肩部の境界が強く屈折し、肩部が短く張り出した形制で、体下半部に截痕列を持たないのが特徴であるが、このような類型にのみノ字文が施される（図 7 - 42～44）。一方肩部が段と化し、体下半部に截痕列を囲繞した新相の注口直下は、双頭渦文で占められている。このことからノ字文は双頭渦文よりも早い段階に姿を消したと言えるであろう。

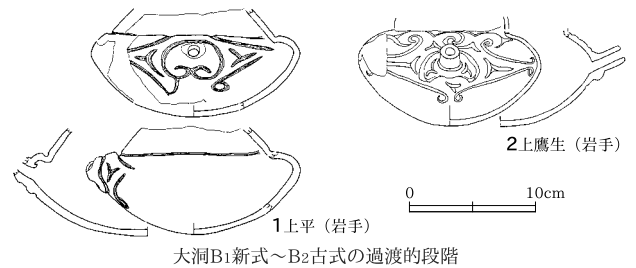


図18 ノ字文・双頭渦文関連資料

なお、ノ字文に関連して注口基部直下の三叉文について触れておきたい。大洞 B1 古式の注口直下には二袋状突起や巴状の膨らみが多用されるが、この膨らみの部分に倒立状に対向した三叉状の沈刻を施した例が見られる（図 8 - 19）。入組みを持たずに、注口直下の窪みを囲う対向した構成となるが、後続の大洞 B1 新式にも継承される（図 5 - 21、図 7 - 15）。また大洞 B1 新式では半球状の膨らみの出現に呼応して、入組三叉文の沈刻の存在も明確になる（図 8 - 29）。それ以降の大洞 B2 古式には入組三叉文が通例となり、同 BC2 式の新相まで多用される。しかし大洞 BC2 式終末の段階では、注口基部に環状隆帯、更に外周には菱形の隆起装飾が配され、両者が注口直下で結合して突起が付されるようになる。その結果従来三叉文が沈刻された部位が失われてしまい、入組三叉文は姿を消すが、図 13 - 20 の注口直下の巴状の沈刻は、その名残をとどめた例であろう。

注口直下の入組三叉文は、大洞 B1 新式～同 BC2 式まで一貫して用いられており、注口土器に施された文様の中でも最も長期にわたった文様要素として、特筆されるものである。

（2）注口直下の双頭渦文について

双頭渦文とは二つ並んだ渦巻き状の沈線文様で、大洞 B2 式～同 BC2 式にかけて、前記したノ字文と共に注口直下にしばしば認められる。その初現は大洞 B1 新式に求めることができるであろう。

大洞 B1 新式は、前記したように無文の注口土器 A 類が主体であるが、体上半に全周化した文様を有する例が存する（図 5 - 21、図 8 - 34）。両例とも体部（肩部）文様帯の下端の区画沈線が注口直下で垂下して、下向きの渦巻きや、反転して逆鉢巻き状の文様が描出されており、図 8 - 33 の正面の肩部文様の上端にも上向きの双頭渦文が認められる。図 18 - 1・2 も注口付近の菱形区画の下端が渦文で描出された例で、1 はノ字文を伴っ

ている。恐らくこれ等の資料が、大洞 B2 古式以降の双頭渦文の母体になったと考えられる。

大洞 B2 古式の双頭渦文は、左右から伸びた沈線が注口直下で下向きに背向して外側に渦巻くのが通例であり(図 2-2)、「3 字状」の沈線を横倒しにした例(図 2-1)も見られるが、ノ字文と同様に注口付近のみの構成となる。大洞 B2 新式では、体下半部に圍繞した沈線から垂下した双頭渦文の間に、菱形文を付加して錨形をなす例(図 7-28)が現出する。しかし大洞 B2 古式～同 BC1 式までは、前記したノ字文が一般的であり、双頭渦文が顕著となるのは大洞 BC2 式で、特にその新相では文様のバリエーションが豊富に認められる。

大洞 BC2 式では、それまでの下向きに背向して外側に渦巻く類型(図 12-18)は少なくなり、注口直下に菱形文を配して、その頂点から上向きに伸びた沈線が内側に渦巻く例が多くなる(図 12-10・11)。その変形として渦巻文が複線化した例(図 7-46、図 12-13・15・24、図 13-2)や、菱形文の上方斜辺が渦巻文と結合した例(図 12-6・7・25)、また巴状文様に関わる「逆の字状」の文様も散見される(図 12-3・16)が、当該期には従前の体下半部上端の沈線から延長した文様ではなく、独立した文様への変化が看取される。

当初双頭渦文は、下向きに内側から外に渦巻く単沈線で出発した文様であるが、菱形文が付加され、沈線は複線化して、大洞 BC2 式の新相に発達が顕著となる。しかしその終末の段階では、磨消縄文が取って代わり、姿を消すことになる。

(3) 体下半部の磨消縄文について

大洞 BC2 式終末の段階になると、体下半部に磨消縄文の文様が盛行する。それまでの体下半部の文様は、前出のノ字文や双頭渦文等で構成されるのが通例であったが、当該期の磨消文様の登場と共に姿を消しており、この体下半部の文様帯は大洞 C1 式以降主要な文様帯として発展して行くことになる。

大洞 BC2 式終末の段階の磨消縄文の中でも古相を示す例が、図 13-7・11・24 のような注口直下に 2 個の巴状文様を反転させた構成であろう。更に 4 単位で構成された例が図 13-23、図 19-2 であり、巴状文様の變形した例が図 7-45、図 13-13・19・20・22 である。筆者は上記の反転した巴状文様を磨消文様の系

列の一つに想定している。

反転した巴状文様の初現は、大洞 B2 新式の B 類(図 10-13、図 17-5)に求められる。大洞 BC1 式の B 類(図 11-28)に継承され、A 類にも双頭渦文の巴状文様が認められる(図 7-34)。上記の系譜を引いて大洞 BC2 式の新相の図 19-1 が成立したと考えられるが、この巴状文様は上端の沈線から独立した構成となり、沈線からの延長として施された従前の文様とは異同が存する。図 19-1 に縄文が施され、副要素や補助要素が付加されたことで、大洞 BC2 式終末の段階の巴状文様の磨消縄文の成立に至ったと想定される。巴状文様は元来大洞 B2 古式～同 B2 新式の口縁部・口頸部文様帯や肩部文様帯に多用された文様であるが、これ等の文様の衰退に伴い、注口直下の体下半部に脈絡を保ったことになるであろう。

大洞 BC2 式の新相には、図 19-1 のように、体下半部の正面(注口直下)・背面・側面の 4 単位の文様を有する例が現出する(図 12-7・11・13・24)。特に図 19-1 は側面が尖った構成で、突出部分がより発展した形態が大洞 BC2 式終末の段階の図 19-3・8 であり、大洞 C1 式の図 19-5・6・9 へと継承される。文様帯の上限は突起下の沈線で区切られており、下限の区画は認められないが、底部を区画した例は散見される(図 13-13・18・19、図 19-1)。

体下半部の全周化した文様には、上記のような突出文様と曲線文様を交互に配し連続した文様の系列(図 19-3・8)と、図 19-2 のように同一文様を 4 単位配し、磨り消し部を介して途切れた文様の系列が存する。また注口直下と側面で異なった文様が施される例においても、磨り消し部を介して文様が途切れ個々独立した構成を持つ例(図 13-19)と、文様が途切れずに連続と続く例(図 13-18)が認められる。この文様の連続・非連続の差異は、後者から前者への発展形態とも受け取れるが、大洞 C1 式にも後者の系列は存しており(図 19-6)、時期差ではなく雲形文内部での系統差と見なすべきものであろう(高橋龍三郎 1981)。

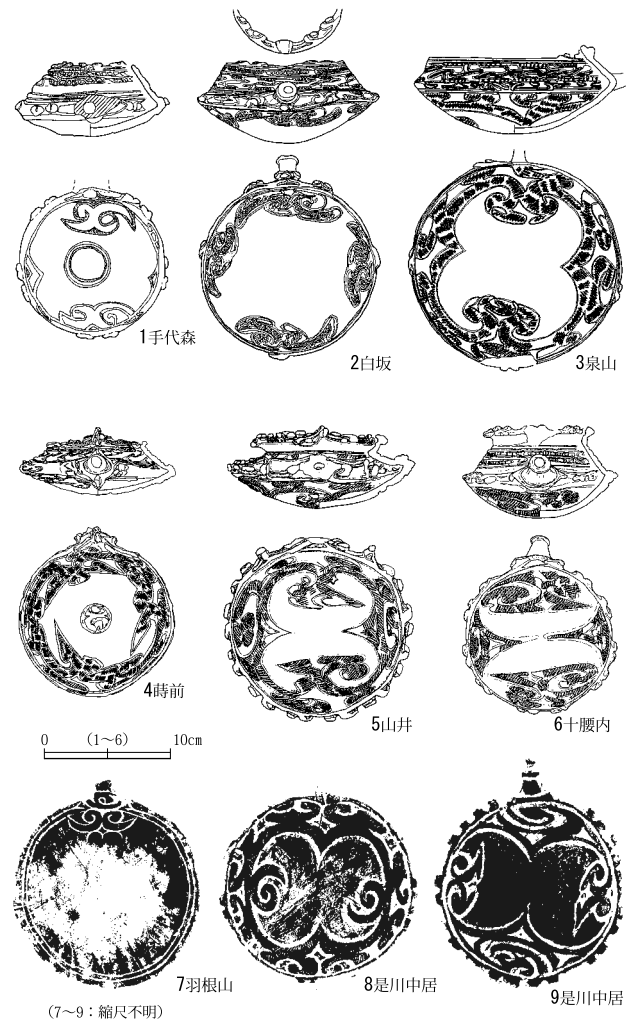
次に、大洞 BC2 式終末の段階と同 C1 式の磨消縄文の差異を検討してみたい。大洞 C1 式の体下半部の文様は、下限の区画線を持たず、雲形文を半割りにした文様を 4 単位乃至突出文様と交互に施した例が多い(図 19

ー 5・6・9)。雲形文は一端が丸味を帯び、もう一端は尖鋭で、底部側がやや直線的となる(図 19-6)。種々の副要素・補助要素が加えられ、複雑な文様となるが、基本的には大洞 C1 式の腕形等に一般的な雲形文を二分した形状に等しい。

一方大洞 BC2 式終末の段階の磨消縄文は、同 C1 式で見た雲形文はまだ認められない。前記したように反転した巴状文様の例(図 19-2)が多く、突出文様を有する例においても巴文様を配したり(図 19-8)、両端が丸味を帯びた逆鉢巻き状の構成を有しており(図 19-3)、一端が先鋭化する雲形文には至っていない。またボジ文様の幅が太く、その占める面積も大きく、大洞 C1 式の洗練された文様に比べると、やや生硬な印象を受ける。図 13-21 の上平例は、体下半部に雲形文と突出文様が交互に配され、頸部に K 字文を合わせ持つ例である。体下半部のネガ文様の諸要素は細く加えられ、文様の区画線には陥入した文様が付加されないため、全体的に硬直した印象を受ける。頸部の K 字文は崩れ、平行化の過程にある截痕列の様相を呈しており、大洞 C1 式に位置づけられる公算が大であろう。

大洞 C1 式の注口土器の体下半部の文様は、同式の腕形の文様に共通しており、その成立を一概に注口土器の系統に求めることはできない。しかし雲形文の部分を除くと、先行する図 19-3・8 は大洞 C1 式の様相に近似しており、突出文様を有する類型については系統性を有していたと判断されよう。

図 19-4・5 は、大洞 BC2・C1 式のいずれに含めるのか、逡巡する資料である。4 の形制は低平化が著しく、口端は短く外折するが、正面に大型突起が付されており、B 類の系統にある。頸部の K 字文は残存するものの、截痕充填の区画が入組文からは独立した構成となっており、形骸化が認められる。体下半部の文様は、先端が尖った雲形文が 3 単位連続して配置され、底部の円形区画内に肉彫の手法による X 字状の浮文が施されるが、底部の浮文は大洞 BC 式にはない特徴である。5 は A 類の系統にあるが、頸部が陥没気味で、正面から頸部文様は確認できない。口端と肩部が突起列と化しており、口縁部は短く外折する。両例の形制は A・B 類の区分を困難にしており、先に指摘した両類の融合化を示唆する資料であり、筆者は大洞 C1 式の古相に位置づける。6 も



1~3・7・8: 大洞 BC2 式、4~6・9: 大洞 C1 式

図 19 大洞 BC2~C1 式の体下半部文様

大洞 C1 式の古相の例であるが、頸部文様には末端の咬み合わない羊歯状文風の文様が囲繞される。しかし小葉部に相当する截痕は細かな刻目へと変化しており、形骸化の過程が看取される。

以上、体下半部の磨消縄文について、反転した巴状文様からの系統を検討して来たが、その初現となる文様は既然大洞 B2 新式に認められており、前記した双頭渦文の関与する余地はまず認め難いと言えよう。しかし大洞 BC2 式の注口直下に配した双頭渦文の変形として、7 のような対称的に配置した巴状文様も認められており、何らかの関係を有していたことを窺わせる。

肩部の横長の B 突起は、大洞 BC2 式終末の段階から多用される。先行する大洞 BC2 式の新相では、肩部の要所に突起が付されたり(図 19-1)、上下で入り組む陰刻により突起風に強調される例が認められるが、その終末の段階では肩部が隆帯化し、粘土粒と深い陰刻で

B突起列が作出される。突起は正面の菱形の隆起装飾の両端や、背面・側面といった要所に等間隔に配置され、全周に展開するものではない(2・3・8)。しかし大洞C1式の突起列はその間隔が短く又は連続的となり、全周化に至っている(5・6・9)。

7 結 語

以上雑駁ではあるが、東北北半における後期末(瘤付第Ⅳ段階)～大洞BC2式までの注口土器の変遷について論じて来た。基本的には、山内清男氏の5階梯の変遷案(後期末→大洞B1式→同B2式→同BC1式→同BC2式)に準拠しており、大枠では8階梯、細別では10階梯の変遷案を提示することになった。

特に大洞B1式と同B2式を新古に二分し、大洞B1式と同B2式の過渡的段階の抽出及び大洞BC1式の積極的な評価に努めており、更に大洞BC2式については三分される可能性を指摘した。結果的に詳細な変遷案を示すことになったが、一部に一括資料の援用を得ているものの、殆どが型式学的検討から導出した机上の編年であり、出土状況に基づく検証は今後に残された課題である。

晩期前半の注口土器の型式変化は、山内氏によって大枠の指針が示されて来た。即ち形制は低平化の過程にあり、口縁部は退縮、頸部は拡大、肩部は縮小の変遷を辿っており、その変化の過程の細かな跡づけを筆者なりに試みたのが、本稿の骨子となるものである。特に注口土器A類の形制の変化を基軸に据えて、文様帯構成や文様要素の系統的变化を検討して来たが、後期末の壺形の無文化したA類から、文様帯の重畳が著しく、複雑な磨消縄文で構成される大洞C1式の注口土器への変遷を型式学的に跡づけるならば、少なくとも山内氏の5階梯は必須の区分であり、更にその間隙を埋め合わせることで、最終的には10階梯の変遷案を提示する結果となった。

筆者は変化の過程を鋭敏に示す器種として、注口土器を型式区分の指標に位置づけている。しかし注口土器のみが突出した編年案であることは否めず、他器種との整合性については多くの課題が残されている。特に大洞BC1式の評価は、入組三叉文と羊歯状文の共存を指摘した「雨滝式」に深く関わる問題であり、他器種からの明確な指示が求められる。また東北北半の注口土器が突出することにより、他地域との併行関係にも支障を来す

ことになる。取り分け東北南半の注口土器との対比は不十分であり、今後北半に準じた注口土器編年の構築が求められる。

筆者が提示した編年は、晩期初頭においては鈴木克彦氏の旧編年案を、また大洞B2式以降では金子昭彦氏の編年案を追認することになった。鈴木氏の旧案では大別区分に問題を残すものの、筆者が大洞B1新式に位置づける「大洞B式の中でも古手」の段階が抽出されており、今日的にも通用となる優れた内容であったと思われる。その意味で、後年改変が加えられたことは遺憾と言わざるを得ない。金子氏は最終的には大洞B2式を2細分、同BC2式を3細分しており、大洞BC1式を含めると、筆者の大洞B2～BC2式の編年にほぼ合致した区分となっている。しかし先に記したように、指示する内容については異同が存しており、整合性をいかに求めて行くのか、今後の課題であろう。

筆者は型式変化において文様帯構成を重視したが、それは林謙作氏の研究に負う所が多い。林氏は注口土器の文様帯の拡大・分裂する過程に型式変化の基準を見出し、同氏の指摘した文様帯の変遷序列は、多少の例外は存するものの、妥当性の高い指針となっている。

後期末～晩期前葉における注口土器は、極めて系統立った変遷を示している。その中で亀ヶ岡式注口土器の成立をどの段階に求めることができるのか、問題になるところである。その変遷は他の器種と同様に漸次的であり、大きな画期を設けることは困難と言わざるを得ないが、壺形とは異なった独自の形態が確立した点を重視するならば、注口土器A類の原初的形態が確立する大洞B1新式にその成立期を求めることができるであろう。またA・B両類の組み合わせの確立と、文様帯やその後継に継承される諸属性の確立を評価するならば、大洞B2古式の段階に画期が設定されるであろう。

しかしいずれの案をとるのか、それを画定するだけの十分な根拠を筆者は持ち合わせておらず、前者の段階に亀ヶ岡式注口土器の母体が形成され、後者の段階になって飛躍的な発展が認められる点を指摘するにとどめざるを得ない。

今回は、亀ヶ岡式前半期の代表的な類型であるA・B類についてのみ考察して来た。その他にも壺形の類型であるC類も存するが、本稿では殆ど触れることができな

かった。C類は後期末～大洞 B1 式にかけては A類と共に主導的な位置を占めており、無視できない類型であるが、大洞 B2 ～ BC1 式の様相が判然とせず、大洞 BC2 式以降になって再び盛行する。その系譜については、改めて検討してみたい。(2002 年 12 月 27 日稿了)

註

- 1) 中谷氏の集成的研究の背景に、杉山壽榮男氏編集の『原始文様集』(1923 年刊)と『日本原始工芸』(1928 年刊)が寄与していたことは、「附録二 注口土器資料表」(中谷 1927a)から明らかである。『日本原始工芸』の刊行年次が『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』の翌年であることから、『日本原始工芸』刊行前に中谷氏が同書の内容を利用できる立場にあったと推測され、同書の例言には、編輯に中谷氏の助力を得た旨が記されている。なお江坂輝彌氏によれば『日本原始工芸概説』(1928 年刊)の大部分の文章は、中谷氏の筆になるという(江坂 1972)。
- 2) 山内氏は埼玉県真福寺貝塚出土の大洞 BC 式の急須形土器に対し、「頸部(上半)と体部(下半)は隆帯状をなす肩に於いて直接に続いて居る」のが「大洞 BC 中間式」以降に見られる特徴で、「大洞 B 式では肩は頸と体(下半)との間に区劃された部分を有する」こと、また千葉県余山貝塚出土の「大洞 B 式に近い」注口付土器に対しては、「前述の如く頸と体下半との間に肩の区劃があり、壺形の器形が扁平化し終に急須形に至る道程を示して居る」と解説した(山内 1930)。これに先立ち中谷氏に対する批評(山内 1929)でも、注口土器の編年について一端を披瀝しており、『日本先史土器図譜 第 X 輯・第 X I 輯』(1941 年刊)においても、関東出土の注口土器(注口付土器、急須型土器)に対し、亀ヶ岡式との比較から解説している(山内 1967)。山内氏が型式区分の指標として注口土器を重視していたことは、1934 年東京考古学会例会席上にて、注口土器及び香炉形土器の型式別の発達について発表されたことから窺える(山内 1964)。但し『ドルメン』『學界彙報』(第 3 巻第 12 号)によると、1934 年 11 月 17 日(土)東大キリスト教青年会館にて原始文化研究会 11 月例会が開催され、「亀ヶ岡式土器」(参加者二十余名)の発表が行われているが、同年の東京考古学会例会の記録は見当たらず、原始文化研究会の誤記であった可能性が考えられる。また『日本先史土器図譜 第 X I 輯』では、1935 年原始文化研究会席上にて同様の発表が行われた旨が記されているが、1934 年の誤記であったと思われる。
- 3) 「かたち、こしらへかた。＝形製。」(『字源』角川書店に拠る)。
- 4) 芹沢氏は既に 1958 年 6 月刊行の『世界陶磁全集 1 日本古代篇』(再版)の図版解説で、雨滝遺跡出土の土器に対して「雨瀧式」の名称を用い、注口土器 2 例の層位的状況を例示していた(水野編 1958)。雨滝遺跡第 2 次調査は同年 10 ～ 11 月に実施されているので、2 例は第 1 次調査時(1953 年 4 月実施)の資料である。芹沢氏が「雨瀧式」とした図版 46 上段(図 3-2、図 16-8)は筆者の大洞 B2 新式、図版 46 下段は大洞 BC2 式(古相)に相当する。なお同書では、岩手県小鳥谷遺跡出土の大洞 BC 式注口土器(東京大学人類学教室蔵)に対し、山内清男氏が解説しているが、筆者は大洞 BC2 式(新相)に位置づけている。
- 5) 藤村氏は晩期初頭の A・B 両形態の差異に結び付けて注口部の接合方法の違いを指摘したが、該期通有の特徴とは認め

難いように思われる。

- 6) 金子氏は当初大洞 B2 式を「古い部分」、「中位の部分」、「新しい部分」と三分したが、直後に「大洞 B2 式の古い部分を大洞 B1 式の新しい部分と考えて大洞 B1 式に含めて考えた方が良いと思うようになった」(金子 1992a)と訂正した。筆者も金子氏の改訂案に賛同するが、改訂後の同氏の編年の真相が判然としない。なお同氏は「大洞 BC2 式の新しい部分」について更に新古に細分している。
- 7) 筆者が藤村氏等の分類表記を踏襲しないのは、以下の理由による。東北北半を見据えた場合、筆者の A 類とした類型(3 段構成)が後期の壺形注口土器の系譜を引き、大洞 A 式まで一貫した在り方を示すのに対し、筆者が B 類とした類型(2 段構成)は後期末葉の様相が判然とせず、晩期になって付随し、途上離脱する。筆者の A 類が主導的な位置を占め、B 類が傍系であったことは明白であり、系統性を考察する上で、筆者の A 類を表記の最初に位置づける必要があったことによる。なお鈴木克彦氏も同様の趣旨の指摘を行っている(鈴木 1997)。
- 8) A・B 両類とも大洞 B2 古式～BC1 式にかけては体部の扁平化が進行し、頸・肩の接着部の位置が低下する傾向にある。肩部上端が陥没したものについては、肩部中央の最高点を肩央と呼称する。
- 9) 山内氏の注口土器に対する記述は、以下の通りである。図版・参考図版番号は筆者の判断で省略したが、本稿掲載の資料については本稿挿図番号を付した。「後期では注口土器は多く壺形であって(番号省略)、体部に注口が加えられている。晩期の始め大洞 B1 式でも同じ形制を示しているが、多くは無紋となる。大洞 B2 式(図 3-1～3)では体部が低平となり、皿形の下半部の上に肩が付くようになる。注口付近を中心として沈線文様が生じはじめる。大洞 BC 式(図 3-4)になると肩の部分が縮少し、頸の下方が広がる。沈線の文様が(1)、外折する口唇部(2)、頸部(3)、肩部(4)、体下半部等各別帯として発達する。大洞 C1 式(図 3-5)では肩は縮小し、隆帯状となる。口唇も縮小する。口端及び肩には厚い突起列又は近似のものが加えられる。頸部には前代大洞 BC 式の頸部文様(図 3-4)の一部から系統を引く磨消縄文の文様帯を持つようになる。体下半の磨消縄文も前代の沈線文様から出発したものである。大洞 C2 式(番号省略)も C1 式と大体同様の形制を持っている。但し底は丸底でなく平底となる。文様帯も手法の変遷があるが、大差ない。しかし、壺形の体上部を持った形態が多少出現する。大洞 A 式では今迄の体部がつぶれた、坪井博士が古く算盤玉形と形容した形から、再び壺形に復古する。しかし体中央には嘗てあった肩の隆帯、注口付近の装飾は残存する。次の大洞 A' 式には注口付土器は無くなるらしい。」(山内 1964)。
- 10) 曲田 I 遺跡 E III-011 住居跡出土土器を大洞 B2 式に位置づける研究者は須藤隆氏(須藤 1992)、大洞 BC1 式に位置づける研究者は林謙作(林 1993)、金子昭彦(金子 1992a)、鈴木加津子(鈴木加津子 1993)の各氏である。但し金子・鈴木両氏は大洞 BC2 式の存在も指摘しており、ある程度の時間幅を認めている。なお報告者は大洞 B2 式と同 BC 式が同一層中に混在していたと見なしているが、時期的にはかなり近接していたと考えている(鈴木隆英 1985)。
- 11) C 字文とは上下で対向する棘状沈刻と、渦卷文・上下で入り組む弧線文等が交互に配置された文様を指し、ボジ文様が C 字又は X 字状を呈する。大洞 B1 新式に初現が認められ、大洞 B2 新式～同 BC2 式に多用される文様である。
- 12) 対向する三叉文の呼称として、魚眼状・入組・玉抱の各三叉文が存するが、研究者によって指示する内容が異なるた

- め、筆者は須藤隆氏の分類(須藤ほか 1995)を参考に、以下のように定義した。「魚眼状三叉文」は円文・円形刺突・円文に類する文様の左右に三叉文が対称的に配置されるもので、中心文様を囲うように配され、三叉文の末端が中心文様に接することは稀である。「入組三叉文」は対向する三叉文の一端が中央で入り組んで、ほぼ点対称に展開するもので、咬合部は接着と未接着とに二分され、前者では円形・楕円形・円形刺突を巻き込む形態と反転のみの形態が見られ、後者にも一方のみ円形刺突を巻き込む形態が存する。これ等には従来玉抱三叉文と称された類型も含まれるが、入組三叉文との判別が困難であるため、入組三叉文に包括している。
- 13) 図5-21を大洞B1式に位置づける研究者が大勢であるが、鈴木克彦氏は大洞B2式に位置づけている(鈴木克彦 1997)。金子昭彦氏も当初大洞B2式の古い部分(金子 1991)に位置づけたが、大洞B1式(新)に修正している(金子 1993)。
- 14) この場合の単位文様とは、基本的な単位となる文様要素を機械的に配した在り方を指しており、異なった文様要素を交互に配置した構成から、突起等とは関係なく同一文様要素(ポジ・ネガ文様を問わず)を繰り返し入れ込んだ文様構成への変化として用いており、「追い込み式のくり返し」(今村 1983)の文様に相当する内容である。従って図5-14の体部文様は単位文様を構成していることになるであろう。
- 15) 西田泰民氏によると、同じ馬淵川流域でも上流域の岩手県側では胎土に海面骨針が殆ど含まれないのに対し、下流域の青森県側ではある程度含まれるといった差異が存するという(西田 1994)。また後期末～大洞B1式では、新井田川中・上流域に羽状縄文の粗製深鉢が顕著であるのに対し、馬淵川流域ではLRが主体といった差異が存するようである。
- 16) 大洞B1古式の装飾口縁の代表例としては、『北の誇り・亀ヶ岡文化』(青森県教委 1990) 22頁所収の青森県青森市沢山遺跡出土の大型注口土器(器高31cm)が挙げられる。A類の数少ない有文の注口土器として重要である。
- 17) 御殿山式の注口土器では、口縁部と頸部、頸部と体部の境界に連鎖状貼付文を圍繞する例が多く、また頸部文様帯を構成するものも認められる。
- 18) 大洞B1古式B類の有文の例としては、『縄文の美—是川中居遺跡出土品図録 土器編—』(八戸市博 1985) 43頁4(『縄文土器大成 4 晩期』図版211)が挙げられる。口頸部・体部とも4単位の魚眼状三叉文(磨消縄文)で構成され、口頸部の内彎が著しい。
- 19) 図1-1の諏訪堂例の頸・体部境界の隆帯もⅡb文様帯の名残として捉えられるが、B類に含めるかどうかは判断しかねる。大洞B1古式A類でⅡb文様帯を残す例は、青森市玉清水遺跡に認められる。『小杉嘉四蔵 蒐集考古学資料写真集』(小杉 1988)の表紙資料(『北の誇り・亀ヶ岡文化』194頁所収)で、頸部文様帯は魚眼状三叉文と弧線・帯縄文が交互に配置される。註16の沢山遺跡を含め青森平野に特異な注口土器が散見されるのは、御殿山式の分布域である北海道渡島半島との窓口としての地理的位置に関連しているようにも思われる。
- 20) 東北北半一円だけではなく、北海道苫小牧市柏原5遺跡(工藤ほか 1997)でも認められており、広域的な広がりをもっている。
- 21) 報告書では同一個体との記載はないが、並列して提示されており、土器観察表によると捨て場2の同一のグリッド・層位から出土している(宇部ほか 2002)。口縁部下端と頸部上端の径もほぼ等しく、双方を合成しても何ら違和感はない。なお大洞B1新式～B2式の過渡的段階のA類の良好な

資料は青森県玉清水遺跡で2例認められる(『北の誇り・亀ヶ岡文化』22・64・195頁所収)。

- 22) 大洞B1新式～B2式の過渡的段階のB類の例としては、青森県弘前市小森山東部遺跡出土の大型注口土器が挙げられる(今井 1968)。口唇部は縄文地文の魚眼状三叉文、体中央部には縄文帯が圍繞され、注口付近に磨消縄文の文様が施される。しかし提示された実測図は写真図版と対比すると、図上復元の部分が多く正確性を欠いており、対象からは除外した。
- 23) 林謙作氏は「横に相並ぶ二個の瘤」のあいだに山が一つ割りこんだようなものを「A-B突起」と呼称している(林 1993)。しかしA突起とB突起の折衷形態としての意味が読み取れ、好適な呼称とは思えないため、筆者は「三山状突起」の名称を用いる。
- 24) 金子昭彦氏は図10-12・15・16を大洞BC1式に位置づけている(金子 1991・92a)。同氏は大洞BC1式の装飾文様の一つとして、「周囲に半円形の文様を配置することの多い方形の入組文」(金子 1992a)を挙げていることによるものであろう。
- 25) 蔭前例(図7-45)について金子昭彦氏は「大洞C1式の古い部分」に位置づけている(金子 1991)。
- 26) ネガ文様を構成する3要素(主要素・副要素・補助要素)については、高橋龍三郎氏の定義に準拠している(高橋龍三郎 1981)。
- 27) 筆者が確認できた大洞C1式B類の例は、北海道女名沢遺跡(鈴木・林 1981)、青森県亀ヶ岡遺跡(青森県立郷土館 2001)、秋田県地方遺跡(石郷岡ほか 1987)等数例に過ぎない。
- 28) 芹沢氏(芹沢 1960)は蔭前例(図7-49)を大洞C1式に、藤沼氏(藤沼 1989)は蔭前例(図13-18)を大洞C1式に、鈴木加津子氏(鈴木加津子 1993)は細野例(図12-18、図13-19)を大洞C1式に位置づけている。また鎌木義昌氏も青森県八幡遺跡出土の同様の注口土器(倉敷考古館蔵)に対して、大洞C1式の編年の位置を与えている(水野編 1958)。金子氏は「大洞BC2式の新しい部分」を細分して、筆者のB類をその中でも新しい段階に位置づけている(金子 1991)。なお鈴木克彦氏は筆者のB類(図7-50、図13-18・19)については大洞BC式に含めるが、筆者のA類(図7-41)については大洞C1式に含めている(鈴木克彦 1997)。
- 29) 山内氏は『日本先史土器図譜 第XⅠ輯』(1941年刊)の群馬県板倉沼出土の急須型土器に対して、「又下半部の磨消縄紋も寧ろ大洞B～C中間式のものとして並行して居る。」(山内 1967)と解説し、大洞BC式段階の注口土器の体下半部の磨消縄文の存在を指摘していた。また『日本原始美術 1 縄文式土器』(1964年刊)の参考図版に掲載された蔭前例(図13-18)に対しても、大洞BC式の型式名を付与していた。上記からも、山内氏が当該段階のB類を大洞BC式の範疇に含めていたことは明らかであろう。
- 30) 『縄文の美—是川中居遺跡出土品図録 土器編—』(八戸市博 1985) 44頁5の是川中居例(『縄文土器大成 4 晩期』図版205)は、口縁部が内彎して内傾する特異な例で、口縁部文様は末端が尖鋭化した曲線的な磨消縄文で構成されるが、肩部が短く、頸部が伸張した形制から、大洞B1古式(又は同新式)に位置づけられる。
- 31) 右側からカーブを描いて逆ノ字文となる例は、青森県玉清水遺跡(註21)に認められ、大洞B1新式～B2古式の過渡的段階に位置づけられる。

引用文献

- 青森県教育委員会 1990『北の誇り・亀ヶ岡文化―縄文時代晩期編―』図説「ふるさと青森の歴史」シリーズ③
- 青森県立郷土館 2001『青森県立郷土館収蔵資料図録―第3集・考古編（2）―』
- 安孫子昭二 1982「第五章 縄文時代 後・晩期」『村山市史 別巻一 原始・古代編』村山市史編さん委員会編
- 石郷岡誠一ほか 1987『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書―地方遺跡・台B遺跡―』秋田市教育委員会
- 今井富士雄 1968「小森山東部遺跡」『岩木山―岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書―』岩木山刊行会
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968「十腰内遺跡」『岩木山―岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書―』岩木山刊行会
- 今村啓爾 1983「文様の割りつけと文様帯」『縄文文化の研究 5 縄文土器Ⅲ』雄山閣
- 宇部則保ほか 2002『八戸市内遺跡発掘調査報告書 15 是川中居遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集
- 江坂輝彌 1972「あとがき」『日本考古学選集 24 中谷治宇二郎』築地書館
- 葛西励ほか 1983『木戸遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第12集
- 金子昭彦 1991「大洞B2式の磨消縄文について（上）―東北地方北部を中心として―」『研究紀要』XⅠ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 1992a「大洞B2式の磨消縄文について（中）―東北地方北部を中心として―」『研究紀要』XⅡ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 1992b「雨滝式」の再検討」『北奥古代文化』第22号 北奥古代文化研究会
- 金子昭彦 1993「大洞B2式の磨消縄文について（下）―東北地方北部を中心として―」『研究紀要』XⅢ 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 鎌田祐二 2001『近内中村遺跡―第1次～第7次発掘調査の概報―』宮古市教育委員会
- 工藤肇ほか 1997『柏原5遺跡―一般国道235号日高自動車道苦東道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ―』苦小牧市埋蔵文化財センター
- 小杉嘉四蔵 1988『小杉嘉四蔵 蒐集考古学資料写真集〔玉清水（1）遺跡〕』青森縄文文化を語る会
- 小林圭一 1999「東北地方 後期（瘤付土器）」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 小林達雄 1994『縄文土器の研究』小学館
- 斉藤淳ほか 1979『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書―Ⅰ―』岩手県文化財調査報告書第31集
- 酒井宗孝ほか 1986『駒板遺跡発掘調査報告書―東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査―』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集
- 佐々木清文ほか 1986『手代森遺跡発掘調査報告書―北上川水系大沢川の河川改修工事に伴う事前緊急発掘調査―』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集
- 佐原真 1979『日本の原始美術 2 縄文土器Ⅱ』講談社
- 塩谷隆正・山岸英夫 1985『長森遺跡発掘調査報告書』青森市教育委員会
- 鈴木加津子 1993「真福寺小考―安行式と亀ヶ岡式における編年と分布の推敲―」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 鈴木克彦 1981「亀ヶ岡式土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』雄山閣
- 鈴木克彦 1997「注口土器の研究―主として東北地方の注口土器集成―」『研究紀要』第2号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木克彦 2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木公雄・林謙作編 1981『縄文土器大成 4 晩期』講談社
- 鈴木隆英 1985『曲田Ⅰ遺跡発掘調査報告書―東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査―』岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集
- 須藤隆 1992「東北地方における晩期縄文土器の成立過程」『東北文化論のための先史学歴史学論集』加藤稔先生還暦記念会
- 須藤隆ほか 1995『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究会
- 芹沢長介 1960『石器時代の日本』築地書館
- 高橋正之ほか 1980『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書（昭和52年度・53年度）』岩手県埋文センター文化財調査報告書第13集
- 高橋龍三郎 1981「亀ヶ岡式土器の研究―青森県南津軽郡浪岡町細野遺跡の土器について―」『北奥古代文化』第12号 北奥古代文化研究会
- 高橋龍三郎 1991「第2節 縄文時代晩期前半の土器」『縄文沼遺跡発掘調査報告書』小泊村教育委員会・早稲田大学文学部考古学研究室
- 高橋龍三郎 1999「東北地方 晩期（亀ヶ岡式）」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 高柳圭一 1993「1992年の縄文時代学界動向 土器型式編年論 晩期」『縄文時代』第4号 縄文時代文化研究会
- 種市進 1983『道地Ⅱ遺跡・道地Ⅲ遺跡発掘調査報告書―東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査―』岩手県埋文センター文化財調査報告書第64集
- 中村大 1992「米代川流域における亀ヶ岡土器様式―大洞B式における文様変遷の再検討とその地域性について―」『年報 能代市史研究』第2号
- 中谷治宇二郎 1926「注口土器の分布に就て」『人類学雑誌』第41巻第5号 東京人類学会
- 中谷治宇二郎 1927a「注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布」東京帝国大学理学部人類学教室研究報告第4編 東京帝国大学
- 中谷治宇二郎 1927b「日本の石器時代遺物の研究 1. 注口土器の分類とその分布（摘要）」（1999年刊『日本縄文文化の研究＜増補改訂版＞』溪水社 所収）
- 中谷治宇二郎 1936「日本新石器文化の一考究―特に分布圏と文化圏に就て―」『考古学』第7巻第1・2合併号 東京考古学会
- 西田泰民 1994「東北北部における海面骨針含有土器」『縄紋晩期前葉―中葉の広域編年』平成4年度科学研究費補助（総合A）研究成果報告書
- 八戸市博物館 1985『縄文の美―是川中居遺跡出土品図録 土器編―』目で見える八戸の歴史2
- 林謙作 1976「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』寧楽社
- 林謙作 1993「曲田Ⅰと八幡―東北北部晩期前葉の土器―」『論苑 考古学』坪井清足さんの古稀を祝う会編
- 林謙作ほか 1995『山井遺跡―縄文晩期の包含層―』一戸町文化財調査報告書第36集

- 藤沼邦彦 1989『亀ヶ岡式土器様式』『縄文土器大観 4 後期 晩期 続縄文』小学館
藤村東男 1972『東北地方における晩期縄文時代の注口土器について』『史学』第 44 巻第 2 号 三田史学会
藤村東男 1980『大洞諸型式設定に関する二、三の問題』『考古風土記』第 5 号
星雅之ほか 2000『長倉 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 336 集
三浦圭介ほか 1978『源常平遺跡発掘調査報告書—東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査—』青森県埋蔵文化財調査報告書第 39 集
水野清一編 1958『世界陶磁全集 1 日本古代篇』(再版)河出書房新社
谷地薫ほか 1992『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—一家ノ後遺跡—』秋田県文化財調査報告書第 229 集
山内清男 1929「J. Nakaya: A Study of the Stone Age Remains of Japan. I. Classification and Distribution of Vases with Spouts.」『史前学雑誌』第 1 巻第 3 号 史前学会
山内清男 1930『所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末』『考古学』第 1 巻第 3 号 東京考古学会
山内清男 1964『縄文式土器・総論』『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社
山内清男 1967『日本先史土器図譜—図版・解説—』(再版・合冊刊行)先史考古学会
山内清男ほか 1971『山内先生と語る』『北奥古代文化』第 3 号 北奥古代文化研究会

図版出典

- 青森県教育委員会 1976『泉山遺跡発掘調査報告書—一般県道櫛引上名久井三戸線道路改良工事埋蔵文化財発掘調査—』青森県埋蔵文化財調査報告書第 31 集
青森県教育委員会 1979『細越遺跡発掘調査報告書—青森西部は場整備関係埋蔵文化財発掘調査—』青森県埋蔵文化財調査報告書第 49 集
青森県教育委員会 1985『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第 89 集
青森県教育委員会 1995『泉山遺跡—道路改良事業(櫛引・上名久井・三戸線)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』青森県埋蔵文化財調査報告書第 181 集
青森県教育委員会 1998『水吉遺跡—八戸平原開拓建設事業(世増ダム建設)に伴う発掘調査報告—』青森県埋蔵文化財調査報告書第 245 集
青森県教育委員会 2001『十腰内(1)遺跡Ⅱ—県営津軽中部広域農道建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—』青森県埋蔵文化財調査報告書第 304 集
青森県立郷土館 1997『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第 40 集
秋田県教育委員会 1975『鹿角大規模農道発掘調査略報』秋田県文化財調査報告書第 35 集
秋田県教育委員会 1981『藤枝遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 85 集
秋田県教育委員会 1983『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 101 集
秋田県教育委員会 1988『玉内遺跡発掘調査報告書—一般国道 282 号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第 171 集
秋田県教育委員会 1994『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅢ—小田Ⅳ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第 243 集
秋田県教育委員会 1994『白坂遺跡発掘調査報告書—県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第 244 集
秋田県教育委員会 1994『桂の沢遺跡発掘調査報告書—小滝阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査—』秋田県文化財調査報告書第 247 集
秋田県教育委員会 1996『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ—片野Ⅰ遺跡—』秋田県文化財調査報告書第 265 集
秋田県教育委員会 1998『虫内Ⅰ遺跡—東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅩⅢ—』秋田県文化財調査報告書第 274 集
秋田県埋蔵文化財センター編 1983『高石野遺跡発掘調査概報』琴丘町教育委員会・秋田県埋蔵文化財振興会
一戸町教育委員会 1986『蒔前—岩手県蒔前遺跡出土資料の図録—』一戸町文化財調査報告書第 17 集
岩手県教育委員会 1981『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—Ⅳ—(一関地区 東裏遺跡)』岩手県文化財調査報告書第 55 集
岩手県埋蔵文化財センター 1982『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書—盛岡市 萩内遺跡—』岩手県埋蔵文化財調査報告書第 32 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書—東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 100 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書—国道 395 号改良工事関連遺跡発掘調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 225 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『上鷹生遺跡発掘調査報告書—上鷹生ダム建設関連遺跡発掘調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 253 集
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999『大芦Ⅰ遺跡発掘調査報告書—ふるさと農道緊急整備事業大芦地区関連遺跡発掘調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 306 集
大迫町教育委員会 1979『小田遺跡発掘調査報告書』大迫町埋蔵文化財報告第 4 集
久慈市教育委員会 1985『大芦遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財報告書第 5 集
古代学協会 1997『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』古代学研究所研究報告第 5 輯
五城目町教育委員会 1984『中山遺跡発掘調査報告書』
三戸町教育委員会 2000『沖中遺跡—沖中(2)遺跡 発掘調査報告書』三戸町埋蔵文化財調査報告書第 1 集
階上町教育委員会 2000『滝端遺跡発掘調査報告書—県営南の郷中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—』
八戸遺跡調査会 2002『是川中居遺跡—長田沢地区—』八戸遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書第 2 集
八戸市教育委員会 1988『八幡遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第 26 集
平賀町教育委員会 1979『石郷遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第 7 集
盛岡市教育委員会 1990『上平遺跡群(上平遺跡)—第 4 次発掘調査概報(遺構・土器)—』
盛岡市教育委員会 1995『上平遺跡群(猪去館・上平Ⅱ遺跡)—平成 4・5 年度発掘調査概報—』